マリア様がみてる Another ~シスター&シスター~

夏緒七瀬

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「マリア様がみてる」が２０周年と言うことで、昔書いてお蔵入りにしていた「マリア様がみてる」の二次創作を載せてみることにしました。

原作の続きという位置づけの物語で、「フェアウェルブーケ」「リトルホラーズ」、最低でも「ハローグッバイ」まで原作を読んでいる方が対象です。アニメだと４期の最後まで見ていれば話しについていけると思います。

物語の内容は紅薔薇のつぼみ松平瞳子がマリア像の前で出会った生徒と交流を深めて、妹をつくるまでの物語です。オリジナルキャラクター中心で物語が進んでいくので、オリ主嫌いな方はご遠慮ください。

私が「瞳子ちゃんに妹ができる話が読みたいなあ」という欲求のままに書いた二次創作です。あと菜々ちゃんの活躍とかもっとみたいなあって。実は途中までしか書いてないので完結するかは分りません。なので感想とか評価いただけると嬉しいです。

目　次

プロローグ　リリアン女学園とマリア様のお庭 ―― 1
1　蝶と蜂 ―― 5
2　山百合会とお姉さまたち ―― 10
3　写真とタイ ―― 16
4　茶話会と由乃さま ―― 21
5　再会と下級生 ―― 26
6　ひとりぼっちとマリア様 ―― 29
7　先入観と勘違い ―― 32
8　呼び出しと呼び捨て ―― 35
9　自己紹介とお手伝い ―― 40
10　心ここに在らずと聖域 ―― 46
11　早起きと朝の空気 ―― 49
12　居眠りと妹 ―― 51
13　幻滅と約束 ―― 53
14　飴とごちそうさま ―― 56
15　心配と同情 ―― 62
16　取材と新聞部 ―― 65
17　菜々さんとあっけらかん ―― 68
18　積極的と一抹の ―― 70
19　わだかまりと結び直し ―― 74
20　俎板と私なんか ―― 77
21　輪の中と輪の外 ―― 81
22　祐巳さまと憧れ ―― 83
23　マリア様とシンデレラの魔法 ―― 88

24 衣替えとマスタードタラモサンド ―― 91
25 嘘と仮面 ―― 94
26 曇り空と胸騒ぎ ―― 100
27 かくれんぼと雨 ―― 103
28 姉妹とロザリオ ―― 107
29 青い傘と紅薔薇の姉妹 ―― 112
30 ごめんなさいと罰 ―― 116
31 本心と強がり ―― 118
32 光栄と譲れないもの ―― 123
33 噂話とつぼみたち ―― 127
34 真美さんと日出実ちゃん ―― 131
35 かつてのライバルと祐巳さまのように ―― 136
36 絆と仲間たち ―― 141
37 誠実さと勇気 ―― 145
38 蘭さんと懺悔 ―― 149
39 部長と経験 ―― 154
40 おうどんとむくんだ顔 ―― 158
41 心の扉と小さな鍵 ―― 162
42 くもりガラスと向こう側 ―― 164
43 遠回りとたった二文字の言葉 ―― 170
44 赤い糸と虹 ―― 173
45 告白と返事 ―― 178
46 逆指名とまだ ―― 184
47 お昼休みと告白前小景 ―― 189
48 お姉ちゃんとお姉さま ―― 195

４９　ふふふとふふふ　203
５０　マリア様のお庭と薔薇の花かんむり　208
エピローグ　ごきげんようとごきげんよう　214

プロローグ　リリアン女学園とマリア様のお庭

「ごきげんよう」
「ごきげんよう」
マリア様のお庭に集う乙女たちが、今日も天使のような無垢な笑顔で、背の高い門をくぐり抜けていく。
汚れを知らない心身を包むのは、深い色の制服。
スカートのプリーツは乱さないように、白いセーラーカラーは翻さないように、ゆっくりと歩くのがここのでのたしなみ。
私立リリアン女学園。
ここは――
――乙女の園。
☆
『ロザリオを渡したところで、血も繋がっていない二人が本当の姉妹になんかなれるわけがない』
とある月曜日。
登校前に銀杏並木の先にあるマリア像の前。
ロザリオの授与をしている生徒二人を眺めながら――――
御園（みその）マリアは、そんなことを考えてしまった。
その後で「いけない」と自分を戒めるように首を振り、手を強く握った。そんな考え方は、このリリアン女学園に通う生徒にはあるまじき考え方だ。
マリアの通うリリアン女学園は、もともとは華族の令嬢のために創設されたという伝統あるカトリック系のお嬢さま学校。そのため少しばかり礼儀作法にうるさいところがあり、同級生は「さん」をつけて、上級生は「さま」つけて呼び合うのが、この学園での慣習となっている。
そして、このリリアン女学園の慣習と言えば、この高等部にしか存在しない――「姉妹（スール）」と呼ばれている制度だろう。
それこそが、今、マリアの目の前で行われていること。
マリア像の前で上級生からロザリオを授与された下級生。数珠の

先に十字架のついた美しいネックスレを首にかけられたその生徒は頬を赤らめ、その瞳にはうっすらと涙を浮かべている。
それははたから見ても――マリアから見ても、とても美しい光景であり、そして胸を締め付ける光景だった。
「スール」とは、フランス語で「姉妹」のこと言う。
そしてこのリリアン女学園の姉妹（スール）制度とは、姉が妹を導くがごとく、上級生が下級生を指導するという一風変わった伝統だった。
もともと、広義の意味での先輩後輩関係を姉妹（スール）と呼んでいたが、いつの頃からか個人的に強く結びついた二人を指すようになったと言う。そして今では、ロザリオの授与をもって姉妹（スール）となる儀式が、このリリアン女学園の最大の伝統と慣習になっている。
マリアの目の前で、たった今行われているように。
「そこの一年生――お待ちなさい」
突然に声をかけられたのは――神聖な姉妹の儀式、ロザリオの授与がようやく終わり、マリアが歩き出した時だった。
凛とした、よく通る声だった。
とても綺麗な声だったのでマリアは一瞬、マリア像に呼び止められてしまったのではと錯覚したほど。
先ほどの邪な考えを叱られてしまうのではないかと。
「はい？」
マリアは咄嗟に振り返って瞳を丸くした。
そこに立っていたのは、マリアもよく知る人物――それどころか、このリリアン女学園で彼女を知らない生徒は、一人もいないであろうと断言できるほどの人物だったから。
「あっ、あの、私に何かご用ですか？」
マリアはおそるおそるその人物に尋ねた。
整った目鼻立ちに、大きく円らな瞳。そして綺麗に巻かれた二つの縦ロール。身長が高いというわけでないのに、思わず見上げてしまいそうになるのは、上級生の威光だからだろうか？
いや、違う――マリアは直ぐにそう思った。
それは、この人が特別だからだろう。

松平瞳子（まつだいらとうこ）さま。
演劇部所属で、一年生の頃から大役を任されいたというリリアン女学園きっての名女優。
しかし、それだけじゃなく、彼女は――
紅薔薇（ロサキンシス・アン・ブウトウン）のつぼみ。
そんな特別な存在が、いったい私に一体何の用だろうか？
マリアは首を傾げずに、頭の中で必死に悩んだ。
「私に何かご用ですか――ええ、あなたにご用よ」
松平瞳子さまはそう言ってゆっくりとマリアに近づくと、優しく微笑んで見せた。その微笑みの意味が分らなかったマリアだったが、そんな疑問符は、直ぐにマリアの頭の中から吹き飛ぶこととなった。
「あなた、タイが曲がっているわよ」
綺麗な細腕がマリアの胸元に延びると、その手はマリアのタイを直していた。
一瞬、訳が分からずにパニックになりそうなマリアだったが、瞳子さまは微笑を浮かべたままマリアを見つめている。
「ロザリオの授与が終わるまで待っていてあげたのね？」
そこでようやく瞳子さまが何を言いたいのか、マリアにも理解することができた。
「いえ、そんな、ほんの二、三分のことなので――」
マリアは顔を赤くして首を横に振る。
「あの二人にとっては、とても大切な儀式だもの。あなたのおかげで、素敵な思い出になったと思うわ。優しいのね？」
瞳子はとても優しげな瞳でマリア像の方を見つめた。それはどこか過去を懐かしむような、そんな眼差しだった。
どちらかと言えば近寄りがたい上級生というイメージを瞳子に抱いていたマリアは、あまりにも柔らかな雰囲気の瞳子に驚いた。
もっと厳しい方かと思っていたけれど――マリアは心の中でそう呟いた。
「あなた、お姉さまはいるのかしら？」
瞳子に尋ねられ、マリアは一瞬目の前が真っ白になった。

尋ねられたことの意味は分かっているのに、何と答えればいいのか分らなかった。
その質問は、マリアの胸を強くしめつけた。
「聞こえなかったかしら？」
少しだけ声のトーンを低くした瞳子が、目を細めて尋ね直した。
やっぱり、この方は厳しい方だ――そう思い直したマリアは、慌てて口を開く。
「はっ、はい――います」
マリアの答えを聞いた瞳子は、一瞬面を喰らったように目を丸くした後、清々しく笑った。
「だったら、余計なお節介だったわね？　あなたのお姉さまに申し訳ないわ」
おそらくタイのことを言っているのだろう、他人の妹の身だしなみを注意するのは、いくら上級生と言えど気が引ける。
妹を導くのは、あくまでも姉の役目。
「あなたの素敵なお姉さまに恥をかかせないように、これからは身だしなみに気をつけなさい」
そう言い残すと、瞳子さまは先に校舎に向かって行った。
颯爽。
そんな言葉がとてもよく似合った。
完璧に直されたタイを見つめたマリアは、そのタイにそっと触れ――そこにまだかろうじて残っている松平瞳子さまの温もりを感じた。
そして、マリアは悲しげな表情でマリア像を見つめた。
どうしてあんな嘘をついてしまったのか？
マリアは自分自身を呪いたい気持ちだった。
嘘じゃないと言えば嘘じゃないのだが、それでもマリアが本当のことを話せば、瞳子さまはマリアが嘘をついたと思うだろう。
「マリア様の意地悪」
きっと、ロザリオを渡したところ姉妹になんてなれない――
そんなことを考えてしまった罰があたったのだろう。
そう、これはマリアが甘んじて受け入れなければいけない罰。

1　蝶と蜂

「ごきげんよう、マリアちゃん。どうしたの？　浮かない顔をしてるけど」
　マリアが教室に入って自分の席に辿りつくと、前の席の生徒が人懐っこそうな顔で声をかけてくれた。
「ごきげんよう、ユリカちゃん。えっと、とくに何かあったってわけじゃないんだ。えへへ」
「そうなんだ」
　マリアは適当なことを言ってはぐらかしてしまった。
　そして、まだ少し緊張を残したまま自分の席に座り、お腹に力を入れて一日の始まりを覚悟した。
　ホームルーム前の教室は、緑を一滴落したような光沢のない黒のワンピース制服に身を包んだ女子生徒たちで華やいでいる。
　黒いラインが一本入っているアイボリーのセーラーカラーは、そのまま結んでタイになる。ローウエストのプリーツスカートは膝下丈。そして三つ折りのソックスにバレーシューズ風の皮靴とくれば、どこまでもお上品な上に天然記念物ものである。
　しかし木は森に隠せとはよく言ったもので、このリリアン女学園の敷地に入ってしまえば、もう誰もそんなことは気にしない。
　高等部からこのリリアン女学園に進学したマリアも、今ではすっかりこの制服に馴染みつつあった。
　だけどこの学園の空気にというか雰囲気にまでは、まだ馴染めずにいた。
　もしかしたら、自分はいつまでもこの学園には馴染めないのかもしれない――マリアは、最近そんなことを思うようになっていた。
「ごきげんよう、マリアさん」
　背中から声をかけられて、マリアは身体をびくりと震わせた後、硬直した。
　そして、心の中で――「来た」と思った。
「ごっ、ごきげんよう」

おそるおそる、それでも不自然じゃないように振り返り、マリアはこのリリアン女学園で最も頻繁に使われているであろう挨拶――「ごきげんよう」の言葉を呟いた。

振り返ると、そこには三人の生徒が立っていた。

蘭(らん)さん、美南(みなみ)さん、杏(あん)さん――――三人が三人とも可愛らしく麗しい、蝶よ花よと愛でられて育ってきたお嬢さまたち。だけど、その表情はどこか剣呑としている。微笑の奥に、きらりと光るなにかを隠しているみたいに。

「マリアさん、今朝、マリア像の前でマリアさんをお見かけしたというお話を耳にはさんだんですけど？」

マリアはぎくりとして身体を震わせる。

何と答えればいいのか分からずに困った笑顔を浮かべていると、別の誰かが口を開いた。

「紅薔薇(ロサキネンシス・アン・ブウトン)のつぼみ――松平瞳子さまにお声をかけられていたってお噂なんですけれど、本当のことですの？」

「いえ、あの、その――」

マリアはしどろもどろになりながら、必死に頭の中の辞書を広げて言葉を探す。

「マリアさん、今度は、いえ、と言うよりもついに、紅薔薇(ロサキネンシス・アン・ブウトン)のつぼみにまで手を出そうというんですか？」

その言葉に、マリアは深く傷ついていた。

そんなつもりじゃない、今朝のことは偶然のことで――そんな言い訳をしたかったが、言葉はやっぱり出てこなかった。

「それで、もう瞳子さまに色目は使ったんですか――私のお姉さまになってくださいって？」

「でも、結局は振ってしまうんでしょう？」

「まぁ、この学園の次期紅薔薇(ロサ・キネンシス)さまの姉妹(スール)の申し出を断るなんて――そんな大それたこと、ありませんわよね？」

「いいえ、マリアさんは――マリア様ですもの。誰かの妹になったりなんかしませんわよね？　誰にでも平等に接するのが、マリア様なんですから」

マリアの目の前に立った蝶か花は、針をもった蜂にでもなってしまったかのように棘のある言葉をマリアに投げかけ、そして冷やかに笑ってみせた。
「みなさん、マリアさんも困っているんですから、お話はそれくらいで終わりにしませんか？」
もう見ていられないと言わんばかりに、ユリカちゃんが助け舟を出してくれたけれど、三匹の可愛らしい蜂は意にも解さなかった。
「でもユリカさん、私たちは知りたいだけなんですよ？　マリアさんがマリア像の前で紅薔薇のつぼみと本当にお話をなさっていたのか」
「そうですよ。マリア像の前と言えば――ねえ？」
三人は、顔を見合わせてくすくすと笑い合う。
マリアは顔を真っ赤にして俯き、早くホームルームが始まってほしい、この場から逃げ出したい、そんなことを願った。
すると――
「ごきげんよう。みなさんお集まりで、ずいぶん楽しそう。私も仲間に入れてもらえると嬉しいんですけど？」
マリアが縋るように視線を向けると、そこには健康的で溌剌とした少女が、楽しげな微笑を浮かべて立っていた。
リスのよう可愛らしい顔立ちに、綺麗に分け目のつけられたセミロングの髪の毛、そして露出した見事なおでこ。
黄薔薇（ロサ・フェイティダ）さまの妹で、黄薔薇（ロサ・フェイティダ・アン・ブウトン）のつぼみの有馬菜々《ありまなな》さんだった。
「ねえ、何の話をしていたの？」
菜々さんが好奇心旺盛に尋ねると、それまで悠然と振る舞っていた三人は顔色を変えて後ずさりする。
「ごきげんよう、菜々さん。私たちは、少し噂話をしていただけですので、これで――」
そう言うと、蘭さん、美南さん、杏さんは自分の席に戻って行った。
「あの、菜々さん、ありがとう」
マリアは俯いたままお礼を言った。
「私は何もしてないよ。ただ楽しそうなお話をしてそうだったから、

仲間に入れてもらいたかっただけだもん」
　そう言うと、菜々さんは自分の席に戻っていった。
「ユリカちゃんも、ありがとう」
「ううん。ぜんぜんお役に立てなかったけど」
「そんなことないよ」
「困ったことがあったら何でも相談してね」
「うん、ありがとう」
「でも、やっぱり菜々さんは素敵ね。さすが黄薔薇（ロサ・フェティダ・アン・ブウトン）のつぼみ」
「かっこ良いよね」
　マリアは頷いた。
「私なんか、蘭さんたちとまともに会話もできてなかったし――やっぱり一年生で薔薇さまのつぼみになって、山百合会（やまゆりかい）に出入りしている人は違うなあ」
　マリアは憧れに似た視線を菜々に向けていた。
「ええ。菜々さんは中等部の頃から、お姉さまである黄薔薇（ロサ・フェティダ）さま――島津由乃（しまずよしの）さまに目をかけられていたって話だし、剣道の腕もすごいんだって。今年のミスターリリアンの筆頭って話」
「黄薔薇（ロサ・フェティダ）さまの妹で、ミスターリリアンかあ？」
　今日、マリア像の前で声をかけられた松平瞳子さまも、紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみで――山百合会のメンバー。
　山百合会。
　リリアン女学園の生徒会は、マリア様のお心にちなんで山百合会という。
　マリア様の心は――青空であり、樫の木であり、ウグイスであり、山百合であり、サファイアである。
　それは、このリリアン女学園の幼稚舎に入って最初に覚えさせられる歌にあると――以前、幼稚舎からこのリリアン女学園に通っているユリカちゃんが教えてくれた。
　マリア様の心はサファイアなんだ。
　それはとても綺麗なんだろうな――マリアはその歌を教えてもらった時に、漠然とそんなことを思った。

とても素敵だなと。
私もマリアなんていう、完全に名前負けする恐れ多い名前を両親にいただいてしまったけれど、私の心はどう考えてもサファイアって感じじゃなくて、路傍の石だ。サファイアなんて素敵すぎる宝石は、あの松平瞳子さまのような方にこそ相応しいんだろうな――マリアは山百合会のことを考えながら一人納得してしまった。
山百合会のメンバーは紅白黄の三薔薇さまと呼ばれており、その妹は薔薇のつぼみと呼ばれている。
五月に行われた新入生歓迎会で、三薔薇さまとその妹たちが一堂に会しているのを見た時、マリアはその壮観さに瞳を奪われずにはいられなかった。自分と一つ二つしか歳の違わぬ生徒たちが――有馬菜々さんにいたっては自分と同い年であるはずなのに――マリアとはまるで住む世界の違う殿上人に見えてしまった。
無垢な天使とは、彼女たちのことを指すのではないかとさえ。
ロザリオを授与したところで本当の姉妹になんてなれない――
そんなことを考えてしまう私には、憧れることすら許されない存在なんだと、マリアはそう思って気分を沈ませた。
そう、私なんかが憧れていい存在じゃない。
それどころか、私は姉を持つような資格もない生徒だ。

そして、このリリアン女学園は――
私なんかが、いていい場所じゃない。

2　山百合会とお姉さまたち

昼休み。

山百合会のメンバーが集まる薔薇の館。

館とは言っても、後頭部校舎の中庭の隅に建っている教室の半分ほどの建坪の小さな建物――しかし、れっきとした生徒会だけの独立した建物であり、木造二階建てという外観を見れば、館という趣は確かにあった。

そんな三薔薇さまと呼ばれる生徒会役員が集まる館の中では、小さな問題が持ち上がっていた。

「嫌がらせ？」

ギシギシと音の鳴る階段を上がり、ビスケットのような可愛らしい扉の奥では――山百合会のメンバー全員が、楕円のテーブルを挟んで顔を突き合わせている。

生徒会役員である三薔薇さま――紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまの福沢祐巳（ふくざわゆみ）、黄薔薇（ロサ・フェティダ）さまの島津由乃、白薔薇（ロサ・ギガンティア）さまの藤堂志摩子（とうどうしまこ）。

そして、その妹であるつぼみたち――赤薔薇（ロサキネンシス・アン・ブウトン）のつぼみの松平瞳子、黄薔薇（ロサ・フェティダ・アン・ブウトン）のつぼみの有馬菜々、白薔薇（ロサ・ギガンティア・アン・ブウトン）のつぼみの二条乃梨子（にじょうのりこ）。

六人の山百合会メンバーが席に着き、そして菜々の発言を聞いた他のメンバーが、一様に声を揃えて「嫌がらせ？」――そう言った。

「菜々、いじめって――それ本当なの？」

菜々のお姉さまであり、黄薔薇（ロサ・フェティア）さまである島津由乃が深刻そうな表情で尋ねる。白い肌に大きな瞳、そして清楚なお顔立ち。ほっそりとした首の両脇から長く垂らした三つ編みが、彼女の困惑を現すように揺れている。

「お姉さま、早合点です。いじめではなくて、少し嫌がらせを受けていると言ったんです」

「だから、嫌がらせを受けている本人は、それをいじめだって思っているかもしれないでしょうが」

由乃は淡々としている妹にじれた様子で言う。

清楚な外見とは裏腹に猪突猛進の気がある由乃を前にして、菜々は

どうやって荒ぶるお姉さまを鎮めようかと考えるが、直ぐに助け舟が送られた。
「ちょっと待って由乃さん、早急に結論付けてことを荒立ててはいけないわ。きっと菜々ちゃんもそう思っているから、いじめとは断定していないのでしょう？」
静かに、そして努めて冷静に告げられたその言葉に、菜々は「そうです」と頷く。
黄薔薇姉妹の間に割って入ったのは、白薔薇（ロサ・ギガンティア）さまである藤堂志摩子だった。
柔らかく波打った髪の毛に、西洋人形のような顔立ちと雰囲気の御淑やかな少女。勢い任せの由乃と違い、志摩子は外見内面ともに清楚という言葉を体現したような生徒だった。
「事を大きくしたくないのよね。だから、その生徒の名前も伏せたままにしているのでしょう？」
「はい。その通りです」
「それで菜々ちゃんは、その子がどうして他の生徒から嫌がらせを受けているのか、知ってるのかしら？」
「おそらくですけど、その生徒が――私と同じクラスの生徒なんですけど、その子が、お姉さまをつくらないからだと思います」
「お姉さまを、つくらない？」
またしても、菜々以外のメンバーが声を揃えて首を傾げた。
「お姉さまをつくらない生徒なんてたくさんいるし、取り立てて攻撃を受けるようなことじゃないと思うけど？」
首を傾げなら言ったのは、二条乃梨子だった。
少し長めのおかっぱ頭で、芯の強そうな表情と大きな黒い瞳が特徴的な少女。姉である志摩子と並ぶと、西洋人形と日本人形のようだと形容される姉妹。
「それがどうしてか、その子は姉妹（スール）の申し出を断り続けているんです」
なるほどと、皆が頷く。
「単なる相性の問題じゃないのかしら？」
しかし、少し突き放したような言い方をしたのは、松平瞳子だった。

「下級生にだって姉妹（スール）の申し出を断る権利はあるはずだし、そもそもスールの問題は、まわりの人間がとやかく言うようなものじゃないと思いますけれど」
そう続けた瞳子の言葉を聞いて、その場にいる全員が瞳を丸くした。
そして僅かな沈黙が、雄弁にこう語っていた。
それを瞳子が言うのかと。
瞳子が、彼女のお姉さまである福沢祐巳と姉妹（スール）になるまでには、ずいぶんと紆余曲折や複雑な問題があり、多くの人たちの支えや献身があったということは、その時このリリアン女学園の高等部に在籍していなかった菜々も、なんとなく知っていた。
祐巳からの姉妹（スール）の申し出を、瞳子は一度断った。
そしてその後、瞳子自身の口から祐巳に妹にしてくださいと申し出たことは、ここにいるメンバーだけでなく、全校生徒の知るところだった。
瞳子は自分に向けられる視線と沈黙の意味を即座に理解し、少しだけ頬を赤らめて言った。
「まぁ、どちらかが諦めない限り姉妹（スール）になる可能性はゼロではないんですけれど」
つんと澄ませた瞳子を見て、そのお姉さまである祐巳はとびきりの微笑を浮かべていた。それは、まるで全てを包み込んでしまいそうなほどの微笑。
「あの、そうではないんです」
なんとなく温かい雰囲気に水を差してしまうことに気後れしながらも、菜々はハッキリと否定の言葉を口にした。
「そうではないって何がよ。菜々、ハッキリ言いなさい」
由乃にせっつかれて菜々は言う。
「姉妹（スール）の申し出を断り続けているというのは、一人からではないんです」
「一人じゃない？」
またしても他のメンバーが口を揃える。

「はい。私が知っている限りですが、その生徒は五人の上級生から姉妹（スール）の申し出を受け、その全てをお断りしているんです」
「入学してからって、まだ二カ月も経っていないのに五人――やるわね、その生徒？」
　由乃が驚いたように瞳を丸くする。
「では、嫌がらせに理由はその生徒への嫉妬ということかしら？」
　志摩子が尋ねる。
「おそらく」
「でも、どうしてお姉さまをつくらないんだろう？」
　乃梨子が首を傾げたまま独り言のように言った。
「乃梨子だって、入学したころは誰かと姉妹（スール）になろうなんて思わなかったでしょう？」
　志摩子が微笑みながら妹に言う。
「それはそうだけど、私は志摩子さんがいてくれたから」
「私もよ。乃梨子がいてくれたから、私は乃梨子を妹にって思ったわ。でも、別に姉妹（スール）と言う関係にこだわっていたわけじゃないわ」
「うん、私も。姉妹（スール）って関係じゃなかったとしても、私志摩子さんのことが大好きだもん」
「私もよ、乃梨子」
　話が脱線して二人だけの世界を創り始めた白薔薇姉妹。
「はい、ごちそうさま。その続きは、私の妹の話が終わってからしてちょうだい」
　由乃がげんなりした様子で言った。
「あらやだ、私ったら。ごめんなさい」
　志摩子さんは困ったように言った。
「菜々ちゃんは、その生徒のことが気になるんだ？」
　それまで黙っていた福沢祐巳が、菜々のことを真っ直ぐ見つめて尋ねた。
　紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまであり、瞳子のお姉さま。
　リボンで結んだ二つお下げに、愛嬌のある顔立ち。百面相と呼ばれている表情豊かな少女で、容姿も中身も成績も平均。これといって目

立ったところがないと本人が自負していながら、その実、下級生から絶大な人気を誇るリリアン女学園のお姉さま。
通称、庶民の星。
「はい、そうです」
菜々は、祐巳の言葉に頷いた。
「それじゃあ、注意深くその子の事を見てあげて。それで問題が大きくなりそうだったら、もう一度私たちに報告すること。その時は、私たちが何かしらの行動を取るから」
祐巳はそう言って自分の両隣の由乃と志摩子を見つめた。
三人は互いに頷きあう。
「でも、私が見ているだけで大丈夫でしょうか?」
菜々は不安そうに尋ねる。
「大丈夫」
祐巳は自信満々に請け負って続ける。
「こんなに素敵で頼もしい友達が隣にいれば、その子だってきっと百人力だもん。私たちの方でも少し調べてみるから、菜々ちゃんはその子のそばにいてあげて」
菜々は少しだけ恨めしく祐巳を見た。
そして以前、瞳子が菜々に言っていたことを思い出した。
「私のお姉さまは、何て言うか――時々ずるい」
本当にその通りだ。
こんな殺し文句をさらりと言われてしまっては、おそらくそれがどれだけ無理難題を押し付けられたのだとしても、菜々は分りましたと頷くしかなかった。
「わかりました」
菜々は微笑んで頷いた。
「さすが、私の妹ね。菜々、しっかりとやるのよ」
祐巳の隣で何の根拠もなくそう言う自分のお姉さまを見て、菜々は思わずため息を吐いてしまった。
「菜々っ、あんた、どうして私には溜息で返事をするのよっ。私は、あ

なたのお姉さまなのよっ」

3　写真とタイ

瞳子が笙子（しょうこ）さんに声をかけられたのは、クラブハウスに向かう道すがらだった。

放課後。

瞳子は薔薇の館には向かわず、所属している演劇部の稽古に出るためにクラブハウスに向かっていた。

「瞳子さん」

その途中、まるで自分を待っていたかのように笙子さんが現れて声をかけられた。

「笙子さん、どうかしたの？」

彼女は流行のデジタルカメラを手にしており、その可愛らしいお顔は微笑を讃えている。

内藤笙子（ないとうしょうこ）さん。

写真部に所属している彼女は、瞳子と同じ二年生。

これといって接点があるわけではなかった、最近は山百合会がらみで何かと会話の増えている二人だった。

「ええ、少しだけお時間いいかしら？」

「かまわないけれど」

瞳子は首を傾げて綺麗に巻いた縦ロールを揺らす。

「少し、見てもらいたいものがあるの」

「見てもらいたもの？」

笙子さんは楽しそうに言いながらデジタルカメラを操作する。

そしてディスプレイに一枚の写真を映しだし、それを瞳子に見せた。

「これって？」

瞳子は驚いて言う。

「ええ、とてもよく取れているでしょう？　まるでスールのようで、二人ともとても素敵」

微笑みながら写真を見せる笙子さんに、瞳子は呆れたように眉を持ち上げる。

いったいいつの間に隠し撮りされたのか？
しかし、それとはまた別の感情で瞳子はその写真から目が離せなかった。
「笙子さん、これ、私以外の誰かに見せたかしら？」
「いいえ、まだ誰にも」
「蔦子（つたこ）さまにも？」
蔦子さまとは、写真部のエースである竹嶋蔦子（たけしまつたこ）さまのことである。
姉妹（スール）ではないものの蔦子さまを妹のように慕っている笙子さんなら、すでにこの写真を見せている可能があるのではと瞳子は考えた。
「もちろん。被写体に筋を通すのが蔦子さまの教えですもの。ご本人に許可を頂くまでは、誰にもお見せしません」
「じゃあ、この一年生には？」
そう尋ねた瞳子は、自分がこの一年生の名前を知らないことに思い至った。
「まだよ。瞳子さんの許可をいただけたら、次はこの下級生にって思っていたの」
「だったら、この写真は破棄してくださる？」
瞳子の意外な言葉に、笙子さんは「えっ？」と間の抜けた声を出してしまう。
「この写真はたしかによく撮れているけれど、これをこの子のお姉さまが見たら――けっしていい気分ではないでしょう？」
「うそ？　私、てっきり瞳子さんがご自分の妹にって思っているのかと思って」
「私も今朝、彼女のタイを直した時に知ったのよ」
瞳子は困ったように笑う。
「それだけでも失礼なのに、もしもこの写真まで見られてしまったら――彼女のお姉さまに面目が立たないわ。ほんと、慣れないことをしてはダメね」
「そうね。ごめんなさい」
デジタルカメラを引っ込めた笙子さんが、謝罪を口にして瞳子の元を去って行った。

瞳子は再びクラブハウスまで足を運びながら――その実、笙子さんに見せられた写真のことで頭が一杯だった。
「どうして、あんなことをしてしまったのかしら？」
瞳子は今朝のことをふと思い出していた。
ロザリオの授与を、とても切なそうに、そしてとても苦しそうに見つめている少女がいた。
胸元のタイを強く握りしめて、何かを耐えるようにその光景を見つめている下級生に、瞳子の瞳は釘付けになってしまった。
青みがかったほどに美しい黒髪を腰の先まで伸ばした、どこか儚げに見える少女。
日に焼けていない肌は病的に白く、幸の薄そうな顔立ち――瞳子は瞬間的に、この子を放っては置けない、そう思い、歩き出したその生徒に気が付けば声をかけていた。
「そこの一年生――お待ちなさい」
呼び止めて咄嗟に、何を話せばいいのかと悩んだ瞳子は、その下級生の乱れたタイを見てつい手を伸ばしてしまった。
そして、気がつけば彼女のタイを直していた。
その後で彼女にお姉さまがいると聞かされた時、瞳子はしまったと思った。
軽率な行動だったと。
まさか自分が下級生のタイを直すだなんて――瞳子は笑うしかなかった。
タイを直す――その仕草は、瞳子にとって一種の憧れだった。
自分のお姉さまである福沢祐巳さま。
その祐巳さまのお姉さまであり、先代の紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまである小笠原祥子（おがさわらさちこ）さまは、よく祐巳さまのタイを直して差し上げていた。
それは、とても美しい光景だった。
祥子さまの綺麗な手で直される祐巳さまのタイ――本当は直す必要もないほどの乱れなのに、そうして祥子さまにタイに触れられると、お姉さまはとても幸せそうな笑みを浮かべるのだ。
瞳子自身は、お姉さまに一度もタイを直してもらったはことはな

い。お姉さまの妹（プティ・スール）であることを誇りに思い、常に身だしなみや立ち振る舞いに気を使っている瞳子にとって、タイの乱れはあり得ないことだった。

それに瞳子は、自分のお姉さまに祥子さまの変わりを演じてほしいだなんて思ったことことは一度もなかった。

たとえそう望んだところで、私のお姉さまには――祥子さまを演じることなんてできないだろう。とにかく演技というものができない人だから。常に正直であり、考えていることが直ぐに顔に出てしまうのが、瞳子の自慢の、そしてたった一人のお姉さま――福沢祐巳さまなのだ。

祥子さまも憧れの紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまだったけれど、祐巳さまだって負けていない。

瞳子が以前、頑なに外そうとしなかった仮面を外してくれたのは祐巳さまだった。

最後の最後まで瞳子を見捨てずに真っ直ぐに向き合ったくれたのは、祐巳さまだった。

だから、お姉さまが私のタイを直す必要なんてなに一つなかった。

「私が、祥子さまの変わりを演じてどうするのよ？」

瞳子は自嘲気味に言って首を横に振る。

しかし、でも――と瞳子は思った。

ロザリオの授与を見つめるあの下級生の眼差しが、瞳子の瞳にはどうしてもそれを羨んでいるようにしか見えなかったから。

今にも、誰かに手を伸ばそうとしているようにしか見えなかった。

もしもあの下級生に姉がいないと知ったら、自分はどうしただろうか？

自分の妹に迎えただろうか？

そんなことを考えて、瞳子はもう一度首を振る。

「そんなことは考えても詮無いことよ」

ほんと、ままならないものだわ。

妹一人つくるのにやきもきしている生徒がいれば、五人から受けたスールの申し出を全て断ってしまう生徒だっている。

瞳子は、最近乃梨子としたとある会話を思い出していた。

4　茶話会と由乃さま

「妹？」

瞳子の言葉に、乃梨子は驚いたように返した。

薔薇の館で、久しぶりに瞳子と乃梨子が二人きりの時のこと。

同級生であり、高等部への進学した当初は何かと因縁の在った二人だが――今ではかけがえのない親友となった瞳子と乃梨子。だからこそ、まだ自分のお姉さまにも話していない考えを、瞳子は臆面もなく乃梨子に吐露することができた。

「私たち、そろそろ妹をつくるべきじゃないかしら？」

切り出された瞳子の考えは、乃梨子にだって理解することができた。

生徒会役員で構成される山百合会の正式なメンバーは、厳正な選挙で選ばれる役員三人だけ。

三薔薇さまと呼ばれる、紅薔薇（ロサ・キネンシス）さま、黄薔薇（ロサ・フェティダ）さま、白薔薇（ロサ・ギガンティア）さま――このお三方が、生徒会長、副会長、初期、会計といった役職を同じ比重で受け持つことで、山百合会は代々運営されてきた。

しかし、生徒会をはじめ学園祭実行委員会、新入生歓迎会や卒業生送別会など季節ものの行事の主催、予算会計会や生徒総会などと常に仕事に追われ続ける三薔薇さまの仕事は、当然三人でこなせるわけがない。

そこで三薔薇さまは見習いとして、自分たちの妹（プティ・スール）に山百合会の仕事のを手伝いをさせる。番狂わせがない限り、順当に三薔薇さまの妹たちが次期山百合会の役員に当選する。薔薇さまたちの妹に限り「つぼみ（ブウトン）」と呼ばれているのには、そう言う訳がある。

つまり今、この薔薇の館にいる瞳子と乃梨子は――次期薔薇さまの筆頭候補と言うことだ。

次期紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまには瞳子が、次期白薔薇（ロサ・ギガンティア）さまには乃梨子が就任するのだと、彼女のお姉さまも、そして多くの生徒たちも信じて疑わないだろう。

もちろん、当人である二人も同じ気持ちだった。

だからこそ、次期薔薇さまになるであろう瞳子と乃梨子が、いつまでも妹をもたずにいるのは良くないことだと、瞳子は暗に言っていた。
「瞳子、祐巳さまに妹をつくるようにけしかけられたの？」
「私のお姉さまが、そんなことを強制するように見える？」
「見えない」
乃梨子は、祐巳さまのお優しすぎる笑顔を思い浮かべて頷いた。
祐巳さまのお姉さまである祥子さまならいざ知らず、祐巳さまが妹をつくりなさいなんて瞳子にけしかけるわけがない。しかし瞳子にとってそれが必要なことだとわかれば、祐巳さまは間違いなく瞳子に妹をつくりなさいと言うだろう。
祐巳さまはそういうお方だ。
乃梨子は一人納得しておかっぱ頭をかいた。
と言うことは、少しばかり厄介なことになる。
瞳子は自発的に妹をつくるべきだと判断したのだ。
乃梨子はそう判断した。
「妹にしたい下級生が見つかったとか？」
乃梨子は結論を先延ばしにするように瞳子に尋ねる。
「一年生が高等部に入学した時から目をつけている子はいるし、中等部の頃から薔薇さまに憧れている生徒は知っているわよ」
幼稚舎からこのリリアン女学園に通っている瞳子は、すでに妹候補のリストアップを済ましているらしかった。
出来が良すぎるつぼみが隣にいるというのも考え物だ。
乃梨子は苦笑いを浮かべてみせる。
「でも、一応何人かには唾をつけてみたんだけど、薔薇の館につれて来ようと思える子はまだ見つかってないから――安心してちょうだい。乃梨子」
少し勝ち誇ったように笑ってみせた瞳子は、乃梨子の胸の内を読み取ってそう言った。
まだ自分も乃梨子と同じラインに立っているのだと。
「まぁ、無理につくる必要なんてないけれど、一応心構えぐらいはして

おかないと、そう思って言っただけよ」
「そうだね」
乃梨子は素直に頷く。
瞳子のお姉さま同様、乃梨子のお姉さまである志摩子も、乃梨子に妹をつくりなさいなんて強要はぜったいにしないだろう。
それをするとしたら、おそらくは由乃さまぐらいだ。
だからこそ、私たちは自主的に妹を探さなければいけないのだ。
二人は胸の奥で同じことを思った。
「菜々ちゃんは一年生だから来年まで妹はつくれない。つくるなら、私か乃梨子のどちらか。それに、山百合会が一番忙しくなる文化祭前までには、薔薇の館に連れて来ても良いと思える妹候補ぐらい見つけていないと、お姉さま方にいらない心配をかけてしまうでしょう？進路のことだってあるんだから」
瞳子の言葉を聞いて、乃梨子は感心しきっていた。
まだ一年生が入学して、そして二人が進級して二カ月も経っていない。それなのに、瞳子はすでにお姉さまの進路のことまで考えている。
瞳子にとって、祐巳さまは特別以上の存在だ。
その祐巳さまの進路を考えることが、瞳子にとって辛くないわけがない。それでも瞳子は祐巳さまを安心させるために、すでに妹をつくる決意し、お姉さまの進路のことすら視野に入れている。
乃梨子は心の底から親友を尊敬した。
自分は、どうだろうか？
自分のお姉さまの進路のことを考える。
胸が張り裂けてしまいそうだった。
志摩子さんと別れるなんて、考えただけで辛く、とても耐えられそうにない。
リリアン女学園に入学した当初、乃梨子は自分がお姉さまをつくるだなんて、まるで考えもしなかった。そんな考えの全てを変えてくれたのは、志摩子さんだった。桜の木の下で志摩子さんと出会った時から、乃梨子の心の多くは志摩子さんでいっぱいになってしまった。

そして去年のこの時期には、もう乃梨子と志摩子は姉妹（スール）になっていた。
新入生歓迎会――マリア祭で瞳子を含めた山百合会のメンバーに一計を案じられたことが、二人が姉妹（スール）になる切っ掛けと言えば切っ掛けだった。
そう考えれば、妹をつくるべきと言った瞳子の言葉も頷けた。
「でもこの問題に関しては、私は劣等生になりそう」
「どうして？」
困ったように言う乃梨子に、瞳子は首を傾げた。
「だって、私は部活にも所属していから瞳子みたいに下級生と接点ないし」
「そうかしら？　乃梨子は下級生に人気あるわよ」
「それだったら、瞳子のほうが」
「私はダメよ。どちらかと言えば怖がれているもの。お姉さまと違って親しみやすがないって。乃梨子は親しみやすいから、その気になれば妹なんてすぐ見つかるわよ」
心配ないと請け負う瞳子に、乃梨子はそうかなあと首を傾げる。
「それに、考えてもみなさいよ――――」
瞳子は少しだけ表情を深刻にして続けた。
「私たちが、このままいつまでたっても妹をつくる素振りすらみせなかったら、由乃さまが姉妹（スール）オーディションでもやりなさいってけしかけてくるに決まっているでしょう？」
その言葉に乃梨子はぎょっとした。
去年、オーディションで姉妹（スール）を見つけようと提案したのは由乃だった。
その後、由乃に巻き込まれた祐巳の提案によって、オーディションではなく茶話会になったのだが――確かに、由乃なら言いだしかねなかった。茶話会の時、祐巳の妹候補ナンバーワンと噂されていた瞳子は、しきりに茶話会に参加しないのかとまわりの生徒に噂された苦い経験がある。それだけに、あの茶話会の再来は防ぎたいといったところだろうか？

いや、それは違うだろう。
乃梨子には分かっていた。
瞳子は本当に祐巳さまを安心させたくて、そして山百合会の未来のことを考えて、自分たちは妹をつくるべきなのではと考えているのだ。
しかし、瞳子は素直じゃないところがある。
だから、こうして冗談を言ってみせたのだろう。
「そうだね。オーディションだけは阻止しよう」
乃梨子は親友の話に乗って、微笑みかけてそう言った。

5　再会と下級生

瞳子がその下級生と再会したのは、演劇部の稽古の帰りだった。

一応、薔薇の館に顔を出すとは言っておいたけれど、お姉さまである祐巳さまには「無理をしなくていいよ」と、言われていた。それでも顔を出すのが妹の務めだと、瞳子は真っ直ぐに薔薇の館に向かっていたのだけれど――

その途中で、今朝マリア像の前で呼び止めてしまった下級生と鉢合わせてしまったのだった。

ずいぶん、縁があるものなのね――瞳子は思わず苦笑いを浮かべてしまいそうになった。

しかし自分のお姉さまならいざ知らず、役者である彼女はそんなことはまるで顔に出さず、華麗に微笑んで見せた。

「ごきげんよう」

「ごきげんよう」

瞳子が声をかけると、下級生も同じようにかえして頭をぺこりと下げた。

「今、帰りかしら？」

気が付けば、瞳子はその下級生に声をかけていた。

その表情は少しだけ憂いを佩びている。そして何となく瞳子に声をかけられたことに気後れしているような、そんな雰囲気だった。

今朝のことで嫌われてしまったかしら――瞳子はそんなことを考えたが、それはあまり気にならなかった。

「はっ、はい。あの、図書館で調べものをしていたので」

「そう。そう言えば、あなた――お名前は？」

瞳子にそう尋ねられると、下級生は顔を少し青ざめさせて、しまったとばかりに目を丸くしていた。

「あ、あの、申し遅れてしまってごめんなさい――私、一年桃組、御園マリアです」

深々と頭を下げる御園マリアを見て、瞳子は今度こそ苦笑いを浮かべてしまった。

これでは、自分が下級生をいびっているようにしか見えない。周りには少なくない数のギャラリーも存在しているため、もう少し和やかな空気のほうがありがたい。
「マリア。御園マリア――とても素敵な名前ね。でも、そろそろ顔を上げてもらえるかしら？」
「はっ、はい。ごめんなさい――瞳子さま」
勢いよく顔を上げた御園マリアの顔は真っ赤だった。そして今にも泣き出しそうなぐらい弱々しい表情をしている。しきりに当たりを気にしていて、瞳子の目にはまるで何かに怯えているかのように見えた。
「もう少し、肩の力を抜いてくれる？　これじゃあ、私があなたをいじめているみたいじゃない」
「ごめんなさい」
この子は、謝ってばかりだな――瞳子はそう思って微笑んだ。
そして、その震える方にそっと手を置いた。
「そう、もう少し気を楽になさい。何も、あなたを取って食べようってわけじゃないんだから」
「はい」
「それより、私の名前、知っていたのね？」
「はい。瞳子さまをご存じない方なんて――私、マリア祭で瞳子さまをお見かけした時から、素敵な方だなって思っていました」
マリアが頬を赤らめて言うと、瞳子は少しだけ誇らしげな気持ちになった。
「ありがとう」
瞳子はマリアの肩に手を乗せたまま、そう言った。
「見て？　マリアさん、また上級生に色目をつかっているわよ」
「本当。しかも、松平瞳子さまよ」
「紅薔薇のつぼみに手を出すなんて、何て大胆」
不意に周囲の生徒の話し声が、瞳子の耳に届いた。聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声音だったけれど、それがあまり心地良いものではないことは、直ぐに理解できた。

どちらかと言えば不愉快な類。
そして、若干の悪意を孕んでいる。
瞳子が厳しい視線を話し声の方に向けると、その生徒たちは足早に去って行ってしまった。
何だったのかしらと瞳子がマリアに視線を向けると――彼女は今にも崩れ落ちてしまいそうなくらい顔を青ざめさせて、深刻そうに瞳を見開いていた。
「ちょっと、大丈夫？」
瞳子が思わず声をかけると、マリアは飛び跳ねるように体を震わせて、驚愕の眼差しで瞳子を見つめた。
まるで、そこにいてはいけないものを見るような目つきで。
「あっ、あの、瞳子さま。私、少し急いでいますので、これで失礼いたします。せっかく、私なんかにお声をかけていただいたのに、申し訳ありません。ごめんなさい」
そう言うと、マリアは瞳子に背を向けて走り去って行ったしまった。
まるで、その場から逃げるように。
「ちょっ、ちょっと――」
咄嗟に、これは彼女を追って事情を聞いた方がいいのではと瞳子は考えた。しかし、まるで状況が呑み込めていないこともあって、瞳子はマリアの背中を見送ってしまった。
それでも、瞳子は一つだけ確信していた。
少し急いでいる、そう言った彼女は嘘をついていた。
「御園マリア――明日、もう一度話を聞いたほうがよさそうね」
瞳子は自分に言い聞かせるようそう言って、薔薇の館へと向かって行った。

6　ひとりぼっちとマリア様

瞳子さまに背を向けて、逃げるようにその場を去ったマリアは、ぐちゃぐちゃにこんがらがった頭のままで、とにかく一目散に駆けた。

瞳子さまに、なんて失礼なことをしてしまったんだろう？

だけどそれ以上に、瞳子さまに話しかけられているところをクラスメイトに目撃されてしまった。明日、何て声をかけられるか分らない。また、姉妹（スール）の申し出を断ったことを責めたてられるだろうか？

マリアは混乱していた。

その混乱を振り切るようにマリアは走り続けた。

先ほどまで調べものをしていた図書館の脇を通り抜けた後、ようやく立ち止まって肩で息をした。乱れた呼吸を整えることもせず、その場に立ち尽くして空を仰ぎ見る。そこには、どんよりとした曇り空がそこにはあり、マリアは憂鬱な気持ちに押しつぶされてしまいそうだった。

リリアン女学園に姉妹（スール）という制度があると知ったのは、入学式の後

一年桃組になったばかりのクラスメイトたちと、他愛もない会話をしている時だった。

その時の会話のメンバーには、今朝マリアに心無い言葉を浴びせかけた蘭さん、美南さん、杏さんも一緒だった。

誰かが「みなさん、もうお姉さまになって下さる方はいて？」と、尋ねたのが切っ掛け。

「お姉さまって、何？」

姉という単語に敏感に反応してしまい、マリアが首を傾げて尋ねると――優しく微笑んでその意味を教えてくれたのは、蘭さんだった。そして姉妹（スール）のことを知ったマリアは、それに憧れると同時に――それは自分に縁のないものだと決めつけてしまった。

自分は、お姉さまを持つことないだろうと。

だからクラブ活動を見学に行った際、手芸部の上級生から――良かったら、自分の妹にならないかと姉妹（スール）の申し出をされた時には、マ

リアは驚きのあまり即座に断りを入れて逃げ出してしまったほどだった。
「ごっ、ごめんなさい。私、その申し出は受けられません。ごめんなさい」
短い時間だったけれど、マリアに優しくせっしてくれた素敵な上級生だった。
素晴らしいお姉さまになることは間違いないだろうと、マリアには思えた。
それ以来、手芸部には顔を出していない。
そして、クラブ活動に入ることも止めてしまった。
しかし、それからもことあるごとに上級生から――自分の妹にならないかという申し出は続き、その度にマリアは胸が張り裂けそうな気持で、その申し出を断り続けた。気が付けば、自分はクラスメイトから好奇の目を向けられ、噂話の対象にされていた。
それも当然のことだと、マリアは納得していた。
何も理由も言わずにせっかくの申し出をただ断り続けるなんて、どうかしている。
初めは「お高くとまっている」「上級生の先輩方を馬鹿にしている」「リリアン女学園への冒涜だ」などと、お決まりとも思える誹謗中傷がマリアに浴びせかけられたが――しだいに、こう嘲笑されるようになった。
「マリア様は全ての人に平等だから、マリアさんもきっと全ての生徒に分け隔てなくせっしているんだわ。だから、どの方とも姉妹（スール）にならないのよ」
マリアの名前を皮肉り、まるで遠くから石を投げつけられるように、そんな言葉がマリアに向けて囁かれるようになった。
ひとりぼっちのマリア様と。
「はぁ」
ようやく少しだけ気持ちを落ち着けることができたマリアは、大きな溜息を落した。
そして気が付くと、マリアの目の前にはマリア様がいた。

「あーあ。どうして、こんなことになっちゃったんだろう？」
マリアはそう呟きながら、マリア様に手を合わせてお祈りをした。
いったい何を願い、何を祈ればいいのかも分らず、ただただ何かに縋り付くような気持で――

7　先入観と勘違い

「瞳子さま、昨日の話――気にして下っていたんですね？」
朝。始業前に薔薇の館に訪れると、瞳子はいきなり菜々ちゃんにそう声をかけられて首を傾げそうになった。
お姉さま方がお見えになる前、集合時間の十五分前に薔薇の館に着いていたのは、瞳子と菜々ちゃんだけ。
「昨日の話？」
「はい。だけど私、その生徒の名前もお話していなかったのに――すごい情報収集能力ですね？」
情報収集能力と言われて、瞳子はなおさら困惑した。
自分が何かしただろうか？
そして、昨日の話とは？
そこで、ようやく思い当たる節を見つけた。
「もしかして、菜々ちゃんが報告をしてくれた――嫌がらせを受けているっていう生徒のことを言っている？」
「はい、そうです。瞳子さまがさっそくその生徒にコンタクトを取ったって聞いて、私、驚いてしまって」
そう言った菜々ちゃんの瞳は、好奇心と感動で輝いている。
「菜々ちゃん、ちょっと待って。何か勘違いをしているみたいだけれど――私、何もしていないけれど」
「でも昨日、瞳子さまがその生徒に話しかけているのを見たって生徒がたくさんいて、その噂話で教室が持ちきりになっていたんですけれど」
菜々ちゃんはわざわざ一度教室に顔を出してから、この薔薇の館に来たのだろう。その生徒のことをしっかりと気にかけてあげていることに、瞳子は感心をした。
だけどそこまで聞いて、瞳子はなおのこと意味が分らなくなってしまった。
まるで二人はそれぞれ違う台本を持ち寄って、それを読みあわせているようだった。

「ちょっと待って、話を少し整理しましょう」
瞳子は菜々ちゃんと自分の話の食い違いを整理するように、指を立てて言った。
「昨日、私は演劇部の稽古あと、真っ直ぐに薔薇の館に来てそのままお姉さまたちと帰宅したわ。嫌がらせを受けている生徒のことを調べている時間もなかったし、お姉さまが菜々ちゃんに任せると言った以上、私が独断で行動するなんてことはないわ」
「あれ？　それもそうですね。じゃあ、誰かがデマを流したのかも？
今まで、さすがに嘘をついてまでマリアさんに嫌がらせをする生徒はいなかったので」
それが妥当な線だろうと頷きかけ、そこで瞳子は重大な見落としに気が付いた。
自分は、その生徒の名前すら知らないのだ。
それにある先入観が邪魔をしてしまい、最初からその可能性を除外してしまっていた。
無意識に。
そのことに、瞳子は今の今まで気が付くことができなかった。
その生徒は、自分にお姉さまがいると言った。
菜々ちゃんが嫌がらせを受けていると言った生徒は、お姉さまをつくらないことが理由だと聞かされていた。
そのどちらかが正しくないのだとしたら？
「菜々ちゃん、今、マリアさんって言ったかしら？」
瞳子が鋭く尋ねると、菜々ちゃんは頷く。
「はい。御園マリアさん。私と同じクラスの生徒です」
「嫌がらせを受けている生徒が――その御園マリアさんってことでいいのかしら？」
瞳子は重ねて確認を取る。
ここからは勘違いでは済まされない。
「はい」
「その子、本当にお姉さまはいないの？」
「そのはずですけど――どうしてですか」

瞳子は顎に手を当てて、少しの間思案する。
自分がその生徒、御園マリアにすでに出会っていて、少なからず関係をもっているという事実には驚いていた――そして、もしも菜々ちゃんの話が本当ならば、自分は嘘をつかれたということになるのだろう。
すでにお姉さまがいると。
それは、さして気にもならなかった。
しかし、昨日御園マリアと会話をしている時に瞳子の耳に入った、周囲の生徒の不愉快な声音を思い出して、瞳子は「しまった」と舌打ちをたくなった。瞳子の昨日の行動は、明らかに軽率だったということになる。
知らなかったとはいえ、自分自身で新しい火種を投げ込んでしまったのだから。
「菜々ちゃん、噂話で教室が持ちきりになっていたって言ったけれど、その御園マリアさんはもう登校していた？」
「いいえ、まだでした」
「だったら、よかったわ」
「よかった？」
「ええ。菜々ちゃん、今からそのマリアさんのところに案内してちょうだい」
そう言った瞳子の表情は――
まるで、誰かのお姉さまのようだった。

8　呼び出しと呼び捨て

マリアは戸惑いながら、目の前に立った三人に視線を向けていた。
今朝、マリアが登校して教室の席に着くと、蝶よ花よの三人が剣呑な表情でマリアに詰め寄り、そしてここ――廊下の端につれて来られた。
理由は分かっている。
昨日のことを問い正したいのだろう。
「マリアさん、昨日、瞳子さまと親しげに会話をしていたみたいですけど？」
と、美南さん。
「いったい、どういうことです？」
と、杏さん。
二人は意地の悪い笑みを浮かべながら、詰問調でマリアに尋ねる。
「あの、その、昨日のことは――」
マリアは昨日のことをなんて説明していいのか分からず、ただしどろもどろになるばかりだった。
昨日のことは、瞳子さまが勝手に話かけてきたんです――そんなことは言えるはずもなく、マリアは戸惑った顔のまま視線を泳がせた。
「マリアさん、どうしてあなたは、いつもいつも――」
不機嫌さを装っている二人とは違い、本当に苛立ちを表に出してそう言ったのは蘭さんだった。彼女は不愉快という単語を体現した表情で、顔を紅潮させて言葉を続ける。
「私のお姉さまに姉妹（スール）の申し出をされた時も、そうやって何も言わずに、ただはぐらかすようなことを言って逃げ出して――今度もまた、そうやって何も言わずにはぐらかすの？」
その言葉は、マリアの胸を強く突き刺した。
その痛みは、まるで太い杭を打ち込まれたよう。
「マリアさん、覚えている？　マリア祭の時、二人で瞳子さまって素敵だねって話をしたよね？　手芸部の次は演劇部にも見学に行こうかって約束したよね？　それなのに、あなたは何も話してくれず――

もう、クラブ活動の見学は止めるって。それで、今さら瞳子さまに近づいて、ねぇ、マリアさんは何がしたいの？」
気の強そうな、それでいて面倒見の良い蘭さんが、怒りと戸惑いを浮かべてマリアに尋ねた。
ぜんぶ覚えていた。
よその学校からこのリリアン女学園に進学し、右も左も分からなかったマリアにリリアンのことを優しく教えてくれたのは、蘭さんだった。
姉妹（スール）のことを教えてくれたのも、クラブ活動の見学に誘ってくれたのも、ぜんぶ蘭さんだった。
それなのにマリアは何も告げずに、何も話さずに逃げ出しいてしまった。
彼女の怒りは当然のもので、その責め苦は当然マリアが受け入れるべきものだった。
そして、彼女の疑問に答えなければいけないことも分かっていた。
でも、どうしてもそれを説明することができなかった。
自分のことを何て言葉にしていいのか、マリアにはまるで分からなかった。
自分のことを話す言葉を、マリアは持ち合わせていなかった。
どうすればいいだろう？
マリアは考えた。
しかし、答えなんて見つかるわけは無かった。
だから、マリアは無責任に祈ってしまった。
昨日マリア像にしたように、ただただ何かに縋り付くような気持で祈ってしまった。
「――あなたたち、そこで何をしているのかしら？」
マリアの背中越しに声が発せられた。
まるでマリア様が使わしてくれたように。
その声の主に視線を向けた三人は、驚きのあまり目を見開いていた。美南さんと杏さんは顔を引き攣らせたが、蘭さんはマリアを責めるように睨み付けた。

マリアが振り返ると、そこには瞳子さまと菜々さんが立っていた。
「何をしているのかしら――と聞いたのだけれど、聞こえなかったのかしら？　それに、私の名前が聞こえた気がしたけれど？」
腕を組んだ瞳子さまが声を低くして詰問調で尋ねると、三人は直ぐに顔色を変えた。
「私たち、ただお話をしていただけで」
「そうです。教室では少し話しづらいことだったので。それに瞳子さまの話なんて、していません」
言い訳っぽい言葉を聞いた瞳子さまは、小さく微笑んで「そう」とこぼした。それはとても美しい笑顔だったけれど、その場の空気が凍りつくような絶対零度の微笑。
「だったら、マリアは私が借りてもいいかしら？」
その言葉に、その場が少しだけ騒然とした。
瞳子さまは今はっきりと、自分の名前をマリアと名前で呼んでみせた。
呼び捨てで。
名前に「さん」をつけて呼ぶのが定番のリリアンで、呼び捨てというのはごくごく親しい間柄に限られる。
その場の全員が、即座に瞳子さまの言葉の意味を理解した。
マリアと瞳子さまが親しい間柄であると宣言するのに、これ以上うってつけの言葉は無かった。
ただただ困惑しているマリアをよそに、マリアを呼び出した三人は事の重大さを知って衝撃を受けていた。もしかしたら自分たちはまずいことをしてしまったのではと、当惑の色が濃く浮かび上がっている。
「はい。私たちの話は終わったので」
「どうぞ」
美南さんと杏さんは引き攣った笑顔でそう言ってみせたけれど、その声はしっかりと震えていた。
「ありがとう。それじゃあ、マリアはお借りするわね――ごきげんよう」

呆然と瞳子さまの言葉を聞いた三人は、機械のように「ごきげんよう」と返した。
「マリア、ついていらっしゃい」
そして、ぴしゃりと有無を告げさぬ口調で言われたマリアは、瞳子さまの背中について行った。
☆
場所を変え、更に人気のない廊下端の階段脇に移動し終えると、マリアは自分の目の前に立っている二人を、ただ困惑したまま見つめた。
紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）さまのつぼみ、黄薔薇（ロサ・フエティダ・アン・ブウトン）さまのつぼみ――松平瞳子さまと有馬菜々さんがそこにはいて、自分を見つめている。
いったい、これはどういうことだろう？
マリアの頭の中は、大き過ぎる疑問符で埋め尽くされていた。
それと同時に、マリアは先ほど瞳子さまが自分を呼び捨てたことが、気になって仕方がなかった。
瞳子さまが、私のことを呼び捨てに？
マリアと。
それも三度も。
こそばゆく、おもはゆく、そしてどこか嬉しい。
それでいてその事実に恐怖している自分がいることに、マリアは気が付いていた。
「急に押しかけてごめんなさい。迷惑だったかしら？」
瞳子さまが困ったように笑って尋ねる。
「いえ、迷惑だなんて。それよりも瞳子さま、あの、先ほどのことなんですけれど――」
マリアはその先を言いあぐねた。
「お友達とお話をしているところを、邪魔しちゃったみたいね？」
瞳子さまはそう言って頷いてみせる。
「えっ、はい」
マリアにも、瞳子さまの言葉の意味は容易に理解できた。
先ほどの件を――クラスメイトとのトラブルを問いただす気はな

いと、瞳子は暗に示してくれたのだ。
マリアは安堵の息を漏らした。
「あの、それでは私に何か御用ですか？」
マリアが安堵したのも束の間だった。
それではいったい何の用で、紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみと黄薔薇（ロサ・フェティダ・アン・ブウトン）のつぼみのお二人が私を呼び出したりしたのだろう？　マリアはてっきり、クラスでのトラブル――マリア自身はそうは思ってはおらず、これは身から出た錆、自分が受け入れるべき罰なのだと思っている節があったのだけれど――を菜々さんが同じつぼみである瞳子に相談し、仲裁に来たのでは考えていた。
だから、マリアは今の状況が皆目分からなくなっていた。
次に瞳子さまの口かた発せられたその言葉は、マリアにとって意外過ぎる一言だった。
「マリア、あなたを薔薇の館に招待に来たのよ」
マリアは心の中で、「えー」と叫んでいた。

9　自己紹介とお手伝い

席に座ったマリアの目の前には、紅薔薇（ロサ・キネンシス）さま、黄薔薇（ロサ・フェティダ）さま、白薔薇（ロサ・ギガンティア）さま――山百合会幹部の三人が席に座って、完全に硬直しきっているマリアを見つめていた。

マリアの隣には、マリアをこの薔薇の館に招待した紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみである瞳子さまが座っており、軽くマリアに微笑みかけるとそっと口を開いた。

「マリア、自己紹介なさい」

マリアは、言われて体をびくりと震わせた。

「あ、あの、私、一年桃組の、御園マリアです」

顔を真っ赤にして、震える声で自己紹介をしたマリアは、いったい何でこんなことになってしまったのかと頭を悩ませながら俯いてしまった。

今朝、瞳子さまに「薔薇の館に招待に来たのよ」と告げられたマリアは、その言葉通り――あの後、放課後に薔薇の館に顔を出すようにと申しつけられた。

そして放課後。

黄薔薇（ロサ・フェティダ・アン・ブウトン）のつぼみである菜々さんに案内されて、この薔薇の館にやって来た。

道中、菜々さんに助けを求めるように理由を尋ねると、彼女は首を傾げて言った。

「じつは私もよく分かっていないの。瞳子さまが、マリアさんを招待したいってだけだと思うけど」

そんなはずはないと分かっていたが、マリアはそれ以上何も尋ねず――そして今に至る。

「へぇ、この子がマリアさんね？」

マリアが自己紹介を終えると、黄薔薇（ロサ・フェティダ）さまである島津由乃さまが徐に口を開いた。

「可愛くていいじゃない」

由乃さまの大きな目が興味津々といった感じに見開かれて、まるで

自分を値踏みするように向けられている。
「由乃さん、そんな言い方をしてはいけないわ。こんなに緊張しているのだし」
由乃さまをたしなめように言ったのは、白薔薇（ロサ・ギガンティア）さまである藤堂志摩子さまだった。
二人を交互に見合わせたマリアは、薔薇のように可愛らしいお二人に目を奪われつつも、上級生の威厳とも呼べる雰囲気に圧倒されていた。綺麗な薔薇には棘があると言うけれど、このお二人もただ美しいだけのお姉さま方ではない、そんな気がしていた。
「まずは、お茶でも飲んで少し落ち着きませんか？」
場の空気を読んでそう提案したのは、白薔薇（ロサ・ギガンティア・アン・ブゥトン）のつぼみである乃梨子さまだった。
すでに菜々さんが、部屋の隅に備え付けられたキッチンで手際よく紅茶の準備しており、電気ポッドがコポコポと音を立てている。まるでダイニングルームのような部屋だなあ、とマリアは思いながら、花の飾られた楕円のテーブルを所在無さ気に眺める。
いつの間にか、テーブルの上にはクッキーが並んでいた。
「ミルクとお砂糖は？」
菜々さんによって紅茶が配られた後、乃梨子さまにそう尋ねられたマリアは、ミルクって何だろうって思いながら首を横に振った。
「それで、瞳子がマリアちゃんを薔薇の館に連れてきた理由は？きっとマリアちゃんも、それを知りたいと思っていると思うわよ」
紅茶が配られて一息する間もなく、今度は紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまである福沢祐巳さまが口を開いた。
その微笑みは、すでにその答えを知っているのでは思えるほどに穏やかだった。
「そうね、そろそろ聞かせてもらいわね」
由乃さまがそれに同意し、志摩子さまも頷く。
乃梨子さまと菜々さんは、祐巳さまにそう尋ねられた瞳子さまを凝視している。
「はい。私がマリアをこの薔薇の館に連れてきたのは――――」

マリアは、その先の言葉を想像して耳を塞ぎたくなった。
その言葉は、マリアが一番聞きたくないものだろうと勝手に想像した。
「彼女に、薔薇の館で山百合会の手伝いを頼みたいと思っているからです」
「へっ？」
だから、瞳子さまのその言葉が自分の想像しているものと違っていたと知って、マリアは驚きや安堵のあまり間抜けな声を上げてしまう。
「てっ、手伝いって、そんな私には無理です」
しかし、マリアは直ぐに瞳子さまの発言の意味を知って大きく首を横に振った。
「あら、手伝いとは言っても簡単な雑用よ。朝のホームルーム前と放課後、少しだけ薔薇の館に顔を出してくれればいいの。有意義な時間になると思うけれど？」
瞳子さまに言われて、マリアは直ぐに気がついた。
きっと、これは自分をトラブルから守るために提案してくれているのだと。
それでも、決心はなかなかつかなかった。
マリアは、瞳子さまに嘘をついてしまったことに後ろめたさを感じていた。
瞳子にお姉さまはいるのかと尋ねられ、マリアは咄嗟に嘘をついてしまった。
そして、そのことを瞳子さまはすでに知っている。知っていてなお、自分に手を差し伸べてくれているのだと知り、マリアはなおさら後ろめたさで気後れしてしまった。
「嫌かしら？」
「嫌だなんて、そんな。でも――」
マリアは何と答えればいいのか分からず、言葉を呑みこんでしまった。
「じゃあ、こういうのはどうかな？」

そんなマリアを見て、祐巳さまは微笑を浮かべながら提案した。
「明日一日だけ、薔薇の館で山百合会の体験入学をしてもらう。マリアちゃんがこの薔薇の館を気に入ってくれたら、それからしばらくお手伝いを続けてもらうっていうのは？」
「体験入学ですか？」
マリアは少しだけ興味を引かれたよう言った。
祐巳さまの提案は、瞳子さまが言った内容とさほど何ら変わらないのだが、そこはさすが親しみやすさナンバーワンの庶民の星。
妙な説得力をもって受け入れられた。
「うん。別に明日じゃなくても良いし、来たい時に来てくれればいいよ。薔薇の館はいつでも生徒を歓迎しているから」
「わっ、分りました。じゃあ、明日だけ」
祐巳さまの優しい微笑に導かれるように、マリアはこくりと頷いてその提案を呑み込んだ。
「良しっ決まりだ。それじゃあ明日からよろしくね、マリアちゃん」
ちゃっかり「明日から」という文言も入れ込んで、祐巳さまはマリアの提案を歓迎した。

☆

「はぁ、お姉さまに良いところを持っていかれました」
マリアが薔薇の館を去った後、瞳子はテーブルを片付けながら溜息交じりに言った。
「なんのこと？」
祐巳さまは本気で意味が分らないと首を傾げ、そんな姉を見て瞳子はやれやれと首を横に振った。
「マリアの事です。あんなに簡単に首を縦に振らせるなんて」
「瞳子が頼んだって首を縦に振ってくれたと思うけど」
「いいえ。私だったら、もう少し強要したような形になったと思います。だから、お姉さまに良いところを持っていかれたと言ったんです」

「だったら、姉妹のファインプレーじゃない」
嬉しそうに言うお姉さまを見て、瞳子も嬉しそうに笑った後、素直に認めるのも癪なので溜息を落しておいた。
今の薔薇の館には、紅薔薇の姉妹二人だけ。菜々さんはマリアを教室まで送って行き、他の薔薇さまとつぼみたちは二人に気を利かせるように薔薇の館を後にした。
二人で積もる話もあるだろうと。
「マリアちゃんは瞳子の妹候補？」
祐巳さまは特に他意はないと言った雰囲気で尋ねた。デリケートな話題ではあったが、お姉さまには構えた様子もなく、ごく自然体。
「いいえ」
だから、瞳子は素直に首を横に振った。
マリアを薔薇の館に案内する前、お姉さまに簡単なことの経緯の説明は話していたが、まだ誰にも話していない瞳子とマリアの出会いを、瞳子は祐巳さまに話して聞かせた。
曲がったタイを直したことだけは話から省いて。
気恥ずかしかったから。
「その時、しっかり先手を打たれているんです」
「先手？」
祐巳さまが首を傾げた。
「はい。お姉さまがいると」
「あらら」
「嘘までつかれたんですから、さすがにそれでも彼女を妹候補に、何て言うほどおめでたくはありません」
「でも、瞳子の気持ちはどうなの？」
祐巳さまが核心に触れるように尋ねた。
その全てを包みこむような表情は、すでに瞳子の答えを知っていると言っているようでさえあった。
「わかりません。でも、妹にするしないは別にしても、マリアが気になっているのは確かです」
そう、一目見た時から瞳子はマリアのことが気になっていた。

あの憂いを佩びた、何かに手を伸ばそうとするマリアの姿が、瞳子の頭から離れなかった。
「そっか。姉妹のことに関しては私が口を出すことじゃないけど、何か話したいことがあるなら聞くからね？」
お姉さまの優しい顔を見て、瞳子は微笑を浮かべて頷いた。
「はい。お姉さまに一番にお話しします」

１０　心ここに在らずと聖域

マリアは、心ここに在らずで帰宅していた。
今日一日で起こった数々の出来事を、マリアは自分の中で上手く消化できずにいた。いや、正確には昨日から自分の身に起こった数々の出来事だった。
全ては瞳子さまにタイを直された時から始まった。
そして、その紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみである松平瞳子さまに招待されて、薔薇の館の手伝いをするにまで至ったいた。
薔薇の館はリリアン女学園に通う全ての生徒にとって特別な場所であり――憧れの場所。
生徒会長である三薔薇さまと、その妹であるつぼみたちしか入ることができない神聖不可侵の聖域。
本来、生徒会である山百合会にはリリアン女学園に通う全ての生徒が所属しているので、誰でも薔薇の館を訪れる権利はあるのだが、多くの生徒たちはそうは思っていなかった。どことなく近寄りがたく、軽々しく訪れてはいけない場所。
そんなことを思っている生徒が大半だった。
もちろんマリアは知らないけれど――過去、そうした山百合会の雰囲気を変えようと努力してきた山百合会のメンバーがいて、その意思は現三薔薇さまにも受け継がれていた。
特に紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまである福沢祐巳さまには。
しかし、現実はそこまで簡単ではなかった。
マリアも山百合会や薔薇の館のことを、どこか近寄りがたく特別なものだと思い込んでいる。
だから明日、薔薇の館で山百合会の手伝いをするという事に、特別な重圧や高揚を、そしてやはり後ろめたさを感じていた。
「あーもー、どうしよう。何でこんなことになっちゃったんだろう？」
帰宅したマリアは、制服のままベッドに飛び込んで頭を抱えた。
薔薇の館に誘われたことは、正直に言えば嬉しかった。
山百合会のお手伝いをすることも。

それも紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブゥトン）のつぼみである松平瞳子さまに直接手伝いを頼まれたことは、マリアにとってはとても特別なことだった。瞳子さまに言った通り、マリア祭で彼女を一目見た時から、マリアは瞳子さまのことが気になっていた。

まるで一目惚れをしてしまったみたいに。

瞳子さまの凛とした姿が、マリアの心を奪い去って行った。

だから、マリア像の前で瞳子さまが自分の曲がったタイを直してくれた時、マリアは身支度もできない情けない自分を呪うのではなく、天にも昇るような気持でその出来事を受け入れた。

その後の嘘さえなければ。

しかし、それは厳密に言えば嘘ではない。

だけど、それを説明する言葉をマリアは持ち合わせておらず、自分自身その事実と上手く向き合うことができずにいた。

そう、自分はずっと逃げ続けいるのだ。

何もかもから。

過去から逃げ、クラスメイトから逃げ、姉妹（スール）の申し出から逃げてきた。

そして今、松平瞳子さまと――薔薇の館からも逃げようとしている。

マリアはちらりと自分の部屋の学習机の方角に視線を向けた。机の上には可愛らしい写真立てが幾つか置かれており、マリアはその写真立てをじっと眺めた。

マリア像を見つめていた時と同じように、何かに手を伸ばし、何かに縋るように。

「逃げちゃダメだ。薔薇の館でのお手伝いをお断りするにしても、ちゃんと断らなきゃ。明日一日しっかりお手伝いをして、その後でしっかりとお断りしよう」

マリアは自分に言い聞かせるように声に出し、そして小さな決意を胸に秘めた。

私は、誰とも姉妹（スール）にはならない。

たとえ、それが憧れの松平瞳子さまであろうと。

マリアは自分に何度もそう言い聞かせていた。

11　早起きと朝の空気

翌朝。

マリアはいつもよりも早く目が覚め、そしていつもよりも三十分は早くリリアン女学園に登校した。

三薔薇さまは、朝八時までこの薔薇の館を訪れる。毎朝ではないけれど、本日はつぼみも含めて全員がこの館に集合するということなので、最低でも十五分前にはこの薔薇の館に到着していることが望ましいと、マリアは菜々さんに教えてもらっていた。

お姉さま方はだいたい五分前に到着して、つぼみたちは十五分前には薔薇の館に集合する。

それが暗黙のルールのようだった。もちろん部活動やそれぞれの事情などがあるので絶対ではないが、何かの話し合いが行われる際には、このルールが適用される。

しかし気が急いてしまったマリアは、何と一時間も前にリリアン女学園に登校してしまった。

マリア像の前でお祈りをしてから薔薇の館に向うと、やはりというか当たり前のように誰もいなかった。

「やっぱり、まだ誰もいない」

マリアはそう呟きながら校内を見回してみる。

この広々とした学園の中に、まるで自分一人しかいないような感覚を覚えた。

寂しくもあり、少しわくわくもする、そんな感じ。

「そうだ。菜々さんに万が一を教えてもらったんだった」

マリアは八時十五分前に菜奈さんと薔薇の館の前で待ち合わせをしていたのだが、もしも彼女が遅刻をしてしまったら、職員室で薔薇の館の合鍵を借りられると教えてもらっていた。

すでに先生には話を通してあるとのこと。

マリアは直ぐに職員室に行って薔薇の館の鍵を借りて来た。

その際、当直の先生が「こんな早い時間に？」と驚いていた。

薔薇の館の鍵を開けて中に入ったマリアは、高揚した気分を抑えな

がら二階へと上っていく。
今、自分が全校生徒の憧れの場所にいる。
それも、たった一人で。
そう考えると、マリア自身も何だか特別な人間になったようで嬉しかった。
まるで物語の登場人物の一人になったような気がしていた。
「まぁ、そんなことは言っても私はただのお手伝い。えっと、何をするんだっけ？　せっかくだから菜奈さんを待たずに全部済ましておこう」
そう考えたマリアは、さっそく行動を開始した。
二階の窓を全部開けて朝の心地良い空気を部屋の中に呼び込み、部屋の床を簡単に履いてゴミを片付ける。濡らした雑巾でテーブルを簡単に拭き、花瓶の水を変えた。
「後は、三薔薇さまが薔薇の館に着いたら、確かお茶を用意するんだっけ？　瞳子さまはどんなお茶を飲むんだろう。やっぱり紅茶かな？」
そんなことを考えながら、マリアはティーポットとティーカップの準備を始めた。
しかし、そうは言ってもまだ七時半。
菜々さんが来るまで、まだ十五分もある。
「椅子に座って待っていよう」
マリアは一つだけ開けたままにした窓の近くに椅子を運び、穏やかな風を感じながら誰かが来るのを待つことにした。
欠伸をかみころし、うとうととしながら。

12　居眠りと妹

瞳子が薔薇の館に着くと、すでに扉の鍵が開いていることに彼女は驚いた。
直ぐに昨日の閉め忘れを疑ったが、おそらくそれは違うだろうと思った。
今は集合時間の二十分前。
おそらく、マリアが職員室に行って鍵を借りてきたのだろう。
菜々ちゃんがマリアに十五分前には薔薇の館に着いているようにと説明したことを予め聞かされていたので、手伝いを頼んだ身としては彼女よりも早く薔薇の館に到着して、彼女の指導をと考えていたが完全に当てが外れてしまった。
瞳子は「あと十分早く来るべきだったかしら？」と考えながら、二階に上がってビスケットのような扉を開く。
そして、目の前に飛び込んできた光景に呆気に取られた。
窓際に置いた椅子に腰を掛けている少女が、とても心地よさそうに眠っている。
開いた窓から差し込む木漏れ日を浴びながら、すやすやと寝息を立てている。
そんな穏やかな光景を見た瞳子は、思わずくすりと笑ってしまう。
そして、静かに部屋の中の状況を確認した。すでに掃除がされており、部屋の中は新鮮な空気で満ちていた。花瓶の水もしっかりと変えられ、人数分のカップの準備もされている。
文句のつけようもなかった。
指導する必要もなく、彼女はやるべきことを全て終えていた。
「いったい、どれだけ早く登校したのかしら？」
だから、瞳子はマリアをしばらく寝かせてあげることにした。
どうせ他のつぼみも五分前までは薔薇の館には来ないだろう。全員が瞳子に気を使って、ぎりぎりまで二人でいられる時間を作ってくれるだろうことは考えるまでもなく分っていた。

だから、瞳子はその時間を精一杯有意義に使うことにした。
瞳子は可愛らしい少女の寝顔をそっと眺めた。
「――、？」
瞳子はそこで初めて、自分が妹を持ちたいと思っていることに気がついた。
この瞬間、瞳子は妹と言う存在を強く意識していた。
自分の姉である福沢祐巳さまが、かつて自分を妹にと思い、抱いてくれた深い感情を――瞳子はようやく理解することができた。
「私は、マリアを妹にしたいのね」
自分は彼女の姉になることができるだろうか？
自分の自慢の姉である福沢祐巳さまのような。そして、その姉である小笠原祥子さまのような。
そんな素敵な姉に。
そんなことを考えてしまったら、瞳子の胸ははち切れてしまいそうなくらいに切なくなった。
甘くて、痛くて、怖くて、待ち遠しい――そんな感情でこの胸が溢れ返っていた。
「マリア、私たちは姉妹（スール）になれるかしら？」

13　幻滅と約束

「マリア、起きなさい」
マリアの耳元に、優しい声が響いた。
マリアは夢見心地でその声に耳を澄まし、いったい誰だろうと考えた。
その声はとても凛としていて、マリアの胸を強く締めつける。
思わず手を伸ばしたくなる素敵な声。
「マリア、マリア」
そして、どことなく甘い香りがマリアの鼻を擽った。
紅茶の匂い？
それにこの声は、マリアの憧れの人の声。
マリアは、はっとして起き上がった。
「とっ、とっ、瞳子さま？　あれ、私――いつの間にか寝ていて」
マリアは、とんでもない失態をしてしまったと顔を青ざめさせた。
山百合会の手伝いをするはずが、まさか居眠りをしてしまうなんて。
マリアは自分に幻滅するとともに、瞳子さまに幻滅されてしまったと絶望的な気持ちになった。
「ごっ、ごめんなさい。私、居眠りをしてしまって、それで――」
マリアが立ち上がって深々と頭を下げると、瞳子さまは瞳を丸くした。
「マリアは何も悪いことはしてないし、私も別に怒っていないわよ？
しっかり部屋の掃除をしてくれたみたいだし、花瓶の水まで変えてくれて申し分ないわ」
「でも、私？」
マリアが困ったように言うと、瞳子さまは仕方ないわねと言った感じでマリアの頭をそっと撫でた。
「居眠り事なら気にしなくていいのよ？　ここには私たち二人しかいないんだし。さすがにお姉さま方に見られたら、お叱りの一つぐらいはあるでしょうけど。そんなことより、せっかく淹れた紅茶が冷めて

しまうわ」
　そう言うと、瞳子さまはテーブルに戻って紅茶をティーカップに注ごうとした。
「あの、私がやります。やらせてください」
「気を使わなくていいわ。今日は体験入学なんだから、そんなに気を張らないでお客様気分でいなさい」
「でも、それじゃあ――」
「あら、私の淹れた紅茶が飲めないのかしら？」
　少し居丈高に言って笑ってみせた瞳子さまを見て、マリアは素直に頷くことにした。
　マリアは恐る恐るティーカップに手を伸ばして紅茶を口にした。
「甘くておいしい」
「よかった。ローズヒップティーにお砂糖を入れてみたの」
「とってもおいしいです。瞳子さまの好みなんですか」
「そうね。最近少しハマっているって感じね？」
　マリアはその情報を心のメモ帳に記しておいた。
「それより、ずいぶん早く薔薇の館に来ていたみたいだけど？」
「はい。緊張でなかなか寝付けなくて――それに早く起き過ぎて一時間前に来てしまいました」
「一時間前って？」
　瞳子さまは驚きのあまり、口元に運んでいたティーカップを思わず落としそうになった。
「私が無理やり誘ったせいで、色々いらない心配をさせてしまったみたいね。ごめんなさい」
　瞳子さまは困ったように首を振る。
「いえ、違います。瞳子さまのせいじゃなくて。私、昔からあがり症で、直ぐに緊張しちゃうんです。だから、私のせいです。それに私、舞台の上で堂々としている瞳子さまのことがすごく素敵だなってずっと思っていて。少しでもお役に立てるならって」
　マリアは立ち上がって捲し立てるように言った。
　瞳子さまを困らせてしまっただけじゃなく、謝らせてしまうなんて

ありえないことだと――マリアは必死になった。
「ありがとう。そう言ってもらえてとても嬉しいわ。じゃあ、明日からはこんなに早く登校しないこと。十五分前に到着していれば上出来だから。約束できる？」
「はい。約束できます」
マリアはそう言って大きく頷いた後、「あれ、私は明日からもこの薔薇の館に来るんだったけ？」と頭を悩ませたが、瞳子さまはすでにマリアのその言葉を受け入れていた。
「お早うございます。遅くなりました」
「ごめん瞳子、ぎりぎりになっちゃった」
マリアが首を傾げそうになっていると、八時五分前になって次から次へと山百合会のメンバーが薔薇の館に集合し始めた。
菜々さんと乃梨子さまの後に続いて、三薔薇さまたちもお見えになる。
何だか、みんな示し合わせたみたいに五分前に到着したなあと――マリアはのんきに考えていた。

１４　飴とごちそうさま

朝のホームルーム前に薔薇の館に集まった山百合会のメンバーは、簡単な打ち合わせをして直ぐに解散となった。
瞳子は菜々ちゃんと一緒にティーセットの片づけをしているマリアを自然と眺めていた。
「十五分前に集合って約束したのに遅れてごめんね」
「ううん、いいの。私なんか一時間も前に着いちゃって、それで瞳子さまに迷惑をかけちゃった」
「ええっ、一時間も前に来たの？」
菜々ちゃんは驚いて手に持っていたカップを落しそうになる。
「うん。何だけぜんぜん寝られなくて。でも、薔薇の館で居眠りをしてるところを瞳子さまに見られちゃった」
「あちゃー」
菜々さんは見事に露出した額をぺしと叩く。
「怒られた？」
「ううん、ぜんぜん。それにね、瞳子さまがローズヒップティーを入れてくれたの」
「そうなんだ、良かったね」
「うん」
瞳子は同級生と楽しそうに会話をしているマリアを見て、これならクラスでも上手くやって行けるのではと安心した。
「菜々ー、そろそろお姉さまは行くわよー」
すると、黄薔薇（ロサ・フェティダ）さまである由乃さまが妹に声をかけた。
「はい。私はマリアさんと一緒に教室に戻るのでお先にどうぞ。おつかれさまでした」
「あんたねぇ、そこは――お姉さまもう行っちゃうんですか？　くらい言いなさいよ」
由乃さまが妹に構いはじめ、妹である菜々さんは面倒くさそうに顔を顰めた。
「お姉さまこそ、昼休みには剣道部の集まりがあるんですから、逃げな

いでくださいね」
「逃げるって、人聞きが悪いわね。ちゃんと覚えてますよー」
「そんなこと言って、副部長のくせに直ぐ逃げ出すんですから」
「何か言ったかしら？」
「いいえ、何も。それではごきげんよう」
「むきー」
　由乃さまは軽々とあしらわれて薔薇の館を後にした。
「菜々さんすごいね。由乃さまとあんな風にお話しできるんだ」
　マリアは感心したように言った。
「そうかな？　いつもあんな感じだよ。でも、もっとお姉さまっぽくなってくれたらいいのにって思う」
　菜々ちゃんはしみじみと言う。
　瞳子は思わず頷きそうになる。
「きっと菜々さんがしっかりし過ぎてるんだよ」
「そうかな？」
「うん。菜々さんってすごい頼りになりそうだし、今年のミスターリリアンの筆頭だって言われてるよ」
　その言葉に、菜々さんは複雑な表情を浮かべている。
「ミスターリリアンかー」
　そんな二人の会話を遠目に眺めていた瞳子は、自分のお姉さまと白薔薇（ロサ・ギガンティア）さまである志摩子さまが込み入った話をしているのを見て首を傾げた。
「何か問題ですか？」
　近づいて二人に話を聞くと、二人は顔を合わせて神妙な表情を浮かべた。
「たいした話じゃないのだけれど」
　志摩子さまは首を傾げてなんて言ったものかと祐巳さまを見る。
「うん。ほんとたいした話じゃないんだよね」
　祐巳さまも何だか煮え切らない返答だった。
「何ですか？　お力になれることかもしれないので話してください」
　瞳子が尋ねると、お姉さまが困ったように口を開いた。

「由乃さんがね、昼休みの剣道部の集まりに参加しない口実を必死に探してたの。山百合会としては、何としても由乃さんを剣道部の集まりに出席させなきゃならない。それでいい手を考えていたってわけ」
「本当に大した話じゃないので、私は失礼します」
「こらー、瞳子。聞いたんなら力を貸しなさいよー」
祐巳さまがふざけたよう言った。
瞳子はやれやれと溜息を落してみせた。
すると、自分たちの前に一年生の二人がひょこひょことやって来た。
「ティーセットの片付けが済んだので、私たちは教室に戻ります」
菜々ちゃんが片付けの報告をする。
「あの瞳子さま、今日はご迷惑をかけてすいませんでした」
マリアは顔を真っ赤にして恐る恐る頭を下げた。
「あら、私は迷惑じゃないって言ったでしょう。謝るのはこれで最後にしなさい」
瞳子は少し厳しめに言ってマリアを嗜めた。
「はい。わかりました。それでは、失礼します」
「失礼します」
マリアと菜々さんが頭を下げて下手を後にしようとした。
「マリア」
瞳子は不意にマリアの背中に声をかけた。
「はい、何ですか？」
振り返ったマリアを見て、瞳子は咄嗟に会話を考えた。
「朝食は食べてきたの？」
瞳子が尋ねると、マリアは予想もしなかった質問に困ったように首を横にふった。
「いえ、朝食を食べるのも忘れて、何も食べずに家を飛び出してしまいました」
「はぁ、そんなことだろうと思ったわ。それじゃあ、お昼休みまでもたないでしょう？　手を出しなさい」
「手ですか？」

瞳子はマリアがおずおずと差しだした掌の上に、飴をころんと二つ置いた。
「これ――」
「こんなものでもないよりはましよ」
「瞳子さま、ありがとうございます。大切にします」
マリアは花が咲いたような笑顔を浮かべて言う。
「大切にしなくていいから、これでしっかり午後の授業まで乗り切るのよ。授業中に居眠りなんかして、あなたを薔薇の館に誘った私に恥をかかせないこと」
「はっ、はい。わかりました」
瞳子に厳しく言いつけられたマリアは、表情を強張らせて頷いた。
「それじゃあ、また放課後にね」
瞳子はそう言ってマリアを見送った。
「瞳子ったら、もうすっかりお姉さま気分じゃない」
一年生二人が出ていくと、待ってましたとばかりに乃梨子が瞳子に詰め寄よる。
おかっぱ頭を震わせながら、瞳子にどうなっているのかと尋ねる。
その際、ちらと自分のお姉さまに視線を向けてみると、祐巳さまは驚いたような表情を浮かべた後、満面の笑み咲かせていて、瞳子はどうしたんだろうと考えた。
しかし、今は乃梨子だ。
「そんなんじゃないわよ。でも、私が薔薇の館に誘ったんだし、しっかり面倒を見るのが筋ってものでしょう？」
「そんなこと言って、本当の姉妹みたいだったわよ。あー、瞳子に先を越されちゃうー」
「あら、乃梨子は妹が欲しいの？」
そんな二人の会話を聞いていた乃梨子のお姉さまの志摩子さまが、興味深そうに乃梨子に尋ねる。
「そんなんじゃないけど、私も白薔薇さま（ロサ・ギガンティア・アン・ブウトン）の妹だし。志摩子さんに恥をかかせないためにも、そろそろ妹をつくらなくちゃなあとは思ってるよ」

乃梨子は自分に矛先が向いて困ったように言った。
「あら、私は乃梨子が妹をつくらなからって、それを恥だとは思わないわよ。姉妹は強制されるべきものじゃないのだし、つくろうと思ってくるようなものでもないわ」
「そうだけど。ほら、私たちの時の例もあるし」
乃梨子は少し言い辛そうに言った。
志摩子さまと乃梨子が姉妹になる際、ここにいる山百合会のメンバーと、そして先代の山百合会のメンバーが大きく関与したという過去があった。
もちろん、瞳子も。
それは、マリア祭でのでき事。
積極的にその状況をつくったというか、状況をかき回したのは瞳子自身なのだが、その件もあって志摩子さまと乃梨子は晴れて姉妹になり、そして乃梨子の親交も深まった。
今となっては懐かしい過去の出来事だ。
瞳子はあの頃の自分はなかなかにいきがっていたというか、生意気だったなあと苦笑いを浮かべそうになった。
自分は、強がりという名の仮面をかぶっていた。
その仮面をはぎ取ってくれたのは――お姉さまである福沢祐巳さまだった。
その頃は、まさか自分が福沢祐巳さまの妹になるだなんて考えもしなかった。
おそらく乃梨子だって、志摩子さまの妹になるだなんて考えもしなかっただろう。
祐巳さまと志摩子さまも、自分たちを妹には考えていなかったはずだ。そう言ったことには、とくに疎いお二人だから。
そう考えると、誰かと姉妹になるという事がいかに難しく途方もないことなのだと、瞳子は今さらながら思い知らされた。
志摩子さまと乃梨子は、おそらく瞳子が余計なことをしたり、山百合会のメンバーが関与しなくても、いつか姉妹になっていただろう。時間がかかったとしても、二人は姉妹になれたはずだ。

祐巳さまと自分はどうだろう。
瞳子は、ふと考えた。
私とお姉さまが姉妹になるには、ずいぶんと長い時間がかかった。
クリスマスの日に祐巳さまにロザリオを渡されたが、瞳子は一度それを断った。そしてバレンタインデーの日に、今度は自分から妹にしてほしいと頼んだ。そこに行き着くまでには、多くの人たちの献身や手助けがあった。
おそらく、そうした人たちの手助けが無ければ、そして乃梨子がいなければ、自分は福沢祐巳さまと姉妹にはなっていなかっただろう。
瞳子はそう思った。
じゃあ、自分とマリアはどうだろうか？
瞳子の頭は、それだけでいっぱいだった。
「それに茶話会の例もあるしさ」
「でも、乃梨子が茶話会で妹を探している姿も見てみたいわね。それに、私もバレンタインデーの宝探しのライバルがほしいわ」
「ちょっと志摩子さん、他人事だからって」
「あら、私は他人事だなんて思ってはいないわ。それに、乃梨子の妹を見てみたいと言うのも本当よ。私、いいおばあちゃまになれるかしら？」
「もー、変なプレッシャーかけないでよ」
「うふふ。それもそうね。でも、何だか乃梨子が遠くに行くみたいで寂しい気持ちもするわね」
「志摩子さん？　大丈夫。私妹ができても、志摩子さんのことが大好きだから」
「私もよ、乃梨子」
瞳子の悶々とした気持ちとは裏腹に、白薔薇の世界に耽っている姉妹は、手を取り合ってお互いの気持ちを確認していた。
「ほんと、姉妹って素敵ね。ごちそうさま」
瞳子は皮肉っぽく言って、やれやれと首を横に振った。

15　心配と同情

菜々さんと一緒に教室に入ったマリアは、ほとんど心ここに在らずで席に付き、ぼんやりと薔薇の館でのことを思い出していた。

瞳子さまの前で居眠りをしてしまうという失態はあったが、それでも夢のように素敵な出来事ばかりだった。瞳子さまにもらったレモン味ののど飴を口の中でコロコロと遊ばせながら、マリアはその甘酸っぱい思い出に浸っていた。

しかし、そんな夢見心地な気分のマリアは、直ぐに現実へと引き戻されることとなった。

クラスメイトの大半がマリアに視線を向けて、何やらこそこそ話をしているみたい。

かすかに聞こえてくる会話には――瞳子さま、薔薇の館、姉妹（スール）、紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみなどに単語が混じっていて、考えるまでもなく会話の内容を理解することができた。

つまりクラスメイトの多くが、マリアのことを瞳子さまの妹候補であると思っており、その為に薔薇の館に呼ばれたのだと勘繰っていたのだ。

どうして私が薔薇の館にいたことを知っているのだろう？

と、マリアは思ったが、菜々さんと一緒に教室に来たことや、昨日の出来事に尾ひれがつけばそんな話もなるだろうと納得した。それに教室の端の方では、菜々さんが蘭さん、杏さん、美南さんの三人に詰め寄られて、何やら説明を余儀なくされていた。おそらく、自分のことをあれこれ説明させられているんだと考えると、マリアは申し訳なさと共に、先程まで甘酸っぱい気持ちが一瞬で消え去ってしまい、今は憂鬱な気持ちに沈んでしまう。

マリアは思った。

自分は誰とも姉妹になる気なんてなく、ましてや瞳子さまの妹候補になんてなるわけがない。

そもそも自分にはそんな資格もないし、自分と瞳子さまとでは釣り合わなすぎる。

そう真っ直ぐに伝えられた良いのに。
マリアは、どうしたらクラスメイトたちの誤解が――特に蘭さんへの誤解やわだかまりが解けるだろうと考えたが、その答えはどうしても見つかりそうもなかった。
マリアは溜息を一つ落とした。
「マリアちゃん、今朝薔薇の館にいたって本当？」
すると、前の席のユリカちゃんが振り返って尋ねてきた。
いつもはマリアの身を案じてくれる優しい友人だが、今回は興味津々と言った感じだった。さすがに薔薇の館絡みとあっては、心優しい友人も好奇心を抑えられないといったところ。
「うん。本当だよ」
「どうして薔薇の館にいたの？」
「えっとね、瞳子さまに薔薇の館で山百合会のお手伝いをするように頼まれて、それで今朝少し早めに登校して、薔薇の館でお手伝いをしたての」
マリアは詳細を省きながら必要なことだけを告げた。
「すごーい。薔薇の館で山百合会のお手伝いなんて。どんなことをしたの？」
「たいしたことはしてないよ。お部屋のお掃除とか、山百合会の人たちにお茶をお出しするとか、雑用の雑用みたいな感じ。それに、それも上手くできなかったし」
「でも、すごいよー。あの瞳子さまに頼まれたんだもん」
「うーん、頼まれたって言うよりは、命じられたってかんじなんだけど。すごくは無いと思う」
「じゃあ、瞳子さまがマリアちゃんのことを、マリアって呼び捨てにしたって言うのも本当？」
マリアはそんな話まで出回っているのかと驚いた。
「本当と言えば本当だけど」
「じゃあ、瞳子さまはマリアちゃんを自分の妹にって考えてるのね。マリアちゃんが紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン・プティ・スール）のつぼみの妹かー」
「それは絶対ない。瞳子さまが私を妹にだなんて。それに薔薇の館に

呼ばれたのだって」
マリアはその先を呑み込んだ。
「とにかく、私は瞳子さまの妹にはならないから」
マリアは断固として言い張った。
マリアは瞳子さまの考えを分っていた。
自分がクラスで孤立し、クラスメイトに嫌がらせのようなものを受けいてることを案じて、気を聞かせて薔薇の館に誘ってくれたんだということを。
それには菜々さんや、他の山百合会のメンバーが関わっているのだろうという事も。
多分、菜々さんが山百合会の人たちに話をして、それで瞳子さまが私に声をかけてくれんだ――マリアは自分の中でそう結論付けていた。つまり自分は心配され、同情されて薔薇の館にお呼ばれしただけなのだ。自分が情けないせいで、山百合会の方々に入らぬ心配をさせて気を使わせているだけ。
そんなことを考えると、マリアは自分にうんざりしてしまうとともに、今朝の瞳子さまとの素敵な思い出も苦々しいものに感じられてしまった。
口の中の甘酸っぱいはずの飴玉が、今は何故か味気なかった。

16　取材と新聞部

昼休み。
思いもよらないお客様が一年桃組に訪れた。
「御園マリアさんはいるかしら？」
クラスメイトに呼ばれて廊下に出ると、髪の毛を七三分けにしてヘアピンで止めた生徒がマリアを待っていた。
この人、どこかで見たことある。
確か、新聞部の前の部長さんだ――マリアは心の中でそう呟き、緊張で体を強張らせた。
「初めまして、御園マリアさん。私は新聞部元部長の山口真美（やまぐちまみ）よ」
「はっ、初めまして。御園マリアです」
「少しだけ、お話を聞かせてもらってもいいかしら」
快活な調子で真美さまが尋ねる。
「お話ですか？」
「ええ。ずばり聞きたいことは一つだけ。マリアさんが、紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみ松平瞳子さんの妹候補っていうのは本当かしら？」
「ええっ？」
マリアはあまりにも単刀直入すぎるその質問に驚いて、悲鳴のような声を上げてしまう。
同級生のみならず、まさか最上級生である三年生にまで自分の噂が出回っているのだと考えると、それだけでマリアは身がすくむ思いだった。自然と手足が震える。
「ちっ、違います。私なんかが瞳子さまの妹候補なんかなわけがありません。何かの勘違いというか、誤解です」
マリアが弁解するように言うと、真美さまは腑に落ちないといった感じで顎に手を当てた。
その仕草は、さながら名探偵のよう。
「でも、瞳子さんはマリアさんのことを、マリアと呼び捨て呼んでいるのよね？」
「はっ、はい」

「瞳子さんが下級生とそこまで親密になったという話は、今まで聞いたことがないのよねー。それに、マリアさんは昨日から薔薇の館に通って山百合会の手伝いをしているし。妹候補じゃないなら、他に何か理由があるのかしら？」
「そっ、それは、その――」
マリアは真美さまの追及を受け、なんと説明すればいいのかと慌てふためいた。
どうしよう。
どうしよう。
どうしよう。
「真美さま、私のクラスメイトに突撃取材はやめてもらえますか」
すると真美さまの背中から覇気のある声が響いた。
「マリアさんは山百合会の大切なお客さまです。そのお客様を怯えさせるようなやり方を、お姉さま方は喜ばないと思いますけど？」
真美さまの背中には、菜々さんが堂々と立っている。
ヒーローのように颯爽と登場し菜々さんに、マリアは縋るような視線を向けた。
「あちゃー、剣道部の集まりだって聞いていたけど、ずいぶん早く戻ってきたのね」
真美さまは、しまったと言った感じで額に手を当てた。
「ええ、簡単なミーティングでしたので。それで、この取材は瞳子さまや祐巳さまはご存じなんですか？」
「いいえ。私の独断よ」
真美さまは、きっぱりと断言して続ける。
「私たち新聞部は、リリアンに通う全ての生徒にニュースを提供する為に存在しているの。別に山百合会の許可が無くても取材はできるのよ？」
「それは知っていますが、このようなやり方、お姉さま方は歓迎しないと思います。特に、マリアさんを薔薇の館に招待した瞳子さまは」
「やっぱり、瞳子さんがマリアさんを山百合会に誘ったのね」
ずばり言い当てられて、菜々さんがしまったと口を噤んだ。

上手く話し乗せられてしまった。
菜々さんは恨めしそうに真美さまを見る。
「ごめんごめん。そんな顔しないで。大丈夫、直ぐに記事にしようなんて思っていないから。それに今日は、マリアさんに少しだけ話が聞きたかっただけだから。本当よ」
真美さまは明るく笑って、マリアに向き直る。
菜々さんは直ぐにマリアの隣に移動して、マリアを守るように真美と対峙した。
その様は、さながらお姫さまを守る騎士。
「マリアさん、突然こんなふうに押しかけてごめんなさいね」
「いえ、そんな」
マリアは突然の謝罪に大きく頭を振った。
「でも、このリリアン女学園の生徒にとって、山百合会や薔薇の館が特別なものだという事は分ってほしいの」
真美さまは優しく言った。
「紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみである瞳子さんの妹候補だと騒がれる事は、つまりこういう事なの。たくさんの生徒が、あなたと瞳子さんの関係に注目してしまう。噂話をしてしまったり、あなたに直接訪ねたりする。もしかしたら、嫌がらせのようなことをされるかもしれない。過去、私はそうした生徒を何人も目撃してきた」
真美さまは、少しだけ過去を懐かしむように言った。
「だから、私は事実を正しく伝えたいの。たくさんの生徒に正しく知ってもらって、余計な詮索や勘繰りはなるべくなしたい。それが、今の新聞部の信条。だから新聞部に伝えてほしいことがあったら、気軽に言ってちょうだい。できる限り力になるから。それじゃあ」
真美さまはそれだけ言うと、ひらひら手を振って廊下を歩いて行った。
マリアと菜々さんの目には、その上級生の姿が途方もなく大きな人に――
素敵なお姉さまに見えていた。

17　菜々さんとあっけらかん

「菜々さん、ありがとう」
　教室に戻ったマリアは、菜々さんにお礼を言って頭を下げた。
「気にしないで。私が勝手に首を突っ込んだだけだから」
「ううん。本当に助かったよ。私も菜々さんみたいに、はっきりと自分の意見を言えたらいいんだけど」
　マリアは、少し困ったように言って笑った。
　そんなマリアを見た菜々は、「そうだ」と提案する。
「明日からしばらく、私と一緒にお昼ごを飯を食べない？　そのほうが、周りの生徒も余計なことを言ったりしないだろうし」
「でも、菜々さんの迷惑じゃない？」
「ぜんぜん」
　菜々さんはきっぱりと言って微笑んだ。そして、こそこそ話をするように口元に手を当てて続けた。
「私、クラスメイトと少し距離感があるっていうか、あんまり打ち解けていない気がするんだ。だから、マリアさんと一緒にお昼ご飯食べれたら嬉しいんだけど」
「それはきっと、菜々さんが立派な黄薔薇（ロサ・フティダ・アン・ブウトン）のつぼみだからだと思うよ。それに中等部の頃から、薔薇の館に通っていたんでしょう？」
　マリアも、こそこそ話をするように小さな声で言った。
「通っていたっていうか？　まぁ、色々あってそうなったというか。ほとんどお姉さまのせいなんだけどね」
　菜々さんはやれやれといった感じで言った。
「でも、すごいよー。そりゃ、みんなも少し近寄りがたいった思っちゃうかも」
「そんなことぜんぜんないんだけどね」
　菜々さんはあっけらかんと笑う。
「あ、あの、菜々さんがいいなら、その、明日から、お昼ご飯ご一緒してもいいですか？」
　マリアは、顔を赤らめて言った。

「うん。実はね、お昼ご飯を食べるのにうってつけ場所があるの」
「うってつけの場所？」
「私のお姉さまはあんまり好きじゃないみたいだけど、祐巳さまと志摩子さまのお気に入りで、一年生の時に良く使っていた場所なんだって」
「紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまと白薔薇（ロサ・ギガンティア）さまが？　楽しみだなあ」
「実を言うとね、私、マリアさんが薔薇の館に招待されて嬉しんだ」
　菜々さんが打ち明けるように言う。
「嬉しい？　どうして？」
「私、黄薔薇（ロサ・フェティダ・アン・ブウトン）のつぼみって言っても一年生でしょ？　他のつぼみは二年生だし。やっぱり同級生がいると心強いというか、安心する」
「そっかー。やっぱり菜々さんはすごいね。私だったら、瞳子さまや乃梨子さまと一緒の立場なんて考えられないよ。考えただけで緊張しすぎて心臓を吐き出しそう」
　それを聞いた菜々さんはころころと笑った。
　ああ、何て素敵な笑顔なんだろう――マリアはそんなことを思った。
「マリアさんって面白いね」
「ええ、面白くないよ？」
「ふふふ、面白ってば。それじゃあ、今日の放課後もよろしくね」
「こちらこそ、よろしくお願いします」
　二人は微笑みあった。

18　積極的と一抹の

放課後。
薔薇の館に顔を出したマリアは、そつなく山百合会の手伝いをこなして、無事に今日の役目を終えることに成功していた。とは言っても、ほとんどお客様扱いをされていただけで、薔薇ファミリーの皆さま方と楽しくお話をしただけだった。
「それじゃあ、私はゴミを出してきますね」
マリアはせめて最後くらいはしっかり仕事をこなさなければ思い、自らのその仕事を志願した。
「私が手伝うわ」
ゴミ箱を持ってゴミ集積場へと向かって行くマリアに続いたのは、瞳子さま。
「瞳子さま、それだったら私が行きますけど」
気を聞かせてそう言った菜々さんだったが、直ぐにその語尾を小さくした。
「菜々ー、あんたはお姉さまのお手伝いがあるでしょう」
由乃さまが言うと、瞳子さまは黄薔薇ファミリーに向かって小さく頭を下げる。
マリアはそのやり取りの意味がよく分からなくて、首を傾げるしかなかった。
何かあったのかしら？
そんなことを思った。
「あの、私一人でも大丈夫ですけど？」
「あら、私と一緒じゃ嫌かしら？」
「いえ、そんなこと。でも、瞳子さまにゴミ捨てをさせるなんて」
「私のことを特別に思わなくていいのよ。紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみであるという以外は、私だって普通の生徒と変わりないんだし」
それもそうなのだけれど、そんなふうに割り切れるほどマリアは物わかりが言いわけではない。
それでも、マリアは瞳子さまの言葉に頷いた。

「はい。それじゃあ、お願います」
そうして、二人はゴミ箱を持って薔薇の館を出ていった。

☆

「瞳子ちゃんって、意外に積極的よね」
ビスケット扉から出て言った二人を見送った後、由乃が感心したように言った。
「そうねえ。きっと、祐巳さんの良い影響を受けているんじゃないかしら？」
志摩子が続き、微笑を浮かべて祐巳を見る。
「そんなことないよ。もともと瞳子は積極的なところがあるし、誰を前にしても物怖じしない性格だし」
「それもそうね。でも、祐巳さんの妹になってからは大分落ち着いていたから。やっぱり意外よ」
由乃が祐巳の言葉に反応する。
「瞳子ちゃんは、マリアちゃんを妹候補に選んだのかしら？　祐巳さん、どうなの？」
「由乃さん、気が早すぎ」
「でもー、祐巳さんだって気になっているんでしょう？　それに薔薇の館的にも、そろそろつぼみの誰かが妹を作ってくれないと困る時期だし」
由乃は、にやりと笑みを浮かべて乃梨子を見る。ぎくりとした乃梨子は、由乃の挑発には乗らないぞと知らん顔を決め込んだ。
「まぁ、最悪、茶話会って手もあるし。まぁ、お手並み拝見と行きましょうかしらね？」
「茶話会だけは、ぜったいにしませんからね」
乃梨子はついに爆発して言った。
「それに、由乃さまはご自分の妹が一年生だから、余裕ぶっていられるんです。ご自身が一番最後に妹をおつくりになったことをお忘れなく」

「私は菜々が入学するのを待っていただけよ。最後になるのは仕方ないでしょう」
　由乃も乃梨子に対抗して声を上げる。
「二人ともやめてください。お姉さま、大人げないですよ」
「菜々、あんたはどうしていつもいつもお姉さまの味方をしないのよー」
「お姉さまが間違っているからです」
　菜々はきっぱりと言った。
「それと、あまり妹候補のことで盛り上がるのも止めてください。クラスでもその話題で持ちきりで、マリアさんもすごく困っているんですから？」
「そうなの？」
　由乃が心配したように尋ねる。
「嫌がらせは続いているの？」
　乃梨子が続いて尋ねる。
「今のところ収まっています。瞳子さまが直接釘を刺したので暫くは何もないと思いますけど、やっぱり噂話だけは収まりそうもなくて」
「でも、こうして薔薇の館に通っていれば嫌がらせを受けることもなくなるでしょうよ。後は瞳子ちゃんがマリアちゃんを妹にすれば、万事解決よ」
　由乃が腕を組んで自信満々に言い、菜々は溜め息を吐いた。
「そんなに簡単な話じゃないと思います。瞳子さまには先にお話ししたんですけど、今日新聞部の真美さまがマリアさんにお話を伺いにやってきたんです」
「真美さんが？」
　その言葉に反応したのは祐巳だった。
「はい。でも、記事する気は無いと仰っていましたし、それに取材というよりも、この噂話が広まるのを心配しているような雰囲気でした」
　そこまで聞いて、祐巳は考えた。
　以前の新聞部ならいざ知らず、真美さんの代の新聞部はゴシップネタを提供したり、特ダネを追うような姿勢は取っていない。新聞部の

部長が真美さんから、妹の高知日出実ちゃんに移っても、その姿勢や方針は変わっていないはず。

その真美さんが、わざわざマリアちゃんを気遣って話を聞きに来たという事は、この問題は自分たちが考えている以上に大きくなっているのかもしれない。

そんな、一抹の不安が祐巳の脳裏に過っていた。

19　わだかまりと結び直し

「今日一日、薔薇の館体験はどうだったかしら？」
　ゴミを捨てに向っている最中、瞳子さまが何気なくねた。
「あの、とても素敵な体験でした。まさか、私なんかが薔薇の館に招待されるなんて思ってもなかったので」
「そう。それじゃあ、明日からも手伝ってもらえるのかしら？」
「えっ？」
　瞳子さまに尋ねらて、マリアは言葉に窮した。
「このままなし崩し的に薔薇の館に通ってもらう事もできたけれど、私ははっきりとさせておきたい性質（たち）だから、もう一度聞くことにするわ」
　瞳子さまは言葉に誠実さを滲ませて続ける。
「それに、私のせいでマリアに迷惑をかけているみたいだし」
「迷惑ですか？」
「私の妹候補なんて言われて困っているでしょう？」
「それは――」
　マリアは血の気が引いたように背筋を凍らせ、おそるおそる瞳子さまを見る。
　瞳子さまは優しい微笑を浮かべたまま、マリアを見つめている。
　あのマリア像の前で――初めて二人が出会った時に浮かべていた笑顔そのままで。
　その微笑みの意味は、直ぐに理解することができた。
　瞳子さまは、私に告白するチャンスを与えて下さっている。ここで素直に言いださなければ、自分は二度と瞳子さまの前に顔を出せなくなってしまう。
　マリアはそんなふうに考えた。
「あの、瞳子さま、私――」
　マリアは意を決して告白をした。
「私、瞳子さまに初めてお会いした時に、嘘を吐いてしまったんです。あの、私、その――ごめんなさい。ほんとうに、ごめんなさい」

マリアは主語を曖昧にしたまま、謝罪の内容を口にしないまま、深々と頭を下げた。
お姉さまがいると嘘を吐いてしまったとは、その嘘の本当の意味を、どうしても口に出せなかった。
それだけは口にしたくなかった。
だって――
「マリア、顔を上げなさい」
少し厳し目の声が後頭部に突き刺さって、マリアはおそるおそる顔を上げる。
「瞳子さま？」
しかし、顔を上げると瞳子さまの表情は優しい微笑のまま。
どうしてそんなに優しい顔ができるんだろう？
マリアは胸を締めつけられながら、そんなことを思った。
「私のほうこそ、ごめんなさい。あなたにつまらない嘘を吐かせてしまったわね？　素直に話してくれてありがとう」
「瞳子さま、そんな、私が悪いんです」
マリアは、泣きそうになりながら言った。
「馬鹿ね。そんな顔しないの」
瞳子さまはマリアにそっと寄り添って、少しだけ乱れたタイに手を伸ばした。
そして優しく撫でてからそのタイを直した。
まるで、二人の中にあるわだかまりを解き――
しっかりと二人の絆を結び直すように。
「私のせいでマリアに迷惑が掛かっているのなら、これ以上、無理に薔薇の館に手伝いに来ることは無いわ。新聞部に掛け合って、誤解を解くよう記事を出してもらうこともできる」
瞳子さまは少しだけ残念そうに言った。
マリアは、その言葉に大きなショックを受けていた。
そのことに気がついた。
瞳子さまとの関係を、ここで終わらせたくはないと思っていた。
そのことに、ようやく気がついた。

今までたくさんことから目を背けて逃げ続けてきたマリアだったけれど、この関係からは逃げたくないと思った。
だから、一歩を踏み出してみようと決意した。
「私、もうしばらく薔薇の館でお手伝いをしたいです。瞳子さまの、お手伝いがしたいです」
マリアは、勇気を振り絞って言い切った。
すると瞳子さまは意外そうな表情を浮かべた後、にっこりと微笑んでくれた。
「ありがとう。そう言ってもらえて嬉しいわ」
「はい。私も嬉しいです」
マリアもつられてにっこりと笑った。
このまま、少しずつ二人の関係を良いものにしていける。
そんな希望が二人の中には生まれていた。
「でも、マリア――」
しかし瞳子は急にじろりと目を細めて、マリアの額を指ではじいた。
「私の手伝いで薔薇の館に通うからには、これからは厳しくいくわよ。覚悟しておくように。いいこと？」
「えー、そんなー、瞳子さま」
「そんなー、じゃない。まずは言葉使いから指導する必要があるみたいね？」
「ひー」
瞳子さまは厳しく目を光らせていた。
しかし、マリアの胸は大きく弾んでいた。
そのことに、二人ともが気づいていた。

20　俎板と私なんか

噂が広まるのは早いもので。

マリアが薔薇の館での手伝いを続けると決意した翌日には――全校生徒がマリアの存在を知っているのでは思うほど、マリアは注目のまとへと変わっていた。そして、自分に向けられる視線やヒソヒソ話の多さにたじろいだ。

今までと違い、同級生だけでなく上級生までもがマリアに視線を送る。これまでは興味や好奇心、些細な悪意と言った感情が向けられていたけれど、今日からは値踏みや品定めというものまでが含まれるようになった。

松平瞳子さまが懇意にしている下級生という見られ方。

もしかしたら、紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブゥトン・プティ・スール）のつぼみ の 妹なのでは――という視線。

突然現れたシンデレラガールの登場に、学園全体が色めき立ったみたいだった。

「なんだか俎板（まないた）の上の小魚にでもなったみたいだよ」

「それを言うなら鯉なんじゃ？」

「私って鯉って感じじゃないし、せいぜい小魚だよ」

マリアの悲鳴交じりの言葉に、菜々さんはくすくすと楽しげに笑う。

二人はお昼休みになると逃げるように教室を出て、約束をしていた紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまと白薔薇（ロサ・ギガンティア）さまのお気に入りの特等席に向った。

それは講堂の裏手。銀杏の中に一本だけ桜が混ざって生えている、目立たない場所だった。

二人はそこにお弁当の包みを広げて座った。

「季節限定の場所なんだって。春と秋の晴れた日」

「夏は？」

「桜に毛虫がわくみたい」

「それはギャーって感じだね」

「でしょ」

菜々さんは楽しそうに言ってお弁当のおにぎりを一口頬張る。

菜々さんとおにぎりはとてもベストマッチに見えた。さすが剣道少女。
マリアも持参してきたサンドイッチを頬張り、ようやく訪れた平穏に小さな溜息を落した。
「ふう」
澄んだ空を見上げると、雲がゆっくりと流れていく。青い空に白い雲。その下には黄葉した銀杏の葉が太陽の光を浴びて金色に輝いている。マリアはそんな光景に目を奪われながら、紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまと白薔薇（ロサ・ギガンティア）さまもこの景色を見ていたのかなあと考えた。
それに、この場所でいったいどんなことを話したんだろう？
きっと素敵なことだろうなあ？
私のように、紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）さまのつぼみの妹候補だなんて噂されて、逃げるようにこの場所に来たりなんてしなかったはずだ。
そんなことを思った。
「大丈夫？」
そんなマリアを見て、菜々さんはそれとなく気を使ってくれる。
「うん。菜々さんもいるし、なんとか。それに朝と放課後には瞳子さまにも会えるし、そこで元気を補充する」
マリアは心配ないとにっこりと笑って言ってみせた。
そして、大きく口を開いてサンドイッチを丸呑みする。
「マリアさんは瞳子さまが好きなの？」
「えっ？」
いきなり直球で尋ねられた質問に、マリアは戸惑う。
まさかそんな質問をされるとは思っていなかったけれど、少し考えればその質問は当然のものだった。
全校生徒が、マリアのことを瞳子さまの妹候補と考えるといるように、菜々さんだってそう思うのも無理はない。もちろん山百合会の他のメンバーだって。
菜々さんは、いずれマリアが瞳子さまの妹になると思っているのかもしれない。
「ごめんね、急に」

菜々さんは、戸惑うマリアを見て一言謝罪を口にする。
「興味本位で聞いてるんじゃなくて、私にとっても大事なことだから聞いておきたくて。私、回りくどい尋ね方とか苦手だから、いつもストレートな物言いになっちゃうんだ。答えたくなかったぜんぜん答えなくていいんだけど、マリアさんが瞳子さまのことをどう思ってるのか気になって」
そんな真っ直ぐな菜々さんに当てられて、マリアは口を開いた。
「私、瞳子さまのことが好き。でも、妹にはなれない。そもそも瞳子さまは――私なんかを妹にしようなんて思わないと思うけど」
はっきりと妹にはなれないと口にした後、マリアは気恥ずかしくなって慌てて付け足した。
私なんか、と。
「そうかなあ？　私はマリアさんと瞳子さまはお似合いだと思うけれど」
「そんなことないよ」
「だって、瞳子さまが特定の下級生と親しくなるなんて今まで一度もなかったし、マリアさんと一緒にいるときの瞳子さまってすごく楽しそうだし」
「楽しそう？」
そんなことはないと思うけど――マリアは心の中でそう思った。
だって、いつも迷惑をかけてばっかり。
タイを直されたり、居眠りしているところを見つかったり、朝食代わりに飴玉を下さったり、よくぞ呆れられないものだと思ってしまうほどだ。
「うん。なんていうか、お姉さまの祐巳さまといる時は違った雰囲気。とても楽しげな感じ。ごちそうさまってくらい。ああ、でも、私はマリアさんに、瞳子さまの妹になることを無理強いするつもりはないから。私は、マリアさんが薔薇の館に手伝いに来てくれるだけで嬉しいし」
「ありがとう」
マリアは申し訳ない気持ちをでお礼を言った。

「でも、瞳子さまの前で――『私なんか』、なんて絶対に言わないほうがいいと思うと。たぶん悲しむと思うし、それ以上に厳しくお叱りを受けるだろうから」

菜々さんの忠告に、マリアはぎょっとする。

悲しむかどうかは分からないけれど、たしかに厳しい雷は落ちてきそうだった。

「うん。気をつけるね」

「私だって、マリアさん『なんか』、なんて思ってないよ。それだけは忘れないでね？」

マリアは、今すぐに泣きそうになっていた。

こんなにも素敵な菜々さんは、やはり黄薔薇（ロサ・フェティダ・アン・ブウトン）のつぼみに相応しい生徒だと、心から思った。

「ありがとう」

21　輪の中と輪の外

マリアが薔薇の館に出入りをするように一週間が経つ。
そろそろ本格的な梅雨が到来しそうで、空模様はいつも不安定。
それでも、マリアの心はとても弾んでいた。
毎日毎日薔薇の館で三薔薇さまの――そして瞳子さまのお手伝いをできることが嬉しくて、そして菜々ちゃんと一緒にいられることが楽しくて、こんな日々が毎日続いたらいいのになあ、そんなことを考えるようになっていた。
薔薇の館での仕事もほぼ問題なくこなせるようになり、今では瞳子さまに言いつけられる前に大抵のことは済ませられるようになっていた。瞳子さまや、ほかの山百合会メンバーのお茶の好みも全て把握した。
瞳子さまはローズヒップティーに角砂糖を一つだけ入れる。
それは直ぐにマリアの大好きのお茶の飲み方になった。自宅でも毎晩ローズヒップティーを飲んでいるくらい。
菜々ちゃんはほうじ茶を好んでいて、おばあちゃんみたいだと指摘したら複雑な顔を浮かべて笑ってくれた。
そんな毎日がとても楽しかった。
自分もこの特別な聖域の一員になれたみたいで、少しだけ誇らしかった。
「それじゃあマリア、私は演劇部に顔を出すから、今日は適当なところで上がって良いわよ」
「はい。分かりました」
放課後。
いつものように薔薇の館に顔を出すと、マリアは瞳子さまにそう言われる。
瞳子さまはそのまま演劇部に向ってしまい、他の山百合会のメンバーにも――今日は帰っても大丈夫だと言われた。
「マリアちゃん、今日はもう大丈夫よ。お手伝いは菜々がいれば事足りるでしょうし」

由乃さまが所在なさげなマリアにそう声をかける。
「お姉さまがもう少し動いてくだされば私も必要ないと思いますけど？」
「菜々、あんたねー」
「お茶のお変わりいれますね」
黄薔薇ファミリーはいつのものように楽しそう。
他の薔薇さまたちも特にマリアに仕事を振るということはなく、少し前のお客様扱いに戻ってしまったみたいで、マリアはそれが少し悲しかった。やっぱり、まだ自分はこの中の一員じゃないんだと、そう思った。輪の中じゃなく、輪の外にいるんだと。
それに、多分、私に気を使ってくれているんだ。
マリアは直ぐにそのことに気がついた。
「あの、私、今日もお手伝いをして行っていいですか？」
マリアがそう志願すると、山百合会のメンバーは少し驚いたような顔をした。
「それじゃあ、今日も手伝ってもらおうかな？」
そう言ってくれたのは、福沢祐巳さまだった。
瞳子さまのお姉さまで、紅薔薇（ロサ・キネンシス）さま。
満面の笑みで微笑んだ祐巳さまを見て、マリアはとても嬉しくて大きく返事をして頷いた。
「はいっ。よろしくお願いします」

22　祐巳さまと憧れ

山百合会の仕事が終わり、ゴミ出しをしていたマリアが薔薇の館に帰ってくると、そこには祐巳さましかいなかった。
「あれ、他のみなさま方は？」
「みんな先に帰っちゃった。マリアちゃんを待たずにごめんね」
祐巳さまが席に座ったまま言う。
「いえ、そんな」
「マリアちゃんももう帰っても大丈夫だよ。今日もありがとう」
「はい。祐巳さまはお帰りにならないんですか？」
「瞳子を待ってから一緒に帰ろうと思って」
「瞳子さまを？」
「うん。瞳子は部活が終わった後も必ず薔薇の館に顔を出すから。顔を出さなくても大丈夫って言ってるんだけどね」
マリアは、その言葉を聞いてとてもうらやましく思った。
二人の関係をとても素敵なものだと感じた。
おそらく、二人はお互いをとても理解しあっているんだろうなって、そんなことを思った。
本当の姉妹のように。
マリアは、そんな二人の関係に手を伸ばしたくなった。もっとそばにいて、もっと二人のことを知りたいと。
「それじゃあ、私はお先に失礼します」
だけど、マリアは姉妹水入らずの邪魔をしてはいけないと思ってそう言う。
すると――
「そうだっ。マリアちゃんも一緒に瞳子を待たない？」
祐巳さまはそう言ってマリアを引きとめた。
その微笑を浮かべた顔は、まるで全てを理解しているみたいでマリアをドキリとさせる。
全て見透かされているんじゃないかと。
「でも、お邪魔じゃありませんか？」

「ぜんぜん。瞳子だって、マリアちゃんが待っててくれた嬉しいと思うよ」
「そうでしょうか？」
「うん。絶対にそうだよ。でも、この後予定があるなら無理に引き止めたりはしないけれど」
「いえ、予定はありません。私も瞳子さまを待っていたいです」
マリアは慌てて言う。
すると、祐巳さまはことさら嬉しそうに笑ってくれた。祐巳さまの一挙手一投足がマリアの胸を強く締めつけた。
祐巳さまに「座って」と言われ、マリアは向かいの席に腰を下ろす。
「瞳子のわがままに付き合ってくれてありがとね。強引に薔薇の館に連れてこられたりして、驚いたでしょう？」
「そんな、わがままだなんて。それに無理やりなんかじゃないです」
「なら良かった」
祐巳さまはにっこりと笑って続ける。
その無防備な笑顔が、マリアの胸をざわめかせる。
「実はね、私が最初に薔薇の館に通うようになったのは――私のお姉さまに無理やりな賭けを持ちかけられたからなの。私のお姉さまって言うよりは、山百合会のメンバー、薔薇さまがたにかな」
「祐巳さまのお姉さま？」
マリアが尋ねると、祐巳さまがとても懐かしそうに遠くのほうを見る。
「うん。私の先代の紅薔薇（ロサ・キネンシス）さま――小笠原祥子（おがさわらさちこ）さま。私の大切なお姉さま」
祐巳さまはお姉さまの名前をとても愛おしそうに呼ぶ。まるで抱きしめるみたいに。
「賭けっていうのは？」
「私を妹にできるかどうか、かな？」
「ええっ、祐巳さまを妹にできるかどうか？」
マリアは驚いて大きな声を上げる。
姉妹（スール）になることを賭けるなんて、そんなこと考えたこともなかっ

た。
「そう」
「ということは、祐巳さまは小笠原祥子さまの――先代の紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまからの姉妹（スール）の申し出をお断りしたんですか？」
「うーん、まぁ、そういうことになるのかなあ？」
祐巳さまは困ったように首を傾げる。
そこには、言葉では説明できない複雑な事情があることが伺えた。
「祐巳さまは、小笠原祥子さまの姉妹（スール）になりたくなかったんですか？」
「ううん。私は、ずっと祥子さまに憧れていた」
祐巳さまは、はっきりと告げて続ける。
「祥子さまがマリア祭で私たち一年生のためにピアノを弾いてくれた時から、私はずっと祥子さまを意識してたの。まさか、私が祥子さまの妹になるなんて夢に思わなかった。私と祥子さまなんて庶民とスターくらい違うって、そう思ってた」
私と同じだ。
そう思ったら、マリアは次の質問をするために無意識に口を開いていた。
「じゃあ、どうして姉妹（スール）の申し出お断りになったんですか？　嬉しくなかったんですか？」
「すごく嬉しかったよ。嬉しくて、頭が真っ白になっちゃうくらい。断った理由だけど――うーん、それも説明するのは難しいんだけど、たぶん、マリアちゃんなら分るんじゃないかな？」
「私なら、分る？」
「スールって、憧れだけでなれるものじゃないでしょ？」
その言葉に、マリアは胸の内を全て見抜かれたような、そんな気分になった。
マリアは、祐巳さまに自分のことは何一つ話していない。
私の事情なんて何一つ知らないはずなのに、それなのに――祐巳さまは私の胸の内を言い当てた。
そう。
姉妹というものは、憧れだけでなれるものじゃない。

ロザリオを渡したところで、本当に姉妹になれるわけじゃない。
本当の姉妹というものは、もっと別のもの。
そう言うものなのだ。
私は、それを知っている。
マリアは、そんなことを考えながら口を噤んでしまった。
「ごめんね。昔話につきあってもらって」
祐巳さまは、そんなマリアを見て優しく言う。
「いえ、お話聞けて良かったです。でも、どうしてそのお話を私に？」
マリアはその答えを分っていながら質問を口にした。
「マリアちゃんがいつか誰かの妹になる時、その時に後悔しをしてほしくないって思ったの」
「後悔ですか？」
「姉妹（スール）になることだけが、このリリアンでの学園生活じゃないけれど――それでも、お姉さまをもって、誰かの妹になることは、とても素敵なことだと思うんだ。かけがえないものだと。私は、祥子さまと姉妹（スール）になれてとても幸せだったし、瞳子と姉妹（スール）になれて本当に嬉しかった。だから、マリアちゃんが誰かと姉妹（スール）になる時も、それを素敵な思い出にしてほしいって思ったの。まぁ、おばあちゃんからの余計なお節介だと思って」
「おばあちゃん？」
マリアは意味が分からずに首を傾げた。
でも、祐巳さまの言葉の意味は、言いたいことは分かり過ぎるくらいに分った。
いつか瞳子さまの妹になるなら、それを素敵な思い出にしてほしいと、その決断に後悔はしてほしくないと言っているのだ。
マリアは、祐巳さまの優しさに心を震わせた。
さりげない言葉の一つ一つに祐巳さまの優しさと、穏やかな心遣いが詰まっているように感じられた。
だけど、そんな優しさがマリアの胸を締めつけた。
祐巳さま、ごめんなさい。
私、瞳子さまの妹にはなれないんです。

やっぱり、私はここにいちゃいけないのかもしれない。
こんな素敵な方々のいる場所に、私なんかがいちゃいけない。
マリアはそんなことを考えてしまった。

23　マリア様とシンデレラの魔法

「お姉さま、まだいらしたんですか？　それに、マリアも？」
　瞳子さまが薔薇の館に戻ってきたのは、マリアと祐巳さまの会話がちょうど終わったところ。
　まるで二人の会話がひと段落するのを見計らったかのように、瞳子さまがビスケットの扉を開けて目を丸くする。
「お帰り、瞳子。演劇部おつかれさま」
「お姉さまこそ、山百合会のお仕事おつかれさまです」
　二人は互いの労をねぎらったが、直ぐに瞳子さまは眉を寄せる。
「って、違います。どうして、二人がまだ薔薇の館に残っているんですか？」
「マリアちゃんと二人で瞳子を待ってたんだよ。ね？」
「はっ、はい」
　祐巳さまに振られてマリアは首を縦に振る。
「はぁ、お姉さまに付き合わされたのね？　マリア、今日は帰って良いって言ったでしょう」
「いえ、私が手伝わせてくださいって言ったんです。それに、祐巳さまがいろいろなお話をしてくださったのでとても楽しかったです」
「お姉さま、余計なこと言っていないでしょうね？」
　瞳子さまが、じろりと祐巳さまを見て尋ねる。
「余計なことって？」
「余計なことは余計なことです」
「わからないなー」
「まったくもう」
　楽しそうに恍(とぼ)ける祐巳さまを見て、瞳子さまは「やれやれ」と首を横に振る。
　そんな光景が、どうしてかマリアの胸を強く締めつけた。
　そんな些細な会話を、とてもうらやましく思った。
　だって、二人が本当の姉妹のように見えたから。
　その輪の中に私も入れたなって――マリアは、そんなことを思って

しまった。
「さぁ、早く帰りましょう。マリアも行くわよ」
「はい」
マリアは、祐巳さまと瞳子さまの間に挟まれて帰路を辿る。
マリア像の前で三人仲良く手を合わせると、祐巳さまが楽しそうに言った。
「なんだか、私たち家族みたいだね」
マリアは、本当だと思った。
先ほど、心の中で瞳子さまの妹になれないと祐巳さまに謝罪をしたばかりなのに――マリアは、もっとこんな時間が長く続けばいいのにと願っていた。
マリア様に。
お願いだから、もっと瞳子さまと祐巳さまと一緒にいさせて欲しいと。
マリアは、そんな自分勝手で優柔不断な自分をとても情けなく思った。
でも、この時間は長くは続くない。
もう少しで、私にかけられた魔法は解けてしまう。
そのことをマリアは知っていた。
シンデレラの魔法は、長くは続かないのだから。

☆

自宅に帰ってくると、マリアは制服を着替える前に花瓶の水を取り替えて、綺麗な水と入れ替えた。そこに飾られた白い百合の花を眺めて、それがまだ綺麗に咲いていることを確認する。
百合を飾った花瓶を写真立ての隣に置くと、マリアは小さく「ただいま」と言って微笑む。
これが、マリアの日課。
マリアは制服を着替えながら、今日一日の出来事を振り返る。
祐巳さまの言葉が、いつまでもマリアの頭の中から離れなかった。

「姉妹(スール)って、憧れだけでなれるものじゃないでしょう？」

２４　衣替えとマスタードタラモサンド

翌日は六月だった。
衣替えだ。
リリアン女学園の制服もデザインこそ変わらないけれど、生地が薄くなって全体的に軽くなる。マリアは意味もなくくるくると回りたくなった。
そんな楽しげな気分とは裏腹に、天気はどんよりとした曇り空。灰色の絵の具を分厚く塗りたくったような重い空模様を見て、マリアは「雨は降らないかしら？」、そんなことを考えた。
いちおう、折りたたみ傘を鞄に入れて登校することにした。
家を出る前、お母さんが嬉しそうに言った。
「マリア、最近楽しそうね？」
「そうかな？」
「ええ。毎朝お手伝いしている山百合会だっけ？　そのお手伝いに行くようになってからほんと楽しそう」
毎朝早起きをしてお弁当を作ってくれるお母さんが、ほっとしたような顔でお弁当を渡してくれる。マリアは心の中で、いろいろ心配をかけていたんだと思って胸が痛くなった。
「うん。素敵な先輩たちのお手伝いが出来て楽しいよ。いってきます」
マリアはにっこりと微笑んで家を出た。
今朝も薔薇の館での手伝いをこなして、菜々さんと一緒に教室に戻る。最近は菜々さんとの距離もぐっと縮まったような気がして、なんかだ友達って感じの雰囲気が強くなった。もっと菜々さんと仲良くなりたいと、マリアは密かに思いを募らせる。
「今日も、お姉さまはだらしなかった。今度なにか悪戯（いたずら）をして懲（こ）らしめたいなあ」
「懲らしめるって、お姉さまにそんなこと」
「お姉さまだからだよ。それに、剣道部の副部長でもあるんだからもっとビシっとしてもらわないと。部長に迷惑かけっぱなしだし」

「そうかなあ？　私にはしっかりしたお姉さまに見えるけれど」
「ぜんぜん。由乃さまを懲らしめる良いアイディアがあったら教えてね？」
そう言って、菜々さんはからりと笑った。
菜々さんはとにかく楽しいことが好きで、いつも何か面白いことを探している。
そして、黄薔薇（ロサ・フェティダ）さまである由乃さまには人一倍厳しくて、絶対に甘やかしたりしない。下級生が甘やかすっていうのもおかしな話なんだけれど、由乃さまと菜々さんの関係は他の姉妹とは少し違っていて特別。言いたいことは何でも言い合い、ぶつかることに遠慮や妥協がない。
マリアは自分が菜々さんのように、瞳子さまと言い合ったり、ぶつかったりしているところを想像してみた。
頭の中で思い描くだけで、そら恐ろしかった。
ただでさえ自分のことを話したり、主張することが苦手な私が、あの瞳子さまと言い合う？
眩暈がして今にも倒れてしまいそう。
菜々さんって本当にすごいなあ。
廊下を歩く菜々ちゃん顔を見ながら、マリアが心の中で深く感心する。
「私の顔になにかついてる？」
すると、菜々さんが不思議そうな顔でマリアに尋ねた。
「ううん。なんでもないの」
マリアは、慌てて首を横に振った。
「今日のお昼も一緒に食べれる？　剣道部の集まりとかない？」
「大丈夫だよ。一緒に食べよう」
「天気は大丈夫かなあ？」
「天気が悪かったらミルクホールに行けばいいよ」
ミルクホールはパンや飲み物を売っている売店兼食堂で、お弁当を持ってきて利用することもできる。マリアはあまり利用したことがなかったけれど、菜々さんと一緒ならミルクホールも楽しいだろうな

あと思った。
「そっか、ミルクホールもいいね」
「そう言えば、ミルクホールにはマスタードタラモサンドっていう知る人ぞ知る激辛のパンが売っててね、一部の生徒から熱狂的な人気があるらしいの。そうだっ。お姉さまにマスタードタラモサンドを差し入れしてみようかな？」
「ええっ。それはまずいよ。激辛のパンなんて」
二人はくすくすと笑いながら教室に入って行った。
教室に入って自分の席に着くと、マリアは直ぐに声をかけられる。
「マリアさん」
振り返ると、そこには蘭さんが立っていて、マリアを真っ直ぐに見据えている。その表情はとても真剣で、いつもの剣呑のとした雰囲気とは少し違っていた。
「今日の放課後、少しだけ時間を頂けるかしら？」
それは、まるで果たし状を突きつけるかのような言い方だった。
マリアは咄嗟に菜々さんに助けを求めるような視線を向けようとして、「だめだ」と心の中で言った。
これは、今まで蘭さんと向き合わずに来た――そして、多くのことから逃げ続けてきたつけ。
それが、ついに回ってきたんだ。
自分は今、これまで目を背けてきた多くのことの清算を迫らている。
蘭さん、姉妹（スール）、山百合会、菜々さん、そして瞳子さま。
今回は、逃げちゃダメだ。
絶対に。
マリアはそう自分に言い聞かせて、蘭さんを見つめて口を開いた。
「うん。いいよ」

25　嘘と仮面

放課後。

マリアは、蘭さんに呼び出された場所に向っていた。

教室を出る前、菜々さんが心配そうな顔で「一緒に行こうか？」と言ってくれたけれど、マリアは首を横に振った。

「大丈夫。あと、お願いなんだけれど、このこと、山百合会の人たちに――ううん、瞳子さまに話さないでほしいの。余計な心配をかけたくないから」

マリアが懇願するようにそう言うと、菜々さんはしぶしぶと頷いてくれた。

マリアは、約束の場所で先に待っていた蘭さんと向き合う。

「こんなところに呼び出してごめんなさい」

蘭さんはそう口にすると、マリアを真っ直ぐに見据える。

短い髪の毛を綺麗に切りそろえた、意志の強そうな瞳の女の子。スレンダーな体にすらりと伸びた手足。透き通るような白い肌は、彼女の潔癖さと真っ直ぐさを象徴しているみたいに見えた。

三守（みかみ）蘭さん。

出席番号がマリアの一つ前で、一番初めに声をかけてくれた同級生。

マリアがリリアン女学園で最初に言葉を交わした女の子。

最初の友達。

同じ上級生に――紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみの瞳子さまに、一緒に憧れたクラスメイト。

そんな蘭さんと、マリアは今――まるで対峙するかのように向き合っている。

場所は中庭。

空は相変わらず曇り模様で、少しだけ肌寒い風は向かい合う二人の頬を撫でる。空気は若干の湿気を含んでいて、どことなく雨が降りそうな気配がした。

それでも、喋った声が壁や天井にぶつかって響かないこの場所は、

二人で会話をするにはうってつけの場所だった。ここで交わした会話は、風はくるんでどこか遠くに運び去ってくれるだろう。
「山百合会のお手伝いはどう？」
蘭さんに尋ねられて、マリアは少しだけ拍子抜けしてしまう。
まさか世間話をするために呼び出したなんてことはないだろうけれど、それでも蘭さんが穏やかに話を進めようとしているのだと感じてホッとした。
「あんまり役に立ててないと思うけど、力になれたらいいなあって思ってる」
「そう。瞳子さまに誘われたっていうのは本当なの？」
「本当」
「マリアさんは、瞳子さんの妹になるの？」
「それは――」
マリアはそう尋ねられて言葉に詰まってしまう。
その質問をされることは分っていたけれど、いざ目の前で質問をされると、やはりなんて言葉にするのが正解なのか分らない。
「ううん。私は瞳子さまの妹にはならない。それに、瞳子さまが――私なんかを妹にするはずはんてないよ」
そういった時、菜々さんの顔が思い浮かんだ。
そして、菜々さんが言ってくれた言葉を思い出してちくりと胸が痛む。
『私だって、マリアさんなんか、なんて思ってないよ。それだけは忘れないでね？』
「ねぇ、マリアさん――あなたは、私のお姉さまがあなたを妹にって思ったことも、私『なんか』って言葉で片付けてしまうの？　私のお姉さまだけじゃない。マリアさんに姉妹（スール）の申し出をした他の上級生の方々も、マリアさん『なんか』って思って、あなたを妹にしようと思ったって思っているの？」
蘭さんは静かにそう言ってマリアを見つめる。
穏やかな口調だったけれど、その声音には厳しさと深い悲しみの色が濃く浮かび上がっていた。

当たり前だ。
自分のお姉さまの気持ちが、そしてマリアに姉妹（スール）の申し出をした上級生の気持ちが踏みにじられた、軽んじられた。蘭さんがそう思ったとしても仕方のない発言だった。
私『なんか』。
その言葉がどれほど相手を傷つけるかを、この期に及んでマリアはまだ理解できていなかったのだ。
大切な友達がそう言ってくれたにもかかわらず。
「マリアさんだって分っているんでしょう？　瞳子さまが、わざわざ興味も好意もない一年生を薔薇の館に招待すると思う？　わざわざ一年生の教室までやってきて、世話を焼いたりするなんて思う？　私なんか――そんな程度の下級生を気にすると思う？」
マリアはそう言われて尚更押し黙ってしまう。
分っていた。
蘭の言っていることは全部分っていた。
瞳子さまの気持ちも、瞳子さまがマリアも対して抱いてる気持ちも――瞳子さまがいずれを自分を妹にと望んでいることも、全部分っていた。
分っていて、その気持ちに甘えて、その関係の心地良さに溺れてしまっていた。
いずれ終わりが来ると分っていながら。
「私なんか、誰の妹にも相応しくないからって――そんな理由でマリアさんは姉妹（スール）の申し出を断り続けているの？」
「違う。違うの――」
「じゃあ、どうしてマリアさんは私のお姉さまの姉妹（スール）の申し出を断ったの？　他の上級生の申し出をどうして断ったの？」
「それは――」
マリアは言葉に詰まってしまう。
蘭さんはそんなマリアの言葉を待たずに続ける。
「ねぇ、マリアさん――瞳子さまに姉妹（スール）の申し出を受けたら、あなたはなんて返事をするの？　お受けするの？　それとも――断るの？」

マリアは、その問いに何て答えればいいのか分らなかった。
瞳子さまが、私なんかを妹にするはずない――いつものようにそう言葉を返そうかと一瞬迷って、その言い訳をマリアはなんとかのみ込んだ。
この期に及んでそんなことを口にしたのなら、マリアは二度と蘭さんに顔向できなかっただろう。
彼女は自分のことを心底軽蔑して、二度と口を聞いてくれることもないだろう、マリアはそう思った。
それに、その言葉が嘘であることも、マリアには分かっていた。
瞳子さまは、マリアを妹したいと思っている。
そんなことは分っていた。
それが、いったいどのような感情からくるものなのかは分らなかったけれど――同情や気遣いからなのか、それとも本心から自分を妹に望んでいるのか、それは分らなかったけれど、瞳子さまはマリアのことを気にかけて、そして妹として意識している。
そんなことは分っていた。
それでも、マリアは自分が誰かの妹になるなんて考えられなかった。
たとえ、自分が誰かの――ううん、違う。
松平瞳子さまの妹になりたいと本心では望んでいたとしても。

『ロザリオを渡したところで、血も繋がっていない二人が本当の姉妹になんかなれるわけがない』

マリア像の前でそんなことを思ってしまった自分に、誰かの妹になる資格なんてない。
「マリアさん、あなたはこれから先もずっと、誰にも心を開かないで、自分を偽って生きていくの？　瞳子さまが好きなんでしょう？　なのに、どうして姉妹（スール）の申し出を受けるって言わないの？　瞳子さまに、それに今まであなたが姉妹（スール）の申し出を断ってきたお姉さまたちに、あなたは申し訳ないと思わないの？」

その言葉が、マリアを徹底的に打ちのめした。
そうだ。
自分は誰にも心を開いていない。
頑なに本心を隠して、自分自身を偽ってきた。
これから先も、きっとそうしていくだろう。
そんな自分が、誰かの妹に――ましてや瞳子さまの妹になれるわけなんてない。
マリアは、心の中でそう結論づけてしまった。
「蘭さん、ごめんなさい」
そして、マリアは俯いて小さな声で謝罪をした。
それは蘭さんいだけでなく、全てのことに対して謝っているような、そんな謝罪だった。
「それは、なにに対して謝っているの？　まだ、マリアさんことを何も聞いていないのに」
「ごめんなさい。私、誰とも姉妹（スール）になれない。瞳子さまとも」
「だから、その理由を――」
そこまで言って、蘭さんは言葉をのみ込んだ。
そして、目を細めてマリアを睨みつける。
そこには怒りや失望の色に混じって、諦めの色が濃く浮かんでいた。もうこれ以上、何を話しても無駄だと結論を出してしまったかのような、そんな諦めの色が。
「わかった、もういい。マリアさんは、これから先もそうやって、都合の良い偽りの仮面をかぶりながら生きていけばいいのよ。誰にでも妹みたいな顔をして懐いて、そして瞳子さまのことも騙し続ければいい。でも、そんなことをしていたら――いつかきっと、本当のひとりぼっちになってしまうわよ」
そこまで言い放つと、蘭さんはもう話は思わったと歩きだす。蘭さんの上履きが、マリアの脇を通り過ぎる。そして校舎に入って行ってしまった。
ひとりぼっちになったマリアは、そのまま中庭にうずくまってしまった。

そして、目を瞑って思う。
蘭さんが怒るのも当たり前だと。
結局マリアは、なに一つ自分のことを話せなかったのだから。
瞳子さまについてしまった嘘を告白する時も、マリアは主語を曖昧にしたまま形だけの謝罪をしてしまった。そうやってマリアはこれから先も自分を偽って、嘘をつき続けて、何もかもを曖昧にしたまま生きていくのだろう。

『そんなことをしていたら――いつかきっと、本当のひとりぼっちになってしまうわよ』

蘭さんの言葉が胸に突き刺さる。
その言葉は全てが正論で、的を得ていた。
瞑った目を開くのが怖かった。
中庭に一人取り残された自分を見つけるのが怖かった。
マリアはうずくまったまま、すがるように両手を組み合わせた。
何を祈ればいいかもわからないまま――

ただマリア様に祈るように。

26　曇り空と胸騒ぎ

空模様が怪しくなるにつれて、瞳子の胸騒ぎも大きくなっていった。

マリアは、まだ薔薇の館に顔を出していない。瞳子が薔薇の館を訪れた時、二階の部屋には菜々ちゃん一人だけ。瞳子が「マリアとは一緒に来なかったの？」と尋ねると、菜々ちゃんは表情を少しだけ困らせて「はい。少し遅れると言っていました」と言った。

明らかに何かを迷っている表情。

瞳子は、直ぐにそのことに気がついた。

でも、瞳子はあえてそのことを追及したりはしなかった。

おそらく二人の間で何かしらかの会話かやり取りがあったのだろう。

でも、それを私に告げては欲しくない。

そんなところだろうとあたりをつけた。

ならば、余計な詮索は野暮というものだ。

しっかり者の菜々ちゃんが、私に告げる必要がないと判断したのだから。

しかし、マリアは一向に薔薇の館にやってこない。時間が経つにつれて菜々ちゃんの様子もおかしく、ちらちらと窓の外に視線を送り、時折ためらいがちに瞳子を見つめる。その表情があまりにも切羽詰っていたので、瞳子はこれ以上の静観は後手に回り過ぎなのではと、席を立ち上がろうかと思案した。

幸い、今は山百合会のメンバー各々がそれぞれ抱えた仕事を片付けている最中で、話し合いなどは行われていない。

瞳子の仕事もほぼ片付いているので、私用で席を立っても問題はなかった。

すると、先に席を立ったのは菜々ちゃんだった。

菜々ちゃんは困った顔のまま瞳子を見つめる。

瞳子も小さく頷いて席を立った。

「瞳子さま、ごめんなさい。実はマリアちゃんの件で」

「私のほうこそ、尋ねるのが遅くなってごめんなさい。もっと早くに気にかけておくべきだったわ」
「そんな。私の方が先に話すべきでした」
瞳子は真面目で素直な、そして友達思いな菜々ちゃんを見て微笑んだ。
本当に頼りになるつぼみだと、心から思った。
「それで、話しを聞かせてもらっていいかしら？」
「はい」
瞳子が尋ねると、菜々ちゃんはまだ悩んだような表情のまま口を開く。
「実は、マリアさんがクラスメイトに呼び出されて、その生徒と話をするために一人で裏庭に行ってしまったんです。私が付き添おうかと言ったんですが、断られてしまって。それに、山百合会のメンバーには内緒にしてほしいと言われて、それで――」
菜々ちゃんは後悔を口にするよう告白する。
自分の判断のミスを悔やんでいるみたいだった。
「いいのよ。菜々ちゃんはマリアとの約束を守って口を噤(つぐ)んでいたんでしょう。優先すべきはマリアの気持ちよ。だから、これは私が無理やり聞き出したこと。私に言わないでほしいって言われたんでしょう？」
「はい。その通りです」
菜々ちゃんは驚いたように目を広げて頷いた。
「マリアを呼び出したクラスメイトっていうのは、マリアに嫌がらせのようなことをしていた生徒なのね？」
「はい。でも、マリアちゃんと一番仲が良かった生徒だと思います。いつも一緒にいたので。でも、こんなに長い時間かかるなんて、少しおかしいというか、何かあったのかも」
「分ったわ。ありがとう」
瞳子はそう言うと、菜々ちゃんの肩をポンと叩いた。
後は任せておきなさいと言うように。
「お姉さま、私、少しばかり席を外してよろしいでしょうか？」

瞳子がそう言うと、席に座って仕事をこなしていた紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまが頷く。

「いってらっしゃい」

お姉さまに送り出された紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみは、深々と頭を下げた後、ビスケット扉をくぐるなり駆けだした。

大きな胸騒ぎを抱えながら。

菜々ちゃんに――後は任せて起きなさいというポーズをとって見せたものの、瞳子は大きな不安を抱えていた。いろいろなことが手遅れになってしまったような、マリアがどこか遠くに行ってしまうような、そんな気がした。

灰色の絵の具を分厚く塗りたくったような曇り空は、まるで嵐の訪れを告げているようだった。

27　かくれんぼと雨

「マリア」

中庭にうずくまったままでいると、不意にマリアを呼ぶ声が聞こえた。

マリアは、そこでようやく我に返った。

いったい、自分はどれくらいこの場所にうずくまっていたのだろう？

ずいぶん長い間この場所にいたような気がしたけれど、おそらく数分も立っていないだろう。たった百数えるほどの時間だったかもしれない。

マリアは、まるでかくれんぼで誰かに見つけてもらうのを待っていたかのように、ただその場にうずくまっていた。誰も自分なんかを見つけに来ないと思っていたはずなに、誰かに見つけてほしいと願っているような――そんな矛盾した気持ちのまま、彼女は自分の名前を呼ぶ声の方に顔を向ける。

伏せていた顔を上げて向けると、そこには今一番い会いたい人が――

そして、今一番合いたくない人の顔があった。

名前を呼ばれた時から、その声の主が誰かなんて分っていた。

まるでマリア様が使わしてくださったように、その人はマリアの顔を覗き込んで困ったような、安心したような顔で微笑んでくれる。

その微笑みがマリアの胸を強く締めつけて、そして強く傷つけた。

この人はどうしてこんなに優しくて穏やかな顔を私なんかに向けてくれるんだろう？

どうして、瞳子さまは私なんかを気遣って、こうしてわざわざ迎えに来てくれるんだろう？

瞳子さまは肩で息をしていて、額には少しだけ汗をかいている。

おそらくずいぶん急いで、走ってここまで来てくださったのだろう。

マリアは直ぐにそのことに気がついた。

憧れの瞳子さまに――紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみである上級生に、そんなことをさせてしまった自分を情けなく、そしてみじめに思った。

「マリア、大丈夫？　具合でも悪いの？」

瞳子さまは心配そうな顔で尋ねる。

「いえ、大丈夫です」

マリアは、小さな声でそう告げてゆっくりと立ち上がった。

二人は向かい合って顔を見合わせる。

「あなたがなかなか薔薇の館に来ないから、心配になって探しに来たの。何かあった？」

瞳子さまは優しく尋ねる。

おそらく、瞳子さまは全てを知った上で、マリアに逃げ道を残してくれているのだろう。菜々ちゃんから話を聞かなければ、マリアが中庭にいるとは思わないはずだ。同級生と何かいさかいがあったことを知りながら、瞳子さまはマリアが言いたくないのなら、そのことには触れないと案に伝えてくれているのだ。

なんてお優しい方なんだろう。

それに、なんて辛抱強い方なんだろう。

マリアは心からそう思った。

いつまでも本当のことを何も話さないマリアに、瞳子さまは嫌な顔も苛立った顔も見せずに、辛抱強く接してくださっている。

蘭さんに言われた言葉がマリアの胸の奥で響く。

『わかった、もういい。マリアさんは、これから先もそうやって、都合良い偽りの仮面をかぶりながら生きていけばいいのよ。妹みたいな顔して懐いて、瞳子さまのことも騙し続ければいい。でも、そんなことをしていたら、きっといつか本当のひとりぼっちになってしまうわよ』

その言葉はマリアの胸の奥ではじけて、彼女の心を大きく揺さぶる。

マリアは咄嗟にこう思った。

もうこれ以上、瞳子さまに嘘をつき続けたくない。

何かを偽ったり、騙すようなことをしたくないと。

「こんなところで立ち話もなんだから、薔薇の館に行きましょう。そろそろ雨も降り出しそうだし、話しはお茶でも飲みながらゆっくりすればいいわ」
瞳子さまが優しく誘う。
マリアは、もうその甘い誘いに乗ってはいけないんだと勝手に思い込んでしまった。
「瞳子さま、ごめんなさい」
「ごめんなさいって、なんのこと？」
マリアの突然の謝罪に、瞳子さまが眉をひそめる。
「私、もう薔薇の館には行けません。私なんかが、薔薇の館に行っちゃいけないんです」
マリアは今にも泣きそうな声で振り絞る。
「薔薇の館に行けないって、どういうこと？　呼び出されたクラスメイトに何を言われたの」
瞳子さまは反射的にそう言った後、「しまった」というような顔をした。知らないふりをしていた芝居が台無しになってしまったと、そんなことを言いたげな表情を浮かべている。そして少し苛立ったように首を振った後、マリアを見つめて口を開く。
「マリア、あなたが薔薇の館に行くことを誰かにとがめられたのなら。それは全く気にする必要のない言葉よ。そんな言葉に耳を貸すなんて、馬鹿げているわ」
強い眼差しと強い言葉で、瞳子さまがマリアに告げる。
「違うんです。私は、薔薇の館に行っていいような生徒じゃないんです。みんなの憧れの場所に、私は相応しくないんです。それに、私、これ以上――瞳子さまに嘘をつき続けたくないんです。だから、もう薔薇の館には行けません」
「詳しく話してくれなければ、わからないわ。私は、マリアに何を嘘をつかれているというの？　それに、自分なんかと卑下するのはやめなさい」
瞳子さまは、苛立ちを強めて言う。
そして、もどかしそうに瞳を細めた。

マリアは、そんな瞳子さまを見ているのがつらかった。
今すぐ、この場所から消えてしまいたかった。
「私なんか――私なんかで十分なんです」
マリアは頑なに言って首を横に振る。
「私なんて、本当ならに――瞳子さまに、紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみ気にかけてもらえるような生徒じゃないんです。だから、もう私のことは放っておいてください」
そこまで言うと、マリアは自分が涙を流していることに気がついた。
その涙と同時に、ぽつりと雨粒が一滴――マリアの頬に落ちた。
まるで、その涙を隠そうとしているみたいに。

28　姉妹とロザリオ

「私なんて、本当ならに――瞳子さまに、紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみ気にかけてもらえるような生徒じゃないんです。だから、もう私のことは放っておいてください」

瞳子は、目の前の光景に戸惑っていた。

つい昨日まで、瞳子とマリアは何の問題なく関係を築いていると思っていた。その新しく生まれた絆のようなものをしっかりと結んで、その結び目を少しずつ強くしていけるんじゃないかと感じてさえいた。

お姉さまである祐巳さまと三人で並んで帰り、マリア像の前で三人揃って手を合わせた時には――これが私たちの未来の形なんじゃないかとさえ想像した。

それなのに、今自分の目の前で泣きそうな顔で首を横に振るマリアは――瞳子のことを拒絶していた。

話しを聞き出そうにも、マリアは一向に自分の話をしてくれそうもない。

それどころか、薔薇の館に来ることすら拒否している。

瞳子は、どうしたらいいのか分からなくなってしまった。

この中庭にマリアを呼び出したクラスメイトに何かを言われた、または吹き込まれたということは分かっているのだけれど――この取り乱しようはそれだけではない気がして、それが瞳子の不安を一層大きくした。

おそらく、マリア個人の理由が関係しているのではないかと。

瞳子は思わず空を仰ぐ。

分厚い雲に覆われた灰色の空が、まるで自分の心模様のように広がっている。

マリアの言う嘘がなんなのか、瞳子にはまるで分からない。

最初に出会った時――お姉さまがいると嘘をつかれた。

これまで何度も姉妹（スール）の申し出を断ってきたマリアにとって、その嘘はある意味で自己防衛の一種だったのだろう。

それ自体、瞳子はまるで気にしていなかった。
しかし、今マリアが言っている嘘というのは何なのか、まるで分からない。
分からないことが、瞳子の不安をかきたてる。
このままではマリアがどこか遠くに行ってしまいそうな、そんな気がした。
今この場を逃したら、永遠にマリアを失ってしまうような気が。
瞳子は考える。
どうすれば――マリアを繋ぎ止めておくことができるだろう？
これまでの短い関わりの中で、瞳子はマリアの心に触れていると思っていた。
少なくとも、私たちはお互いに好意や好感を持って、お互いに惹かれあって接してきた。そのことに嘘や偽りはないはずだし、自分の勘違いでもないはず、瞳子はそう考えた。
二人の距離は順調に近づいていた。
それなのに、マリアは今どこか遠くに行ってしまいそうだった。
手を伸ばしても届かない場所に。
そう思ったら――瞳子は一歩足を踏み出してマリアに手を伸ばしていた。
「マリア」
そして、マリアの名前を優しく呼ぶ。
自分の言葉が、目の前で怯えたように震える彼女に届いて欲しいと願いながら。
「――私の、妹になりなさい」
瞳子は、自分なりの答えを出してそうはっきりと口にした。
これが瞳子の結論だった。
姉妹（スール）になる。
それが、自分とマリアにとって一番の答えだとそう思った。
「え、瞳子さま？」
マリアは瞳子の言葉を聞いて信じられないと目を見開く。
その大きな黒い瞳から、溜まっていた涙が一粒零れ落ちる。その

後、涙はとめどなく流れだした。もうこらえることができないと言うように。
瞳子の目にはその涙が嬉し涙なのか、そうじゃないのか分らなかった。信じられないという表情が、いったい何の感情を表しているのかもまるで分からない。人の顔色を窺ったり、演技を見破るのが得意なはずの瞳子も、この時ばかりは何一つ分らなかった。
それくらい、自分自身に余裕がなかったから。
「マリア、あなたの抱えているものを、私にも抱えさせてほしいの。二人で一緒に考えたり、悩んだり、それに喜んだりしたい。だから、私の妹になりなさい。私が――あなたを守ってあげるわ」
そこまで言い切ると、瞳子は首から下げたロザリオを外した。
それは、今年の二月に祐巳さまからかけてもらった大切なロザリオ。
祐巳さまのお姉さまである祥子さまと、マリア様がみている前で――二人が姉妹《スール》になった特別な証。
瞳子は、それを輪の形にしてマリアの首にかけようとした。
きっと、喜んでもらえると思った。
この形が一番良いんだって、そう思った。
けれど、今マリアが浮かべている表情の名前を瞳子は知っている。
悲しみ。
そして、失望だ。
マリアは大粒の涙を流しながら、どうしてと首を横に振る。
先程かすかに降り出した雨が、彼女の涙や心模様に合わせて激しくなった気がした。
瞳子の頬にも雨粒が伝う。
まるで涙を流しているみたいに。
「ごめんなさい、瞳子さま。私、瞳子さまと姉妹（スール）にはなれません。なれないんです」
マリアはそう言った後、自分自身の言葉に絶望したように俯いてしまった。
もう二度と顔を上げられないというように。

「マリア。どうして、私と姉妹（スール）にはなれないの？　理由があるなら、それを聞かせてちょうだい」
瞳子は隠しきれないショックを抱えたまま、そう尋ねた。
瞳子だって、覚悟を持ってこの姉妹（スール）の申し出をした。
理由も聞かずに引き下がれるほど、マリアに抱いている感情は小さくない。
むしろその大きさに驚いているくらいだった。
自分は、いつからこんなにもマリアのことを思っていたんだろう？
そんなことすら考えた。
「ごめんなさい」
「ごめんなさいじゃ分らないわ。はっきりと理由を言ってちょうだい」
「ごめんなさい」
マリアはまるで「ごめんなさい」以外の言葉を忘れてしまったように、ただそう呟く。
そのことが、瞳子を深く傷つけた。
自分たちの関係は――この程度のものだったのかと。これまでの関係が全て夢か幻のように思えて足下が崩れそうになった。
それでも、瞳子は諦めきれなかった。
今さら諦め、全てを忘れて手放ししまうなんてことは考えられなかった。
だって――自分はマリアを妹にと願ったのだから。
「ねぇ、マリア、返事は今じゃなくても構わないわ。あなたが落ち着いてからゆっくり考えてくれればいい。私の方も、いきなりで考えなしだったかもしれないわ。だから――」
「違うんですっ」
マリアは瞳子の声を遮るように声を上げる。
まるで悲鳴のような声を。
「どうして、姉妹（スール）になろうなんて――妹になりなさいなんて言うんですか？　私は、誰とも姉妹（スール）にはなれないんです。どうして、みんな分かってくれないんですか？　ロザリオを渡したって、本当の姉妹にな

んてなれないんです。それなのに、それなのに――」
マリアは泣きながら言葉を捲し立てる。
まるで、自分が何を言っているのかも分っていないような顔で。
そして、自分自身を傷つけるように。
小さな子供が癇癪を起しているように。
「それに、私を守るために私と姉妹（スール）になるなんて、そんなのダメです。そんなの、やめてください。私なんか、そんな価値もないんです。本当にごめんなさい、瞳子さま。私が、瞳子さまに甘えたせいで。だから、きっと気の迷いを起こさせてしまったんです。私、もう薔薇の館にも行きません。だから、全部忘れてください」
「マリア、待って――」
瞳子は、この場を去ろうとするマリアを止めようと手を伸ばす。本当は駆け出して震えるマリアの体を抱きしめてあげたかった。
だけど、その思いと裏腹に瞳子の足は全く動かなかった。
それほど、深く傷ついていたから。
背を向けたマリアが走り去っていく。
遠くに行ってしまう。
自分の手の届かないどこかへ。
その姿が見えなくなるまで、瞳子は呆然と立ち尽くしまま見送った。
そして、ひとりぼっちになってしまった中庭で、もう一度空を仰ぐ。
二人が離れ離れになるのを待っていたかのように、雨が強く振り出した。
まるで、何かの幕を下ろすように。
受け取ってもらえなかったロザリオを戻した時――ひんやりとした。
その冷たさで、瞳子は自分が徹底的に拒絶されたことを実感した。
つまり、自分はふられてしまったのだ。

29　青い傘と紅薔薇の姉妹

「瞳子？」
薔薇の館の前で、自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。
瞳子は、いつの間にか薔薇の館にたどり着いていたことを、その時知った。どうやってここまで来たのか、まるで覚えていない。心ここに在らずでただ足だけを動かしてきたのだろう。
帰巣本能が働いたのかしら？
瞳子は心の中で自嘲気味に言い、そして自分を待っていてくれたお姉さまを見つめた。
自分が帰るべき場所を見つけたように。
祐巳さまは青い傘をさしていて、驚いたように瞳を広げて瞳子のほうに駆け寄る。
「瞳子、びしょ濡れじゃない？　どうしたの？」
青い傘の中に入ると、まるで温かい毛布に包まれたように気持ちになった。
青い傘は祐巳さまのお気に入りの傘だ。子供の頃から大切にしている傘で、一度無くなった後、福島駅で見つかって返ってきた縁起の良い傘だと話してくれたことがある。
傘の柄には祐巳さまのおじい様が書いた――
リリアンじょがくえん
ふくざわゆみ
の、文字が今もしっかりとある。
「瞳子、大丈夫？」
祐巳さまが傘を持った手とは反対の手で、瞳子の肩を撫でながら尋ねる。びしょ濡れというほどではないけれど、制服は雨で染みになっていて、自慢の縦ロールは見事に崩れていた。
「はい。大丈夫です」
瞳子は、そう言うのがせいいっぱいだった。
それ以上、なんて言葉を紡げばいいのか分らなかった。
「大丈夫なわけないでしょう？　そんな悲しそうな顔をして」

「私、悲しそうな顔をしています？」
瞳子は――私は今、悲しそうな顔をしているのね、と思った。
それは、いったいどんな顔なのだろう？
早くいつもの顔をしなければ。
お姉さまを困らせてしまう。
だけど、瞳子にはどうすることもできなかった。
「お姉さま、いつからここで待っているんですか？　わざわざ傘まで持ち出して」
瞳子は話を変えようと俯いたまま尋ねる。
「マリアちゃんと何かあったの？」
だけど、祐巳さまは話を変えさせてくれずに真っ直ぐな声で尋ねた。
その声があまりにも真っ直ぐ過ぎて、そしてお姉さまの傘の中があまりにも暖か過ぎて――瞳子は思わず涙をこぼしてしまった。
「瞳子、泣いてるの？」
祐巳さまが声を震わせて尋ねる。
瞳子の肩に置かれた手が、瞳子を引き寄せる。
瞳子は涙を流したまま祐巳さまを見つめた。
「ロザリオ、受け取ってもらえませんでした」
「うん。そっか」
祐巳さまは、まるでそのことを知っていたかのように小さく頷く。
「分っていたんです。マリアが誰とも姉妹（スール）になるつもりがないって。それでも、私はマリアと姉妹（スール）になれると思ったんです。でも、ロザリオを受け取ってもらえなかった。きっと、何かを間違えしまったんですね」
一度言葉にしてしまったら、言葉は次から次に溢れてきた。まるで降り注ぐ雨のように。
はじめて会った時から、マリアのことが気になっていた。
二度目に会った時には、特別な何かを感じていた。
はじめてマリアを名前で呼んだ時、自分が姉になる準備ができていることを実感した。

そして、薔薇の館で居眠りをしているマリアを見た時――瞳子はマリアが自分の妹にと願った。
でも、それは瞳子の独りよがりでしかなかった。
マリアには伝わらなかった。
さっきまでそばにいたマリアは、夢か幻のように目の前から消えてしまった。
「マリアちゃんだけが、一年生じゃない――」
祐巳さまはそう言った後、小さく首を横に振って瞳子を強い眼差しで見つめ直す。
「――なんて、言わないよ。瞳子は諦めていないんでしょう？」
「はい。だけど――」
祐巳さまの熱に当てられて「はい」と返事はしたものの、瞳子は自分でも信じらてないくらい弱気になっていた。
もう一度ロザリオを渡すなんて、今は想像もできなかった。
でも、マリアじゃなきゃダメだった。
自分の隣にいる妹は、マリアじゃなきゃダメなのだ。
自分のお姉さまが、福沢祐巳さまじゃなきゃダメなように。
でも――
「瞳子、私は諦めなかったよ」
祐巳さまは、優しくそう言って瞳子の髪の毛を撫でる。
「クリスマスの夜、瞳子にロザリオを受け取ってもらえなかった時――ものすごく悲しかったけど、私は諦めなかった。瞳子も、諦めなければいいわ」
そうだ。
私は祐巳さまからの姉妹（スール）の申し出を断った。
それでも祐巳さまは諦めず、自分を見捨てずにいてくれた。
だから、今こうして瞳子と祐巳さまは姉妹（スール）でいる。
そう思ったら、瞳子は勇気が湧いてくると同時に、別の気持ちがわき上がってきた。
「私、お姉さまをこんな気持ちにさせていたんですね？」
瞳子は今、ようやく知ることができた。

あの時の、祐巳さまの気持ちを。
何度も何度も想像はしてきたし、後悔もしてきたけれど――それでも実感としてあの時の祐巳さまの気持ちを知ってた今と後では、それはまるで違う気持ちや感情だった。
「ようやく分った？　それはもう、悲しくて悲しくてしかたなかったんだから。小心者の私の心には瞳子に姉妹（スール）の申し出を断られたショックがぐっさぐっさ刺さって、祥子さまの胸の中で泣きはらしたよ」
祐巳さまは冗談めかせていう。
そして、傘を捨てて瞳子を強く抱きしめた。
「だから、瞳子も今は泣いていいんだよ」
瞳子は、お姉さまの胸に顔を埋めて声を上げて泣いた。
「うあああ――」
「うん。悲しいね」
悲しいのか、悔しいのか、嘆かわしいのか、腹立たしいのか、苦しいのか、わからない。わからないけれど、瞳子は自分の中にあるぐちゃぐちゃに混ざり合った感情を全て吐き出すように泣いた。
薔薇の館の二階には山百合会のみんながいる。でも、それを気にしていられる余裕はどこにもなかった。
瞳子は、いつの間にか祐巳さまも泣いていることに気がついた。
自分のためにお姉さまが泣いてくれている。
こんなに幸せなことがあるだろうか？
瞳子は心から祐巳さまに感謝した。
そして瞳子は、お姉さまの胸の中でマリアのことを思った。
今、どうしているだろうかって。
雨に濡れていないだろうかって。
そして、泣いてはいないだろうかって。
できれば、マリアには涙を流していて欲しくなかった。
だってマリアには――私のように抱きしめて一緒に涙を流してくれるお姉さまがいないのだから。

30　ごめんなさいと罰

マリア像の前まで逃げるように走ってきたマリアは、雨に打たれることも気にせずにマリア様に祈った。
どうか、瞳子さまが傷ついていたり、ショックを受けいたりしないで下さいと。
私なんかのために、涙を流したりしないで下さいと。
そして――ごめんなさい。ごめんなさい、と。
マリアは今でも信じられなかった。
あの紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみの松平瞳子さまが、自分なんかにロザリオを渡そうとしたことが。
姉妹（スール）の申し出をしてくださったことが。
そんなことがあるわけないと――自分に言い聞かせてきた。
それでも、瞳子さまが自分に向ける感情には気づいてきた。
だって、マリア自身も同じ感情を抱いているのだから。
それでも、ロザリオを受け取ることはできなかった。
瞳子さまと姉妹（スール）になることはできなかった。
マリアは雨に打たれなあらマリア様に拝み続ける。
あれは、瞳子さまの気の迷い。
そもそも、瞳子さまが自分を気にかけてくださったのも、同情から発したもの。
瞳子さまは――私のことを、守ってあげると言った。
でも、紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみが私なんかを守るためにロザリオを渡すなんて、あってはいけないことだ。
誰かを守るために姉妹（スール）になるなんてあってはいけない。
それでも、マリアは瞳子さまに身を委ねたくなった。
そうできたならどんなに素晴らしいだろうかって、この期に及んでも考えしまう自分がいた。
でも、マリアは瞳子さまを拒絶した。
徹底的に。
これで、薔薇の館に通うこともなくなった。

菜々さんとお昼を食べることもないだろう。
蘭さんだって、もう私を気にかけたりしないだろう。
先ほどの会話で徹底的に軽蔑されてしまったのだから。
マリアは、自分が完璧なひとりぼっちになってしまったことを理解した。
もう、誰もマリアのことを追って来てはくれない。
後ろを振り返りたい気持ちをこらえきれずに、目を開けて来た道を見つめる。
だけど、そこには誰もいない。
瞳子さまも、追って来てくれない。
当たり前だ。
マリアは、ようやく自分に罰が当たったんだと安堵した。
これで良かったんだと、微笑んだ。
大粒の涙を流しながら。
自分が今、どんな顔をしているのかまるで分からなかった。
これで良かったんだと思っているのに、大きな後悔していることには気が付いていた。
気がつかないふりはできなかった。
でも、どうすることもできない。
もう、どうしていいのか分らない。
ぐちゃぐちゃになったこの感情では、なにも考えられない。
マリアは、雨に濡れながらひとりぼっちで帰って行った。
家にたどり着くまでの時間が永遠に感じられた。

31　本心と強がり

「祐巳さん、瞳子ちゃん、どうしたの？」
扉を開けてまず叫んだのは、由乃さま。
その後に続いたのは、菜々ちゃんの驚いたような顔。
雨の中、傘も差さずに紅薔薇姉妹が抱き合って泣いているのだ、驚かないほうが無理ってものだ。
「あのお二人とも――」
菜々ちゃんがどうしていいのか分からないと言った顔で由乃さまを見つめると、由乃さまはため息交じりに微笑んで妹の頭を撫でる。
「二人とも、雨に濡れたままだと風邪ひくから、薔薇の館に入りましょうよ。ね？　落ち着いたらゆっくり話を聞かせてくれる？」
由乃さまは穏やかにそう言って二人を薔薇の館に誘う。
「菜々、暖かいお茶の用意をしてくれる？　とびっきり熱くしてあげて」
「はい。直ぐに用意します」
由乃さまにそう指示された菜々ちゃんは、こんな状況にもかかわらず少しだけ嬉しそうな表情で二階へと上がって行った。おそらく、お姉さまの頼もしい姿が見られて感動したのだろう。
由乃さまは、現薔薇さまの中で最も薔薇の館歴が長い。
リリアン女学園の高等部に進学した時から、山百合会に携わっている。
本当は、誰よりも頼りになるお姉さまなのだ。
ただ、すこだけ暴走しがちというだけで。
「ごちそうさまなんて言う雰囲気じゃないけれど、久しぶりに姉妹愛が見れて――なんだか、感動した。それに、いろいろ思い出しちゃうね？」
二階へあがる時、由乃さまが祐巳さまにそっと声をかけた。
二人は、真っ直ぐに見つめ合って頷く。
おそらく、思い出を振り返っているだろう。
瞳子は心の中で――去年のクリスマスのことだろうとか？　と

思った。
私が祐巳さまからの姉妹（スール）の申し出を断った後にも、こんな出来事があったのだろうかと。
瞳子に見えないところで、由乃さまが祐巳さまの手をぎゅっと握った。
「大丈夫だよ」と言うみたいに。
二階に上がると、菜々ちゃんと乃梨子がお茶の用意をしてくれていた。
志摩子さまは落ち着いた様子で席に座っていて、祐巳さまと瞳子を見ておおよその出来事を察したような表情を浮かべた。
「祐巳さん、瞳子ちゃん、まずは濡れた身体を拭きましょう？　タオルは用意してあるから、それを使って」
瞳子と祐巳さまは、言われるままにタオルで体を拭く。
瞳子は濡れた髪の毛を拭きながら、周りに気づかれないように涙で腫れた目元を強くこすった。今さら取り繕う必要もないし、取り繕えるはずもないけれど、それでも瞳子は仲間に心配をかけないようにせいいっぱい気丈に振る舞おうとした。
「どうぞ」
席に座ると、菜々ちゃんが温かいお茶の入ったカップを二人の前に置いた。
乃梨子は少し離れたところで心配そうに瞳子を見つめている。まるで自分が雨に濡れたみたいに、傷ついた顔をしていた。
祐巳さまが瞳子を見つめて口を開く。
「心配かけてごめんなさい」
瞳子は、俯きそうになる気持ちを必死に抑え込んで顔を上げた。今口を開けば再び涙があふれてきそうだったけれど、それでもお姉さまに任せたままでは格好がつかない。
それに、これは自分の問題。
瞳子はそれと向き合い、そして説明しなければならない。
「お姉さま、私が自分で」
「でも、大丈夫？」

「はい。以前、言いましたよね？　喧嘩して親に仲直りさせられるこどもじゃあるまいし――って。大丈夫です。お姉さま」
そう言った瞳子の瞳は、すでに滲んでいた。
祐巳さまは優しく微笑んで口を閉じた。
後は、ただ見守ると暗に示して。
瞳子も微笑んで、山百合会のメンバーに顔を向けた。
「お騒がせして申し訳ありません。たいした話じゃないんです」
瞳子は前置きをした後、はっきりと口にする。
一語一句、全ての言葉が震えないようにしっかりとお腹と喉に力を込めて。そして、精悍な表情を崩さないように毅然として。
「私がマリアにロザリオを渡して――」
そこで、全員の表情がハッとする。
「断られたというだけの話なんです」
瞳子がはっきりと事実を口にすると、部屋の中には重い静寂が立ちこめた。
おそらく、この部屋にいる全員がその可能性を頭に描いていたはずだけれど、当人からそれを告げられると、なんと反応していいのか分からない。まさか、そんなことがあるわけないと思っていた人物もいたようで――菜々ちゃんは小さく「そんな、嘘？」と呟いてしまう。
「菜々、言葉に気をつけなさい」
由乃さまが静かに釘を刺す。
「申し訳ありません。あの、その、瞳子さまが嘘をついていると言ったわけでは」
「わかってるわ」
慌てて弁明する菜々ちゃんに、瞳子が微笑んで言う。
「私のほうこそ、突然驚かせてごめんなさい。でも、これは事実なのよ。私は、マリアにふられてしまった」
そう言った後、瞳子は続きの言葉が思いつかずに目をつぶって歯を食いしばった。涙がこぼれそうになって、これ以上どうしたらいいのか分らなかったから。
「みんなに心配をかけちゃって、ごめんね」

言葉を引き継いでくれたのはお姉さまの祐巳さまだった。
祐巳さまは、テーブルの下で瞳子の手をぎゅっと握る。
お姉さま、それは逆効果です。
瞳子は心の中で恨めしそうに呟く。
そんなことをされたら、余計に泣いてしまいます。
瞳子はそんなことを思いながら、祐巳さまの手を強く握り返した。
赤ちゃんが母親の手に縋りつくように。
「これは瞳子とマリアちゃんの問題だから、私たちにできることはあまりないと思う。だから、今は瞳子とマリアちゃんを見守ってほしいんだ。菜々ちゃんはつらい立場になっちゃうかもしれないけれど、これまで通りマリアちゃんと仲良くしてあげてほしい。でも、姉妹(スール)の話をしたり、無理に薔薇の館に連れてこようとするのは無しね？」
「はい。マリアさんは私の大切な友達です。これからも」
祐巳さまにお願いをされた菜々ちゃんは、はっきりとそう言って頷いた。
「姉妹(スール)っていうのは、なかなかうまく行かないものなのよね？　だってここにいる全員、すんなりと姉妹(スール)になった人なんていないでしょう。だからさ、余計にやきもきしちゃうんだよね」
由乃さまがそう言って頷く。
「そうね。私と乃梨子もすんなりと姉妹(スール)になったわけではないものね？　それこそ瞳子ちゃんの尽力がなければ、この形に収まってはいなかったかもしれないわ」
志摩子さまが乃梨子を見て言う。
「あれは完全にやり過ぎです」
乃梨子がきっぱりと言って瞳子を見る。
その表情は「大丈夫？」と尋ねているみたいに心配の色が濃く浮かんでいた。
「瞳子、諦めてないんだよね？」
そして、乃梨子は一番大切なことを尋ねる。
それが一番聞きたいことなんだと言うように。
「ええ。私はまだ諦めていないわよ。絶対に――マリアにロザリオを

渡して見せるわ」
瞳子は、親友の言葉に頷いて啖呵を切る。
半分は本心だったけれど、半分は強がりだ。強がって啖呵を切って見せなければ、不安と悲しみで押しつぶされてしまいそうだったから。
マリアのことを諦めてはいない。
それは事実だ。
でも、これからどうすればいいのかはまるで分からない。
瞳子は、暗闇の中に放り出されたみたいだった。

32　光栄と譲れないもの

翌朝。

瞳子は、いつもよりも早く登校した。

さすがに集合の一時間前とはいかないけれど、それでも三十分前には薔薇の館に着いておくことにした。

マリア像の前でいつもよりも長く手を合わせ、瞳子はいろいろなことを考える。

まさか、昨日の今日でマリアが薔薇の館に来ることはないと分っていたけれど、万が一を考えた。

もしもマリアが薔薇の館に顔を出すのなら、瞳子はマリアと真っ先に話がしたいと。誤解のようなものを解いておきたかったし――今後、無理やりロザリオを渡すつもりも、無理やり妹にするつもりもないと説明しておきたかった。

なにより、瞳子はマリアに謝罪をしたかった。

マリアは最初から誰の妹にもなる気はないと告げていた。

言葉にしなくても、あの子なりのやり方で合図（サイン）のようなものを送っていた。はじめて会った時には――お姉さまがいると、嘘までつかせてしまった。それなのに、自分は考えなしにロザリオを渡そうとしてしまったのだ。

マリアの気持ちを無視して、姉妹（スール）の申し出をしてしまった。

去年のクリスマス。

この場所で祐巳さまから姉妹（スール）の申し出をされた。

祐巳さまは、祥子さまから頂いた大切なロザリオを瞳子の首にかけようとしてくださった。

それなのに、自分はその申し出は断るだけでなく――

「聖夜の施しをなさりたいなら、余所でなさってください」

そう言い放ったのだ。

瞳子は過去を思い出して胸が痛んだ。

よくもあんな言葉が言えたものだ。
自分の態度に比べれば、マリアの拒絶はまだ可愛げのあるほうね。
瞳子は心の中で自嘲気味に言って目を開く。
重ねていた手を離して、後ろを振り返る。
そこには、やはり誰もいない。
薔薇の館に着いてしばらく物思いにふけっていると、ビスケット扉が開いた。
まだ集合の二十分前なのに？
すると、菜々ちゃんが入ってきて瞳子を見る。
お互い驚いたような表情を浮かべたけれど、二人とも考えていたことは同じみたい。菜々ちゃんもマリアのことが心配で、もしかしたらと思って早めに薔薇の館にやってきたのだろう。
昨日、祐巳さまに尋ねられて言葉にした――「はい。マリアさんは私の大切な友達です。これからも」と言う宣言に嘘偽りはない。
その言葉を態度で示しているようだった。
「瞳子さま、お早いですね」
「菜々ちゃんこそ」
「はい」
二人の間に微妙な空気が流れる。
「ごめんなさい。早く来たのにぼーっとしていて」
瞳子は、何も手を付けてない状況を謝罪する。
「いえ、私がやりますから、瞳子さまは座っていてください」
「そうはいかないわ。私たち、同じつぼみなんだから」
「あの――」
菜々ちゃんが瞳子の前に立って言いづらそうに口を開く。
すると、いきなり深々と頭を下げた。
「瞳子さま、ごめんなさい」
「ごめんなさいって。菜々ちゃん、急にどうしたの？」
瞳子は驚いて目を丸くした。
何か話があるとは思っていたけれど、さすがにこの行動は予測不能だった。

由乃さま同様、菜々ちゃんにも猪突猛進の気があるのだなと、瞳子は少しだけおかしくなった。
「マリアさんのことです。私がついて行っていれば、もしかしたら、昨日のようなことにならなかったのかもしれないと思って。それで」
頭を上げた菜々ちゃんは泣きそうな顔。
「自惚れだって分ってます。でも、どうにかできたんじゃないかって思って、そうすれば、あんな、その――」
「私がマリアに、姉妹（スール）の申し出が断られるようなこともなかったと？」
菜々ちゃんが口にできないでいることを、瞳子は自分の口からはっきりと告げた。それを言葉にすることは瞳子にとってもつらかったけれど、それでも菜々ちゃんを苦しめるよりかは幾分かマシだった。
「はい」
「そうね。そうかもしれない。でも、きっといつか私はマリアに姉妹（スール）の申し出をして、そして断られていたと思うの。だから、菜々ちゃんのせいじゃないわ。遅かれ早かれ、こうなっていたのよ」
「でも、マリアさんは瞳子さまのことが好きなのに――それなのに」
必死になる菜々ちゃんを見て、瞳子は胸を締めつけられた。
そして、少しずつ勇気が湧いてくるのを感じた。
「ありがとう。そう言ってもらえて光栄だわ。でも、きっと私とマリアは今のままじゃ姉妹（スール）にはなれないんだと思うわ。私は、順序を間違えてしまったんだと思う」
「順序ですか？」
「ええ。マリアにも譲れないものがあって、その譲れない何かのために、頑なに姉妹（スール）の申し出を断り続けているんだと思うの」
「譲れないもの？」
「だから、まずはそれとしっかり向き合うべきだったのよ。それを飛ばして、独りよがりに姉妹（スール）の申し出をするべきではなかったんだと思うわ」
瞳子はそう言いながら、自分にも譲れないものがあったことを思い出した。
それこそが、祐巳さまの姉妹（スール）の申し出も受けなかった理由であり――

―瞳子が祐巳さの妹になれなかった理由だった。
もしかしたらマリアは、かつての自分の姿なのかもしれないと、瞳子はそんなことを思った。
私よりは、だいぶ可愛げがあるけれど。
「だから、そんなに自分を責めないで。菜々ちゃんは今のままで十分マリアの力になっているわ。それに、私の力にもなってる。ありがとう」
「差し出がましいことを言ってしまって、すいませんでした」
菜々ちゃんは、少しだけ安心したようにほっと息を吐いて言った。
「いいのよ。これからも思ったことはなんでも言ってちょうだい。由乃さまの妹なんだからそれくらい猪突猛進じゃないと」
瞳子がにっこりと笑って言うと、菜々ちゃんは怒ったように頬を膨らませた。

「お姉さまと一緒にしないでください」

33　噂話とつぼみたち

マリアが学校を休んでいると知ったのは、その日のお昼休みの時間だった。

「マリアが休み？」

薔薇の館で菜々ちゃんによって知らされた欠席の報告に、瞳子は表情を曇らせた。

「はい。担任の先生に欠席の理由を尋ねたら――熱を出しているとのことでした。朝、お母さんから欠席の電話があったと」

菜々ちゃんの表情も曇っている。

おそらく、欠席の理由が本当かどうか疑っているのだろう。

瞳子も胸の内では――本当に病気が原因だろうかと考えてしまった。

マリアが嘘をついているとは思いたくはなかったけれど、どうしてもそんなことを考えてしまう。

「昨日は雨が降っていたし、もしもマリアが雨に濡れて帰ったのなら、熱を出していてもおかしくないわね」

「はい。でも――」

菜々ちゃんは、その先を飲み込む。

分る。

昨日の一件が関係しているのではと、思いたくなっても仕方ない。

瞳子自身、自分がロザリオを渡そうとしたから――姉妹（スール）の申し出をしたことが理由ではないかと思い、不安に駆られた。

もしも、このままマリアが学校を休み続けるなんてことになったらと思うと――瞳子は気が気ではなかった。

「まずは、明日まで様子をみましょう。私たちが気を揉んでも仕方ないわ」

それでも、瞳子は気丈に振る舞ってみせた。

これ以上、菜々ちゃんに心配をかけるわけにもいかない。

その一心で力強い微笑を浮かべる。

「実は、もう一つお知らせしたいことがあって――」
どうやら、菜々ちゃんの心配事は一つではなかったみたいだ。
「お知らせしたいこと？」
「はい。実は、一年生の間である噂が広がっているです」
「噂？」
菜々ちゃんは、さらに言いづらそうに表情を曇らせる。
「菜々ちゃん、私のことなら大丈夫よ。今朝言った通り、なんでも話してちょうだい」
「菜々ちゃん、私のことなら大丈夫よ。今朝言った通り、なんでも話してちょうだい」
「はい。実は昨日、中庭で瞳子さまとマリアさんが一緒にいるところを目撃していた生徒がいたらしくて、それで――瞳子さまの姉妹（スール）の申し出を、マリアさんが断ったんじゃないかって、そのせいでマリアさんが欠席しているんじゃないって話で、持ちきりなんです。私も数名のクラスメイトに尋ねられて、否定はしておいたんですが」
「噂というよりも、事実ね」
瞳子はきっぱりと言う。
「ですが――その生徒も一部始終を見ただけで、勝手に話を脚色しているだけなんです。ロザリオを渡そうとしているところを見たわけでもないに、面白半分で噂をしているだけで」
菜々ちゃんは怒りを滲ませながら声色を強めて言う。
「ごめんなさいね。菜々ちゃんにまでつまらない嘘をつかせて」
「そんなことないですっ。私は、ただ――」
菜々ちゃんはそう言うと悔しそうな顔で押し黙ってしまった。爪が食い込むくらいに強く拳を握っていて、今にも噂話をしている生徒たちのところに飛んで行ってしまいそう。
瞳子は、どうすればと頭を悩ませた。
「はいはい。少しクールダウンしましょうか」
話しに入ってきたのは、乃梨子だった。
「ごめんね。実は聞き耳を立てて、いてもたってもいられずに話に割って入っちゃった」

少し離れたところでお姉さまである志摩子さまと何やら作業をしていた乃梨子が、困ったように笑って言う。
祐巳さまと由乃さまは新聞部の真美さまと話があるということで、薔薇の館には来ていない。志摩子さまは席に座ったまま、つぼみの三人を見つめて「気にせず話を続けて」と言った雰囲気の微笑を浮かべていた。
「菜々ちゃん、まずは一旦落ち着こう。噂話に関しては、私たちにはどうしようもできないし、ここで下手な説明をすると余計に話がこじれちゃうと思う」
「はい。分ってはいるんですけど」
乃梨子の説得に菜々ちゃんが応じる。
でも、その顔は納得しきっていないと言った感じ。
せっかくつぼみ（ブウトン）が三人集まっているのにこんな話とは、瞳子は自分の不甲斐なさを申し訳なく思った。
「私も経験あるからさ、菜々ちゃんの気持ちすごく分るよ」
「経験、ですか？」
「瞳子も一時期、祐巳さまの妹候補ってずっと噂されてて、あることないことといろいろ言われてた。私も心の中で何度も――何も知らないくせいに、二人の気持ちをなんか知りもしなくせにって思ってた」
「乃梨子？」
突然の言葉に、瞳子は驚いて乃梨子を見つめる。
あの当時、たしかに乃梨子は色々と瞳子を気遣ってくれていた。
マリアにロザリオを渡そうとしたあの中庭は、乃梨子が瞳子を迎えに来てくれた思い出の場所でもあり、瞳子の勘違いで祥子さまを呼び出してしまった因縁の場所でもある。
「そういう意味では、瞳子は噂されるのには慣れてるから、言いたい人には好きに言わせておけばいいよ。瞳子は鉄の仮面をかぶるのが得意だからさ」
「乃梨子、私今、少しだけ感動したんだけれど？」
「あれ、会心のフォローだと思ったんだけど？」
二人は微笑を浮かべて見つめ合った。

「でも、マリアちゃんは少し居心地が悪いと思うから、登校して来たら菜々ちゃんがしっかりそばで支えてあげて？　瞳子は、私が支えるっ」
「あなたなんかに支えてもらわなくてもけっこうよ」
「もうー、瞳子はつれないんだからー」
乃梨子のふざけたような言葉につられて、菜々ちゃんは笑顔を取り戻して表情を明るくする。
瞳子は心の中で、乃梨子に「ありがとう」と呟いた。

３４　真美さんと日出実ちゃん

昼休み。

薔薇の館に向わなかった祐巳と由乃さんは、新聞部の部室にいた。

たくさんの資料や写真、書きかけの原稿が山積みになった部屋の中には、新聞部の真美さんだけでなく、真美さんの妹ので新聞部部長の高知日出実（たかちひでみ）ちゃん、写真部エースの蔦子（つたこ）さん、蔦子さんの妹ではなく弟子の笙子ちゃんまでいて、ちょっとした秘密の会議めいている。

表向きは二学期の行事のスケジュールの確認とお手伝いのお願いのために集まったのだけれど、目的はそれだけじゃないんだろうなと、祐巳は薄々気が付いていた。

ホワイトボードに必要事項を記入して、各自がそれを確認し終えたところで、この会議は終了した。

すると、やはり真美さんが口火を切る。

「祐巳さん、瞳子ちゃんの件だけど――少しだけ話を聞いてもいいかしら？」

「それって、この会議に必要なこと？　リリアン瓦版に載せようってんならそうはいかないわよ」

祐巳が反応する前に、由乃さんが食って掛かる。

昨日の今日ということで少しナイーブになっているのが見て取れた。

由乃さんは、瞳子があんなに落ち込んで目の周りを真っ赤にしたのを見たのははじめて。少なからずショックを受けただろうし、どうにかしてあげたいって思ったんだと思う。

なにより、由乃さんは菜々ちゃんのお姉さまなのだ。

菜々ちゃんの友達であるマリアちゃんの問題ということもあって、黙ってはいられなかったのだろう。

「由乃さま、誤解です。実は、この件でお話を聞きたいと言ったのは、私なんです」

由乃さんの言葉に反応したのは、以外にも真美さんではなく妹の日出実ちゃんだった。彼女は言いづらそうに表情を困らせる。

「由乃さん、私は大丈夫だから」
祐巳は由乃さんに断りを入れた後、日出実ちゃんに向き直る。
「日出実ちゃん、話を聞かせてくれる？」
「はい。実は――」
日出実ちゃんはほっと一息をついた後、話しをはじめた。
「私の妹の話なんですけれど」
「日出実ちゃん、妹いたの？」
「えっ？　あっ、はい」
祐巳の意外な反応に、日出実ちゃんは驚いて答える。
「おめでとう」
祐巳がおめでとうと言うと、日出実ちゃんは頬を赤く染めて「ありがとうございます」と返した。その後で、由乃さんも「おめでとう」と祝福をする。
日出実ちゃんに妹がいたことを知っていたであろう残りのメンバーは、黙ったままその光景を見送った。
「はい。それで、私の妹が――瞳子さまの妹候補と噂されている御園マリアさんと、同じクラスなんです。実は、そのクラスの雰囲気が少し良くないと、以前から相談を受けていました。はじめは、マリアさんが姉妹（スール）の申し出を断り続けていることで、やっかみのようなものを受けているという相談だったのですが、薔薇の館に招かれるようになってから噂の質も変わってきたようで。それで、お姉さまに相談したら、マリアさんに独断で話を聞きに行ったりしてしまって――そのことでご迷惑をかけたのではないかと思って、まずはそれを謝罪したくて。ごめんなさい」
日出実さんは、深々と頭を下げて謝罪する。
驚いた祐巳は、目を丸くして口を開いた。
「日出実ちゃん頭を上げて。日出実ちゃんは何も悪くないし、真美さんがマリアちゃんに話を聞きに行ったことも、とくに問題にはなっていないから」
「私も先走ったんじゃないかって、申し訳なく思っていたの。祐巳さん、ごめんなさいね」

続いて真美さんも謝罪する。
「二人とも、本当に気にしないで」
「お姉さまは、本当に反省してください。直ぐに取材したがるのは悪い癖です。もう三年生なんですから、そろそろ引退と進路のことも考えて頂かないと」
「分ってるわよ。もう、口うるさい妹ね」
「『リリアン瓦版』の編集長の座だって部員の誰かに譲って」
「私の生きがいを奪おうっていうの？　なんてひどい」
「そんな、大袈裟な」
軽い言い争いをはじめた二人を見て、祐巳は何だか由乃さんと菜々ちゃんに似てるなと思った。
姉妹（スール）には色々な形がある。
それを改めて感じて、少しだけ胸が温かくなる。
「はい。この話は、もうおしまい。それで、そろそろ本題に入りましょう」
手を叩いてそう提案したのは蔦子さん。
新聞部のエースは眼鏡の奥の瞳をきらりと光らせて、この場に集まったメンバーを見回す。
「瞳子ちゃんとマリアさんの噂話が少しばかり大きくなりすぎてるから、みんな心配してこの場に集まっているんでしょう？　二年生のところにも話は広がっている。でしょう？」
「はい」
視線を向けられて頷いたのは、笙子ちゃん。
「笙子ちゃんがこの話し合いに参加したいって言いだしたのも、瞳子ちゃんのことが気になっているからなのよね？」
「そうです。私も、瞳子さんのことが少し心配で」
蔦子さんが尋ねて、この場にいる全員が――現在、リリアン女学園に広まっている噂を懸念して集まっていることを確認した。
祐巳は、笙子ちゃんが瞳子のことをそこまで気にかけていることを意外に思った。
真美さんの日出実ちゃんは、自分たちが噂を広める一因になってし

まったかもしれないという懸念と申し訳なさがあってのことだけど、笙子ちゃんは？
　しかし、今はそれを気にしている場合じゃない。
「祐巳さん、私たちは別に祐巳さんからこの噂の真相を聞き出そうってわけじゃないの。ただ、この噂を払拭するのに、私たちが何か力になれないかってそう思っているだけ」
　蔦子さんが話をまとめると――真美さん、日出実ちゃん、笙子ちゃんが黙って頷く。
「今では話がエスカレートしてしまって、いつの間にか瞳子さまがマリアさんに姉妹（スール）の申し出を断られたなんて話になってしまって、それで、私――」
　日出実ちゃんが困った顔で言う。
　おそらく、真美さんが取材に行ったしまったことがその噂に拍車をかけたと思い込んでいると、祐巳は察した。
　瞳子が、マリアちゃんに姉妹（スール）の申し出を断られたこと自体は本当のことなのだけれど、それを今どのように扱うべきか、祐巳は思い悩んだ。当事者である二人に断りもなく、その事実をここで話すわけにもいかず、今は事実は伏せてただの噂ということにしておくしかない。
　祐巳は噂がそこまで広まっていることに驚くとともに、マリアちゃんのことを心配した。
「マリアちゃんは、どうしているか分る？」
　日出実ちゃんに尋ねる。
「マリアさんは、今日は病欠していると聞きました」
「病欠？」
「はい。私も妹から少し話を聞いただけなので、詳しくは分からないのですが」
　祐巳は、その話を聞いて顔色を変える。
「祐巳さん？」
　由乃さんも顔色を変えて尋ねる。
「早合点はできないけど、でも――」
「うん。わかってる」

祐巳は、由乃さんの言葉にただ頷くことしかできなかった。
「みんな、ありがとう。姉妹（スール）の問題は瞳子とマリアちゃんの問題だから、今は私たちは静観することしかできない。でも、これから先、力を借りることもあると思う。その時は――よろしくお願いします」
祐巳が深々と頭を下げると、残りのメンバー全員は力強く頷いた。

35　かつてのライバルと祐巳さまのように

放課後。

今日一日を上の空、心ここに在らずで過ごした瞳子は、ホームルームが終わったばかりの教室で一人席に座ったままでいた。

いつもなら直ぐに薔薇の館に向うのだけれど、今日はなかなか立ち上がる気力が沸いてこない。このまま薔薇の館に向っても、正直まともに仕事ができそうもない。

瞳子は、どうしたものかと頭を悩ませた。マリアが病欠をしているということが、瞳子の頭から離れなかった。

瞳子は、今すぐにでもマリアに会いに行きたくて仕方なかった。

それと同じくらい、マリアに会いに行くのが怖かった。

私が会いに行って迷惑じゃないかしら？

もう一度拒絶されてしまったら？

そんなことばかり考えてしまう。

自分が臆病になっていることに気づいてはいたけれど、それを克服する特効薬のようなものは存在しない。

「はぁ」

今日何度目かの溜息をついたところで、瞳子は不意に名前を呼ばれる。

「瞳子さん？」

声のほうに視線を向けると、クラスメイトの敦子（あつこ）さんが自分を呼んでいる。「どうしたのかしら？」と首を傾げる間もなく、「瞳子さん、お客様よ」と敦子さんが取り次いだ。

教室の入り口に立っていたのは、とても大きな生徒。

瞳子はその生徒と視線を合わせて、もう一度溜息をつく。そして、急いで帰り支度を済ませてお客様のもとに向かう。

正直なところ、今彼女と話すのはあまり気乗りしない。

「やれやれ」という表情を隠さずに見上げるほど大きな生徒の前に立つと――細川可南子（ほそかわかなこ）さんはにっこりと微笑んで瞳子を見つめる。その嫌味なくらいの微笑みが、瞳子のうんざりした気分をさらにうんざ

りさせた。
「はぁ。可南子さん、いったいなんの用？」
「ごきげんよう。紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみ。少しお時間いいかしら？」
「ええ、かまわないわよ。紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみは、リリアン女学園に通う全ての生徒に奉仕する存在なのだから。でも、つまらない用事なら遠慮して下さると助かるけど？」
瞳子は嫌味っぽく言ってツンと顔を背けた。
可南子さん相手なら、これくらい言っても構わない。なんと言ったって、自分と可南子さんは犬猿の仲のようなものなのだ。
かつて、瞳子と同じく祐巳さまの妹候補として噂された細川可南子さん――そのことで、瞳子と可南子さんは一時期ぎくしゃくも、反目もしたけれど、最終的には和解のようなところに落ち着いている。
まぁ、一緒に遊園地に行くくらいの仲にはなっているわね？
瞳子は心の中でそんなことを呟く。
「意外に元気そうで安心したわ」
瞳子のそんな胸の内を感じ取ったように、可南子さんはもう一度嫌味なほどの微笑を浮かべて、瞳子の嫌味を聞き流した。
「ずいぶん噂になっているから少し顔を見に来たんだけれど、余計なお世話だったみたいね？」
瞳子は一瞬、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をした後、かつてのライバルをじろりと見る。
「可南子さんが、私の心配？　ずいぶん殊勝な心を持つようになったのね」
「あら、心配なんて言ってないわよ。瞳子さんの落ち込んだ顔を眺めに来ただけよ」
瞳子の言葉に返す刀で可南子さんが応じる。
「言ってくれるじゃない？」
「お相子さまでしょう？」
「ふふふ」
「ふふふ」
二人は見つめ合ったまま不敵な笑みを浮かべる。

「それで、このままほうっておくつもり？」
「ほうっておくって何が？」
「噂話。ずいぶん広まっているわよ」
二人は廊下を歩きながら会話をする。
「噂話って、私が下級生に姉妹（スール）の申し出を断られたって話のことかしら？」
「ええ」
「それなら、事実だもの。言わせておくしかないわ」
「え？」
可南子さんは足を止めて瞳子を見る。
その顔には、驚きと――まるで自分が傷ついたかのような苦悶の色が浮かび上がっていた。
乃梨子も同じような表情を浮かべていたことを、瞳子は思い出す。たくさんの人たちに心配をかけているんだな、と。
「そんな顔をしてくれるのね？　本当のことを話した甲斐があったわ」
瞳子は先ほどのお返しとばかりに、してやったりの表情を浮かべてみせる。
別に、可南子さんを驚かせるために姉妹（スール）の申し出を断られた事実を話したわけじゃない。
可南子さんになら話しても構わなかった。
けれど、素直に白状するのも尺なので仕返しという体をとってみせただけ。
「あの噂、本当だったの？　私、てっきり――ごめんなさい」
「別にかまわないわよ。それはもう手ひどく断られたんだから。弁解の余地もないわ」
瞳子が自虐的に言ってみせると、可南子さんは困ったように微笑んだ。
「それで、これから先どうするの？」
「どうするって？」
「瞳子さんのことだから、諦めてはいないんでしょう？」

「お姉さまと同じことを言うのね？」
「祐巳さまと？」
「ええ」
瞳子も小さく微笑んだ。
「祐巳さまは、瞳子さんを諦めなかった。それに祐巳さまは――こんな私にも、最後まで向き合ってくださった。諦めず、見捨てたりせずに。何のメリットもない賭けまでして」
可南子さんは、懐かしそうに言う。
瞳子と可南子さんが一年生の時――薔薇の館に通い、祐巳さまの妹候補なんて呼ばれ方をされていた頃、可南子さんは祐巳さまとある賭けをした。
体育祭でどちらのチームが勝つか、勝ったほうが相手の言うことを何度も聞く――という賭けを。
可南子さんの言う通り、その賭けをすることに祐巳さまのメリットは一つもなかった。
「どうしてそんな賭けをするんです？」そう尋ねた瞳子に祐巳さまはこう仰った。
「私は可南子ちゃんと関わりたかっただけなの」
祐巳さまはそう言って、最後まで可南子さんに向き合い続けた。
瞳子はその時のことを思い出して「やれやれ」という気分になる。
だって、そんな祐巳さまに自分が口にした言葉と言えば――
「おめでたい」
可南子さんへの苛立ちや嫉妬のような感情があったとはいえ、憎まれ口もここまで来るとたいしたものだ。穴があったら入りたいとは、まさにこのことだろう。
私たち二人は、その「おめでたさ」のおかげで今もこうして繋がっている。
「瞳子さんは、祐巳さまが私たちにしてくださったようにしてあげればいいんじゃないかしら？」
「祐巳さまが、私たちにしてくださったように？」
「ええ。最後まで向き合い続ける。真正面から向かっていく。私が憧

れた祐巳さまのように――瞳子さんもそうすればいいのよ」
「私に出来るかしら？」
瞳子は自信の無さから、そんなことを尋ねてしまう。
普段なら絶対にそんな弱気な発言はしないけれど、この時ばかりは可南子さんの言葉に身を預けたくなってしまった。かつて、同じ人に憧れ続けた同志として。
厳しい言葉をかけて欲しかったのかもしれない。
叱責して、自分の背を叩いてくれるような、そんな言葉が聞きたかったのかもしれない。
「できると思うわ」
「え？」
「だって、瞳子さんは祐巳さまが妹にと望んだ人なのよ。それに瞳子さんだって、誰よりも祐巳さまを追い続けて――祐巳さまを見つめてきたじゃない。今は祐巳さまの隣で祐巳さまを支えてる。祐巳さまから受け継いだ紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみは、名前だけなのかしら？」
だけど、帰ってきたのはとても優しい言葉。
そして、力強い言葉。
思わず涙を流してしまいたくなるような。
「違う？」
可南子さんは瞳子を励ますように、そしてどこか挑発するようにそう言った。
瞳子にとって、その挑発に乗るのは心地良かった。
「そうね。少しばかり情けないとこを見せてしまったわね」
「かまわないわよ。瞳子さんの落ち込んだ顔が見られて目的も果たせたし。それに、これは散々祐巳さまを困らせ続けた罰があったのよ。しっかり苦しんで――素敵な妹をつくってね？」
「言ってくれるじゃない」
瞳子は、心の中で可南子さんに感謝をしながらそう言う。
「ふふふ」
「ふふふ」

36　絆と仲間たち

「ふふふ」
「ふふふ」
　瞳子と可南子さんが不敵な顔で見つめ合っていると、不意にシャッター音が鳴り――その後で、二人の前に別の生徒が現れた。
「ずいぶん仲がよろしいのね？」
　デジタルカメラを手に持った内藤笙子さんが、にっこりと微笑みながら言う。
「素敵な写真が撮れたわ。タイトルは――『友情』でどうかしら？」
「良くない」
「良くない」
　笙子さんの提案に、瞳子と可南子さんの言葉が重なる。二人はバツの悪そうな表情を浮かべてそっぽを向いた。
「ふふふ。素敵な友情をごちそうさま」
　笙子さんは口元に手をあててお上品に笑う。
「それで、笙子さんはいったい何の用かしら？」
　瞳子がつんと澄まして尋ねる。
「ああ、そうだった。私、これから薔薇の館に向うので、瞳子さんとご一緒しようと思って」
「薔薇の館に？」
「ええ。今日の昼休みに祐巳さまと由乃さまと新聞部の部室で打ち合わせをしたのだけれど、その時に伝え忘れたことがいくつかあって」
「そうなの」
「お邪魔じゃなければ、ご一緒しても？」
「かまわないわよ」
　瞳子は頷いて応じる。
　笙子さんは可南子さんに視線を送る。
「私たちの話はもう終わったから気にしないで。私はこれからバスケ部に行くから、途中まで一緒ね」
「それじゃあ、三人で参りましょう」

笙子さんはどこか楽しそうに言って下駄箱へと足を進めた。
瞳子は、胸の中で思った。
おそらく、笙子さんも瞳子のことを心配して会いに来てくれたのだろうと。
先日、偶然にも瞳子がマリアのタイを直しているところ写真に撮ってしまった笙子さん。おそらく、瞳子の知らないところでいろいろ気にかけてくれていたのだろう。
瞳子は、自分の胸が暖かくなるのを感じた。
「おーい、瞳子」
すると、またしても別の生徒の声。
それは聞きなじみのある声で、考えるまでもなく分った。
振り返ると、乃梨子と菜々ちゃんがいた。
「今から薔薇の館？」
「そうよ」
「みんなも？」
乃梨子は驚いたように、瞳子の隣にいる珍しいメンバーを眺める。
「笙子さんは、お姉さまと由乃さまに用事があるみたい。可南子さんは、バスケ部に向かう途中よ」
「そっか。じゃあ私たちも御一緒しようかな。ね、菜々ちゃん？」
乃梨子はそう言って菜々ちゃんを見つめる。
菜々ちゃんは瞳子を見つめて口を開く。
「ご迷惑でなければ、私も御一緒してよろしいですか？」
「迷惑なわけないでしょう？　一緒に行きましょう」
「それじゃあ、一同揃って――しゅっぱーつ」
乃梨子が明るく言って、一同は歩きだす。
瞳子は、不思議な気分だった。
乃梨子、菜々ちゃん、可南子さん、笙子さん。
みんな、瞳子のことを心配して集まって来てくれた。
自分は祐巳さまと違って親しみのあるタイプでも、人を引きつけるタイプでもない。
ずっとそう思ってきた。

その考えは、今でも変わらない。
それでも、自分のもとに集まって来てくれる友人たち――仲間たちがいる。
それは、とても素敵で特別なことに思えた。
お姉さまである祐巳さまが繋いでくれた絆。
そして、その絆に続いていく別の絆たち。
新しい絆たち。
それは、まるでロザリオの数珠のように一つ一つが繋がって――瞳子という輪を強くしてくれる。
新しく咲いた絆という名の薔薇で、素敵な花かんむりをつくるように。
「菜々さんの次の剣道の試合、写真撮りに行ってもいいかしら？」
「写真ですか？　私で良ければ」
「可南子さんのバスケットの試合も写真を取りに行きたいんだけど」
「私はちょっと」
笙子さんの提案に菜々ちゃんと可南子さんは別々の反応を見せる。
「私、仏像の写真を撮りたいんだけど上手な写真の撮り方を教えてもらおうかなあ」
「私で良ければ喜んで」
「本当に？」
「ええ」
乃梨子と笙子さんが楽しそうに会話をはじめる。
菜々ちゃんと可南子さんも、いつの間にかお互いの部活動の話をはじめていた。
瞳子はそんな様子を見つめて、どこか不思議な気分だった。
新しい絆が生まれていく光景が、誰かと誰かが繋がっていく光景が、とても愛おしく思えた。
瞳子は今、とても満ちた気持ちだった。
だけど、満ち足りてはいない。
ここには、今自分が一番求めている数珠の弾が足りていない。
その数珠がなければ、瞳子のロザリオは輪にならない。

完成しない。
瞳子はその数珠の弾を――絆を、強く求めていた。
そして改めて、その絆を繋ぎ直さなきゃいけないと強く感じた。
わだかまりがあるなら解いて、二人の絆を結びなおさなければならない。
マリアとはじめて出会った朝、彼女の乱れたタイを直したように。
瞳子はようやく――マリアを諦めないと言った自分の言葉に、実感や根拠を持つことができた。
決意ができた。
仲間たちのおかげで。
絆のおかげで。
ロザリオを受けらせてみせる。
その言葉が、瞳子を鼓舞する。
「みんな、ありがとう」
瞳子は、誰にも聞こえない小さな声で呟いた。
一緒に歩く全員がそれをしっかりと耳にしていることには、もちろん気がついていた。
それがなによりも心地良かった。

37　誠実さと勇気

「そう。今日も、マリアは登校していないのね」
これで、マリアが欠席するのは三日目。
今日も菜々ちゃんから聞かされる報告に、瞳子は表情を曇らせる。
そして、思わずため息を落してしまう。
「はい。今朝もお母さんから連絡があったらしくて、風邪がまだ治らないと――」
菜々ちゃんは、表情をこれでもかってくらい曇らせて下を向く。まるで窓の外の雨のように。
マリアが欠席をしてからというもの、空模様はいつも曇り空で――そして、雨を降らせている。本格的に梅雨入りをしてしまい、その灰色の雲は瞳子や菜々ちゃんの心まで曇らせていた。
「このまま、マリアさんがリリアンに戻ってこない、なんてないですよね？」
菜々ちゃんが、声を震わせて尋ねる。
今まで胸に秘めていたことを、ついに口にしてしまったという表情が――瞳子の胸を強く締めつけた。
瞳子自身、この三日間は長くつらかった。
マリアの欠席を聞くたび、心が押し潰されてしまいそうな、そんな感覚に苛まれた。
もはや、マリアにロザリオを受け取らせる、姉妹（スール）になる、そんな話ではなく――このまま、マリアがリリアン女学園を止めてしまうのではないか、そんな思いが瞳子の胸に過る。
マリアが欠席している原因の一つは、間違いなく瞳子自身であり――あの裏庭でのマリアとの会話にある。
瞳子は、そのことに強いショックを受けていた。
もう一度、しっかりと話をしよう。
マリアと向き合おう。
仲間たちのおかげでそう決心することができた。
その決心自体はまるで鈍ってはいないものの、しかし、事態はそれ

を越える大きなものに変わりつつあった。
「菜々ちゃん、大丈夫よ。週が明ければ、きっとマリアも登校してくるわ」
「だと良いんですけど」
それが単なる気休めでしかないことは、瞳子が一番よく分っていた。
今日は金曜日。
明日は土曜日。
つまり、休日だ。
週が明けて月曜日になれば、元気になったマリアがリリアンに登校してくる。
それは、まるで願い祈りのような考えだった。
だって、そんな保証はどこにもないのだから。
瞳子と菜々ちゃん、二人しかいない薔薇の館は静まり返ってしまった。
すると――
「瞳子、お客さんを連れてきたよ」
ビスケット扉を開いた乃梨子が言う。
制服の肩のあたりが少しだけ濡れていて、「まさか、この雨で傘をさずにきたのかしら?」と瞳子は思った。それに、乃梨子の言うお客様は一向に部屋に入ってくる気配がない。
「乃梨子、傘は? それにお客様の姿が見えないけれど?」
「薔薇の館の前でずっと立ち尽くしてる生徒がいてさ、入りなよって言ったんだけど中々首を縦に振らないから少しすったもんだがあって、その間に濡れちゃった」
「すったもんだ? 乃梨子、まさかその生徒を無理やり連れて来たんじゃないでしょうね?」
瞳子は、呆れたように言う。
「うーん、無理やりっちゃ無理やりなんだけど、たぶんここに連れてくる必要のある生徒だと思ったからさ。さ、入って」
乃梨子は、振り返って扉の向こうに声をかける。

すると、その生徒はゆっくりと部屋の中に入ってきた。
そして、申し訳なさそうに瞳子を見つめる。
「あなたは？」
揃えられた髪の毛と、すらりとしたスタイルの生徒。
瞳子は、「どこかで見覚えが？」と思案する。
「蘭さん？」
先に口を開いたのは菜々ちゃんだった。
そこで、瞳子にも合点が言った。
マリアのクラスメイトで――瞳子がマリアに会いに一年生の教室まで出向いた時に、マリアと揉めていた生徒の一人だ。
瞳子は、その生徒を見つめて口を開く。
「あなた――マリアのクラスメイトよね？　どうして薔薇の館に？」
なるべく棘の無いよう言葉を選び、穏やかに尋ねようとした。それでも、言葉と声音が高圧的になるのをどうしても抑えることができなかった。
そこで瞳子ははじめて、自分が苛立っていたことに気がついた。
心がささくれ立っていることに。
「はい。私は、マリアさんのクラスメイトの三守蘭と言います。あの、瞳子さまにお話しがあってきました」
三守蘭と自己紹介をした生徒は、まるで蛇に睨まれらカエルのように委縮しながらも、なんとかそう言って瞳子を見た。
度胸のある子ね？
瞳子は、心の中でそう呟いて三守蘭さんを見つめる。
「私に話？　いったいどんな話かしら？」
瞳子は強い態度を崩さずにそう尋ねた。
彼女の覚悟のようなものを確かめるように。
「他の生徒の前で話せないようなことなら、人払いをしましょうか？」
瞳子はそう言って、乃梨子と菜々ちゃんを見つめる。
「いえ、他の方々がいらしても構いません」
しかし、三守蘭さんは瞳子の言葉に立ち向かうように言って、瞳子を見つめる。

「そう。じゃあ、話しを聞きましょうか？」
「あの、話しを始める前に、一つだけ――」
突然、三守蘭さんは深々と頭を下げた。
「瞳子さま、申し訳ありません」
「えっ？」
「私のせいで、マリアさんが学校を休むことになってしまって。それに、瞳子さまとマリアさんの噂まで――全部、私のせいです。本当に、申し訳ありませんでした」
声を上げてしっかりと告げられた謝罪に、瞳子は一瞬面喰ってしまった。
そして、三守蘭さんの真剣な声音を受けて、直ぐに気が付くことができた。
マリアが休んでいるこの三日間――彼女も、瞳子と同じように苦しんできたんだと。
三守蘭さんも、自分のせいでマリアがリリアンを休んでいると思っている一人なんだと。
瞳子は自分が彼女に――三守蘭さんに好感を覚えていることに気がついた。
彼女は、たった一人で薔薇の館にやってきて、上級生とクラスメイトの前で深々と頭を下げて謝罪ができる生徒だ。
少なくとも、誠実さと勇気は持っている。
ならば、瞳子は上級生として、紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみとして――そして、マリアを思う一人として、それにこたえなければいけない。
「蘭さん、顔をあげてくれる？　そんなに深く頭を下げられていたのでは、しっかり話もできないわ。あなたの話を私に聞かせてちょうだい」
蘭さんは恐る恐る顔をあげて瞳子を見る。
そして、少しだけ驚いたような表情を浮かべる。
そこにあった瞳子の顔が、とても優しい顔をしていたから。
「まずは、席に座って落ち着きましょう。菜々ちゃん、お客様に温かいお茶を用意してくれる？」

38　蘭さんと懺悔

「少しは落ち着いたかしら？」
「はい。突然、驚かせてしまい申し訳ありませんでした」
テーブルに向かい合って座った――瞳子と蘭さん。
薔薇の館には二人だけ。
乃梨子と菜々ちゃんは温かい紅茶を二人に出した後、静かに部屋を出て行った。
蘭さんを見つめる瞳子は、困ったように眉を寄せる。
最近は、なんだから謝られてばかりな気がするわね？
瞳子は、自分が薔薇の館のお局様（つぼねさま）か、意地悪な魔女にでもなってしまったような気がして、苦笑いを浮かべるしかなかった。やはり、自分は祐巳さまと違って親しみ深いタイプでも、人を引きつけるようなタイプではないなと、改めて思わされた。
「それじゃあ、話しの続きをしましょうか？　謝罪だけをしにきたのではないんでしょう？」
瞳子が尋ねると、蘭さんは意を決したように口を開く。
「瞳子さまは、マリアさんと姉妹（スール）になるおつもりですか？」
瞳子は、いきなりそれを尋ねられて口ごもってしまう。
まさか、ここまでストレートにそのことを尋ねられるとは思っていなかったから。
この質問も、いったい何度目だろうか？
瞳子は再び苦笑いを浮かべそうになった。
「私なんかが、立ち入って良い話じゃないのは分かっています。無礼な質問だっていうのも分っています。でも、瞳子さまがマリアさんと姉妹（スール）になるのか、それをどうしても聞きたいんです」
蘭さんは、真剣そのものだった。
彼女の張りつめた、そして切実な表情の名前を瞳子は知っている。
それは――心配いう名の表情だ。
「蘭さん、あなた――もしかしてマリアのことを心配しているの？
それに、マリアに姉ができてほしいって思っているの？」

瞳子は、思わずそう口にした。
そして、それを言葉にした後で、瞳子は――自分は大きな勘違いをしていたのではないかと考えた。
確かに、マリアとクラスメイトは揉めていた。
その当事者には――三守蘭さんも混じっていた。
この話題を最初に薔薇の館に持ち込んだ菜々ちゃんも、それを聞いた瞳子を含む山百合会のメンバーも――マリアが姉妹（スール）の申し出を断り続け、誰とも姉妹（スール）にならないことをお高く止まっていると嫉妬され、それを理由に攻撃をされているのではないかと考えた。もちろん、そのような感情を向けて攻撃的になっていた生徒もいた。
けれど、三守蘭さんは違うのではないか？
もっと別の、複雑な事情や感情があるのではないか？
瞳子は、そんな結論に至った。
「いえ。今さらマリアさんを心配する資格なんて――私には、ありません。私は、マリアさんにずっとひどいことをしてきたんです。マリアさんに嫉妬して、それで、彼女から距離を取ってきた。彼女に嫌がらせをする生徒たちと一緒になって、マリアさんに嫌がらせをしてきた」
蘭さんは自分のことを肯定することなく、正直な気持ちを吐露しはじめた。
自分の罪を告白するように。
「私のお姉さまは――最初、マリアさんに姉妹（スール）の申し出をしたんです。でも、マリアさんはその申し出から逃げて、ちゃんと返事をしなかった。その後で、私がマリアさんのかわりに姉妹（スール）の申し出の断りをしに行ったんです。その後で、私たちも少しずつ親しくなって、それで姉妹の申し出をされて、私はそれを受けました」
「それは、あなたも複雑な気持ちだったでしょうね？」
瞳子が蘭さんを慮（おもんぱか）るように言うと、蘭さんは苦笑いを浮かべた。
「マリアさんは、その後も姉妹（スール）の申し出を断り続けて、私にはそれが理解できなかったんです。だって、マリアさんは繋がりを求めているのに、もっと誰かと親しくなりたいと思っているのに――それなのに、

自分に向けられる好意を無下にしていく。私、それがどうしても許せなかったんです」
それは、瞳子も感じていたことだった。
マリアは明からに誰かとの繋がりを求めている。
関係を築こうとしている。
それなのに、姉妹（スール）の申し出からは逃げ続けている。
そのことが、瞳子にも蘭さんにも分らなかった。
だから、不安になったり、心配になったり、やきもきしたり、苛立ったり、悲しんだりしてしまうのだ。
分からないから。
分りたいから。
「だから私、マリアさんが瞳子さまの姉妹（スール）の申し出も断るんじゃないかって思って。それで、マリアさんがリリアンを休む前日に――彼女を中庭に呼び出したんです」
蘭さんは、悔しそうに体を震わせながら言葉を続ける。
「中庭で、マリアさん、瞳子さまとも姉妹（スール）にはならないってハッキリと言って――私、それでどうしようもなく悲しい気持ちに、虚しい気持ちになって、それで、ひどいことを言ってしまったんです。そんなことを続けていたら、いつか、本当のひとりぼっちになってしまうって――」
蘭さんは、いつの間にか泣いていた。
大粒の涙をこぼしながら、必死に自分の怒りや悲しみを瞳子に訴えかけていた。
これまで押し殺し、抱え込み、積み上げてきた彼女のを思いを、罪を、懺悔を全て吐き出すように。
「だって、マリアさんは――瞳子さまが好きなんです。私たち、二人で何度も瞳子さまについて話したんです。紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみの瞳子さまは――私たちの憧れだったんです。そんな人に、薔薇の館に招待されて、呼び捨てで呼んでもらえて、姉妹（スール）にだってなれるかもしれないのに、それなのに、それを断るなんて、そんなの、あんまりすぎるじゃないですか？　その理由も教えてもらえないなんて――惨めすぎる

じゃないですか？　ずっと、友達だと思っていたのに」
瞳子は、いつの間にか立ち上がって蘭さんの隣に寄り添っていた。
そして、大粒の涙を流し彼女の頭を優しく撫でる。
瞳子は、蘭さんを見てとても胸が温かくなった。
こみ上げるものを感じた。
瞳子は思った。
マリアと蘭さんは、これから先、友人関係を築き直せるはずだ、と。
かつて、自分にもそんな反目し合った友人が――ライバルがいた。
「そうよね？　そんなの、あんまり過ぎるわよね？」
瞳子は、可南子さんのことを思い出しながら言葉を続ける。
かつて同じ人に――紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみの祐巳さまに憧れ、そして反目し合った自分と可南子さんの関係が、マリアと蘭さんの関係に重なって見えた。
「こんなにも心配してくれる友人がいる――マリアは幸せものね」
「友達なんかじゃないです。もう、友達なんて言ってもらえる資格はありません。私はマリアさんを追い詰めて、それで。でも、このままじゃ悲し過ぎます。マリアさんが、本当にひとりぼっちになってしまう」
「友達に資格なんていらないのよ？　あなたは十分すぎるほどにマリアの友達だわ。今は、少しだけ仲たがいをしてしまっただけ。また仲直りをして、一からやり直せばいい」
「でも、マリアさんがこのままリリアンに戻ってこなかったら？」
蘭さんは心からそのことを恐れているように、小さくそう尋ねた。
まるで、夜に怯える子供のように。
二人の絆を、もう一度結び直さなければいけない。
瞳子はそう強く決意した。
だって、三守蘭というロザリオの数珠は――もう瞳子という薔薇の花冠を彩る一輪の花なのだから。
だからこそ、その輪を完成させる最後の一つがどうしても必要なのだ。

「大丈夫。マリアは私が連れ戻すわ。そうしたら、三人でお茶をしましょう。それは、きっと――素敵なお茶会になるわ」

39　部長と経験

土曜日。
瞳子はリリアン女学園じゃなく、別の場所に向っていた。
バスに揺られながら、曇った窓ガラスの向こう側に視線を向ける。
天気はあいにくの雨で、ここ最近の瞳子の心模様を映したまま。あるいは、これから会いに行く別の誰かの心模様を映しているのかもしれない。
バスを降りて赤いバラ色の傘を差しながら、事前に調べてきた道をたどる。
この大切な用事を終えた後、その足でリリアン女学園に戻り演劇部の練習に出るため、服装はリリアンの制服姿。自慢の縦ロールもいつもよりも入念に巻いて、気合十分、戦闘準備はバッチリという出で立ち。
昨日の蘭さんとの会話を思い出して、胸に火が灯るのを感じる。
今の瞳子の心は曇っていない。
晴れ渡っているくらいだ、
そして瞳子は、演劇部の稽古に遅れると断りを入れた時の、部長との会話をふと思い出した。
「少し遅刻するくらい、ぜんぜん構わないわよ。それに、一日くらいなら休んだって問題ないのよ？　瞳子ちゃんの役はもう完成しているようなものなんだし」
「いえ、午後からは練習に出られるので。それに、部の全員で合わせたほうが劇の完成度も上がります」
部長の高城典（たかぎつかさ）さまは、瞳子の言葉を聞いて優しく微笑む。
もしかしたら、ずいぶん丸くなって殊勝なことを言うようになって――と、思われているのかもしれないと、瞳子は少しだけ気恥ずかしくなった。
一年生の頃の自分は、お世辞にも部に馴染めているとは言えなかった。
劇の練習を飛び出して、そのまま稽古に戻らないことだってあっ

た。
演劇部に戻るのを躊躇っていた時、瞳子の背中を押してくれたのは祐巳さまだった。
そしてもう一人――そんな瞳子を見捨てずに演劇部に留め、他の部員との仲を取り持ってくれたのは、今目の前のいる部長だった。
「なら、いいわ。実際、瞳子ちゃんが稽古に参加してくれた方が部の士気も上がるし、演技の質も上がる。でも、変な噂話が流れてるけど、大丈夫？　私が心配するようなことでもないと思うけれど」
部長は、瞳子を見つめて続ける。
「今の瞳子ちゃんには――あなたを支えてくれるたくさんの仲間や友人たちがいる。だから、大丈夫だっていうのは分っているんだけれど、少し気になって」
「ご心配をおかけしてすいません」
「いいのよ。心配をしたり、気にかけたりすのが上級生の役目なんだから」
「はい」
瞳子は、ここにも自分を気にかけてくれる大切な人がいることに気がついた。
それは、瞳子の胸の奥を暖かくして奮い立たせてくれる。
特別なロザリオの数珠はこの場所にも繋がっていて、瞳子という輪を強くしてくれている。
かつて、部長は瞳子の姉になろうとしてくれた。
それは瞳子が、祐巳さまを断ち切るために生徒会選挙に出て落選し後の話。
演劇部を止めようとした瞳子を引き留めて、優しく抱きしめてくれた。
その時、姉妹（スール）の申し出をしてくれた。
この演劇部の部室で。
「もう、祐巳さんのことは忘れなさい。私が守ってあげるわ」
あの時、部長の胸の中で瞳子はこう思った。
このままうなずけば、楽になるのだろうか。何も考えずに、何も求

めずに。穏やかな生活を送ることができるのだろうか。
でも、瞳子はゆだねかけた部長の腕をとらなかった。
とれなかかった。
祐巳さまを断ち切るために、ただ守ってもらうためだけに、部長を選ぶなんてしてはいけないことだと思ったから。
そのことを思い出した時、瞳子はふとあることに気がついた。
自分が、マリアに姉妹（スール）の申し出をした時の言葉を思い出した。
「マリア、あなたの抱えているものを、私にも抱えさせてほしいの。二人で一緒に考えたり、悩んだり、それに喜んだりしたい。だから、私の妹になりなさい。私があなたを守ってあげるわ」
そうだ。
ただ守ってもらうために姉妹（スール）になるなんて――何かを断ち切るために姉妹になるなんて、してはいけないことだ。そのことを一番理解していたはずの、身にしみて知っていたはずの瞳子が、どうして気づいてあげることができなかったのだろう。
瞳子は、かつて自分を妹にと思ってくれた部長を見つめた。
「部長、ありがとうございます」
そして、にっこりと笑って感謝の言葉を告げる。
「ありがとうって、何が？」
「ご心配して頂いたこともそうですが――あの時、部長は言ってくれましたよね？」
「言ったって、何を？」
「結果はどうあれ、こういう経験って大切よ、って」
「そう言えば、そんなことを言ったわね」
部長は、懐かしそうに言って微笑む。
それは、瞳子が山百合会の選挙で落選した経験を指して言葉だったが、人生すべてに当てはまる素晴らしい警句だ。
「瞳子ちゃん、良い顔しているわよ」
部長は瞳子のその表情を見て、もう心配する必要はないと理解したように頷く。
だって、瞳子の表情はとても晴れ渡っていたのだから。

清々しいくらいに。
晴れ晴れと。

「部長のおかげで、少しだけ分った気がするんです。私がこれから何をするべきなのか」

４０　おうどんとむくんだ顔

「マリア、お昼ご飯は食べれそう？」
扉の外から、お母さんの声が聞こえる。
布団の中から顔を出したマリアは、ベッドの上の目覚まし時計に視線向けた。
時刻は、午前十一時を回ったばかり。
「もう直ぐ、お昼かあ？」
目をこすりながら気だるい体を半分起こす。同時にマリアの母親が、部屋の扉を開けて娘の顔を見る。
「顔色は良いわね」
「うん。おうどんなら食べれるかも」
「わかった、うどんね」
「麺は柔らかくしてね」
「分ってるわよ。それより、具合はどうなの？」
「もう大丈夫だよ。熱も下がってるし、月曜日からは学校に通えそう」
「そう。ならよかったわ。雨の中傘もささずに帰ってきて、お母さんびっくりしたわよ。今度からは気をつけてよね」
「心配かけてごめんね」
「今日一日は安静にしているのよ」
「うん。布団の中でゴロゴロしてる」
お母さんが去った後、マリアは再び体を寝かせて布団に戻る。
正直、胸が痛かった。
熱はずいぶん前に下がっていたし、体調だって問題無かった。
金曜日には学校に通えるほどに回復していた。
でも、マリアは金曜日の朝も具合が悪いと嘘をついて学校を休んでしまった。
最近は、嘘を吐いてばかりだ。
マリアは、そんなことを考えて気が滅入った。
正直、このままリリアン女学園には戻りたくない。
瞳子さまに合わせる顔がなかったし、蘭さんにだってもう顔向けで

きない。
こんな私に、姉妹（スール）の申し出をしてくれた瞳子さま。
こんな私を、心配してくれた蘭さん。
二人に申し訳が立たなくて、どこか遠くに逃げ出してしまいたい気持ちだった。
人間の足を手に入れて陸に上がった人魚姫は、言葉を喋ると泡になって消えてしまうというが、マリアも同じように泡になって消えてしまいたかった。
この布団の海の中で。
そんなことを考えている自分に、心底うんざりしながら――
マリアは昨日変えたばかりの花瓶の花と、その隣の写真に視線を向ける。
そこに映っているものに助けを求めるように。
手を伸ばして――縋りつくように。
「はぁ。私、なんでリリアン女学園に入学しちゃったんだろう。それに、どうしてリリアンに通いなさいなんて」
マリアは、ここにいない誰かに話しかけるように言った。
すると――
「マリア？」
扉の外からお母さんの声がした。
マリアは、自分の今の言葉が聞こえてしまったのかと思って恥ずかしくなった。
「なにー？」
「お客様よ」
「お客様？」
マリアは驚いて尋ねる。
わざわざ休日に尋ねてくるような人物に心当たりはない。
心当たりはないけれど、その人の顔は鮮明に浮かんでいた。
マリアは、そんなことは絶対にないと首を振る。
あんな失礼をした後で、それでも追って来てくる人なんているわけない。それに住所だって知らないし、そもそも私なんかに会いに来る

理由がない。
私なんか。
またその言葉を使ってしまい――菜々さんの顔が思い浮かんでちくりと胸が痛む。
「お客様って、誰？」
「松平瞳子さんが、マリアを心配して尋ねてきて下さったわよ」
「瞳子さまが？」
やはり、瞳子さまだ。
マリアはその名前を告げらた時、どうしたらいいのか分からなくて混乱してしまった。
嬉しい気持ちは、確かにある。
それでも、合わせる顔がないという気持ちもある。
あんな失礼を働いた後で、どうやって言葉を交わせばいいのか分からない。
瞳子さまと顔を合わせ、あの真っ直ぐな瞳を見るのが怖い。
凛とした顔を見るのが怖い。
なにより瞳子さまのつらそうな顔を見るのが、つらい。
それでも――
マリアは混乱をしたまま「どうしよう？」と、泣きそうな瞳を花瓶の隣の写真に向ける。
助けを求めるように。
「どうする？　病気をうつしても悪いし、まだ具合が悪いなら帰ってもらう？　でも、お母さんは会ってお礼を言ったほうがいいと思うけど。だって、松平さんって最近マリアがお世話になっている上級生でしょう？　せっかく来てくださったんだし、元気な顔を見せてあげたら？」
お母さんがマリアの背中を押すように言う。
写真の中で微笑む人物も、マリアの背中を押すように真っ直ぐな瞳と、凛とした表情でマリアを見つめている。
その瞳は、いつだってマリアの背中を押してくれた。
その手は、いつだってマリアの手を引いてくれた。

ここまでマリアを導いてくれた。

「マリア、リリアン女学園って知ってる?」

マリアは意を決して布団から飛び出した。

「お母さん、私、瞳子さまに会う」

「そう。リビングで待ってもらっているから、部屋にお連れするわね」

母親は、ほっとしたように言う。

マリアは気合を入れるように拳を握って、「ふん」と鼻を鳴らす。自分を奮い立たせて、ありったけの勇気を振り絞る。

そして、決意を秘めた自分の顔を鏡で見て――

愕然とした。

「お母さん、瞳子さまに五分待ってもらって。急いで部屋を片付けるから」

そう言ったマリアは、慌てて乱れた髪の毛を直し、むくんだ顔を何とかしようとした。

しかし、ひどい顔はどうしようもなさそうだった。

「こんな顔じゃ、瞳子さまに合わせる顔がないよー」

むくんだ腫れぼったいを目をこすりながら、マリアは嘆くように言って肩を落とした。

41　心の扉と小さな鍵

「お待たせしてごめんなさいね」
リビングのソファーに座っていると、マリアの母親がやって来て言う。
瞳子は首を振って口を開いた。
「いえ、休日に突然押しかけてしまって、こちらこそ申し訳ありませんでした。マリアさんのご迷惑でなければ良いのですが？」
「迷惑なんかじゃぜんぜんないわ。あの娘、松平さんのお手伝いをするようになって。薔薇の館？　に、通うようになってからすごく明るくなって、家でもいつもあなたの話ばかりしているのよ。とても素敵先輩で――憧れの人だって」
「ありがとうございます。それは、とても光栄なことです」
瞳子は、そう言いながら微笑を浮かべた。
そして、ほっと胸を撫で下ろした。
マリアが、瞳子のことを家族にそのように話していてくれたことがなによりも嬉しかった。憧れだと言ってもらえたことが、今の瞳子にはなによりも励みだった。
「
あの娘、引っ込み思案で内気なところがあるでしょう？　だから松平さんみたいに堂々とした先輩がバシバシしごいて、厳しく指導してくれると、とても助かるわ」
マリアの母親は冗談めかせて言った後、瞳子をマリアの部屋に案内した。
瞳子は、『マリア』と描かれた札のぶら下がった部屋の前に立つ。マリアの部屋の前、廊下を挟んだ向かいの部屋にはもう一つの部屋があって、その部屋には何の札もかけられていなかった。
瞳子は息を整える。
まるで、舞台に上がる前のような気分と緊張感だ。思わず身がすくむのを感じるくらい。
でも、これから立つ舞台には演技は必要ない。台本も存在しない

し、仮面をかぶる必要もない。
ただ、瞳子の気持ちを真っ直ぐに伝えるだけでいい。
しかし、それが一番難しいことだった。
以前の瞳子は、それができずにずっと苦しんだ。仮面をかぶり、なにものかを演じることで、必死に自分という存在を保ってきた。
祐巳さまが、瞳子の仮面を外してくれるまで。
だからこそ、瞳子は絶対に譲れなかったものを、喜んで譲り渡すことができた。
祐巳さまに自分を知ってもらうという、本当のことを話すとういう――
一番難しかったことを、やってのけることができた。
難しいからこそ、それが一番大切なのだ。
お互いを理解し、分り合う上では。
あの時は、祐巳さまが瞳子を探しに来て――見つけてくれた。
今は、瞳子がマリアを探して――
そして、見つける番なのだ。
「マリア、入ってもいいかしら？」
瞳子は、意を決してマリアの部屋の扉をノックしながら言う。
「はい。どうぞ」
直ぐに緊張したマリアの声が聞こえてきて、瞳子は自然と微笑んだ。
そして、扉を開けて中に入る。
できることなら――マリアの心の扉も開けられますようにと願って。
自分が、マリアの心の扉を開く小さな鍵を持っているかは分らない。
それでも、その扉を叩くことはできる。
瞳子はそんなことを思いながら――
マリアと再会した。

４２　くもりガラスと向こう側

「突然押しかけてしまって、ごめんなさい。迷惑じゃなかったかしら？」
背の低いガラステーブルの前に、向かい合って座った瞳子とマリア。
ピンク色のパジャマ姿で、少し疲れたような顔をしているマリアを見つめた瞳子は、落ち着いた調子でそう言った。
内心はとても穏やかとは言えなかったけれど。
「迷惑だなんて。私のほうこそ、ご心配をおかけして申し訳ありませんでした」
マリアは落ち着かなそうな調子で、瞳子から目を反らす。
「三日も休めば、心配もするわ」
「ですよね」
「でも顔色も悪くないし、病気もだいぶ良くなったみたいで安心したわ」
「はい」
返ってくるのは、気まずそうな歯切れの悪い返事ばかり。
空気が重い。
会話が弾みそうにない。
瞳子は、どうしたものかと思案する。
そして――
「マリア」
「あの、瞳子さま」
同時に、二人の言葉が重なる。
お互いの名前を呼ぶ声がぶつかりあって、二人は気まずそうに目を合わせる。
「あなたから、どうぞ」
瞳子が先を譲る。
「いえ、瞳子さまが先に」
マリアも、先を譲ろうとする。

すると、不意にマリアの部屋の扉が開く。
「お茶と、お茶請けをもってきたんだけれど、お邪魔だったかしら？」
マリアの母親は、静まり返って部屋の中を見て首を傾げる。
「お母さん、ノックくらいしてよ」
「ごめんなさいね」
「手伝います」
素早く立ち上がった瞳子は、マリアの母親から紅茶のトレーを受け取る。
「松平さんは礼儀正しいだけじゃなくて、気まで利いて、マリアにも見習ってほしいわ」
「お母さん、瞳子さまの前で余計なことは言わないで。恥ずかしいでしょ」
「なにを恥ずかしがることがあるのよ？　事実なんだから。この子、家だといっつもゴロゴロして」
「お母さんっ」
マリアが悲鳴のような声を上げる。
「ああ、そうだ。お茶請けのゼリーは、松平さんがあなたのお見舞いにもってきてくれたものだから、しっかりとお礼を言うのよ」
母親は楽しそうにそう言って、マリアの部屋を後にした。
ガラステーブルの上には、暖かい紅茶と桃のゼリーがそれぞれ二つずつ。
桃のゼリーはマリアの家を訪れる前に、駅前のデパートで瞳子が購入したもの。松平家でも良く食べるお気に入りの洋菓子店のもので、その中で瞳子が一番好きなものをお見舞いの品として購入した。
「瞳子さま、うるさい母親ですいません。それに、お見舞いに来て頂いただけでなくゼリーまで、本当にご心配をかけてごめんなさい」
マリアは恥ずかしそうに頬を赤らめて言う。
それでも、先程よりも緊張がほぐれた感じで、自然体の彼女の姿が垣間見れた。
瞳子は、心の中でマリアの母親に感謝をした。
「気にしないでいいのよ。それに、素敵なお母様だわ。さぁ、紅茶が冷

める前に頂きましょう」
「はい。私、桃が大好きなんです。このゼリーとってもおいしそう」
「なら、よかったわ」
瞳子は小さな子供のようにゼリーを頬張るマリアを見つめながら、ティーカップを持ち上げて紅茶を一口すする。
「この紅茶――ローズヒップティー？」
瞳子は、慣れ親しんだ紅茶の味に驚く。
マリアは、またしても恥ずかしそうに頬を赤らめて瞳子を見る。
「はい。瞳子さまのお気に入りのお茶をお家でも飲みたくて――お母さんに頼んで茶葉を買ってもらったんです」
「そう」
瞳子は弾む気持ちを抑え込んでもう一口紅茶をすすり、桃のゼリーを頬張る。いつもよりお茶もゼリーも甘く感じられた。それも飛びきりに。
「あの、瞳子さま」
「マリア」
再び二人の声がぶつりかり、重なり合う。
瞳子とマリアは、またしてもお互いの顔を気まずそうに見つめて苦笑いを浮かべる。
だけど、今度の苦笑いは悪い気はしなかった。
「私たち、気が合うわね？」
瞳子は、やれやれと首を振りながら言う。
「はい」
マリアも、嬉しそうに頬を赤らめる。
少し間を置いた後で、瞳子はおもむろに口を開いた。
自分が先に話をすると。
「マリア、ごめんなさい」
瞳子は、単刀直入に謝罪をした。
「えっ？」
マリアは驚きで瞳を見開く。
「あなたを困らせてしまって。突然姉妹（スール）の申し出なんて、あなたも戸

惑うわよね。あなたは最初から誰とも姉妹（スール）になるつもりなんてないのに。それを知っていて姉妹（スール）の申し出をするなんて、私の独りよがり――私は考えなしだった」

瞳子は淡々と、ただ静かに言葉を重ねていく。

せいいっぱいの誠意と思いを込めて。

マリアに届くように願いながら。

「私があなたを妹にと望んだのは、私の心からの気持ちだったけれど――結果、あなたを追い詰めてしまった。リリアンに戻りづらく、通いづらくしてしまった。本当にごめんなさい」

「そんな、瞳子さまが謝ることなんて――」

マリアが叫ぶように言う。

今にも泣きそうな顔を浮かべて、怯えた子供のように首を横に振る。

「私が、私が、ぜんぶいけないんです。私がはっきりとしないから、それでたくさんの人に迷惑をかけて。それで瞳子さまにまで――」

マリアは、その先を言い淀んで口を噤む。

やはり、マリアはどうしてもその先の言葉を言おうとはしない。

マリアは視線を外し、瞳子ではなく部屋に飾られた綺麗な白い百合の花のほうを見つめている。百合の花の飾られた花瓶の隣には、写真立てがどうしてか伏せられて置かれていた。

瞳子は、まるでくもりガラスの向こう側にマリアを見つめているような気分だった。

マリアの本当の気持ちが見えない。

間違いなく、瞳子とマリアは互いを思いやっているはずなのに、そのたった一枚のくもりガラスが、二人がわかり合うことを――手を取り合うことを邪魔している。

本当のマリアが笑っているのか、泣いているのか、わからない。しかめっ面でもいいから見せてほしいのに、それを見ることは叶わない。

なんでもいいからマリアの言葉を聞かせてほしいのに、その声を聴くことができない。瞳子のことを呼んでいるのか、泣いているのか

も、わからない。
それがマリアの本心ならば、憎まれ口だって聞かせてほしいのに。
マリアのほうからそのガラスを拭いてくれないと、二人は本当の意味でお互いの心を通わせることはできない。
瞳子だけでは、その窓ガラスは開かないのだ。
瞳子は、少しだけめげそうな気持ちになりながらも、たくさんの人たちの顔を思い浮かべて自分を奮い立たせる。
瞳子を心配してくれた菜々ちゃん、可南子さん、笙子さん、そしてもちろん、乃梨子。
昨日、薔薇の館を訪れて本心を聞かせてくれた蘭さん。
何も言わずとも見守ってくれている由乃さまや志摩子さま。
大切なことに気づかせてくれた部長。
なにより、一番心配をしてくれているお姉さま。
祐巳さまは、瞳子が自分の力で妹をつくると信じている。
だから、笑顔で送り出してくれた。
諦める必要はないと、背中を押してくれた。
今日は、マリアから何かの言葉を引き出すような必要はない。
ただ、マリアに瞳子の気持ちを伝えるだけでいい。
だから、今は二人の間の壁や距離があったとしても構わない。
「マリア、私には、あなたが何を抱えているのかはわからない。それを聞かせてというつもりもない。あなたにだって譲れないものがあるでしょうし、大事にしているものが――大切な思いがあると思うから」
瞳子は、一つ一つの言葉をはっきりと口にして続ける。
「でも、あなたに姉妹（スール）の申し出をしたことを、私は後悔していない。同情や憐れみなんかで、その申し出をしたのでもない。ただ守ってあげたいからでもない。私は、心からあなたを妹にと望んだのよ。それだけは、あなたにわかっていて欲しいの」
瞳子は、にっこりと笑ってそう言う。
それが、自分の心からの気持ちだと示すように。
「どうして？」

だけど、マリアは意味が分からないと首を横に振る。
瞳子の言葉の意味が分からないと。その顔は怯えていて、困惑していて、痛みに耐えているようでもあった。必死に、わからないふりを続けているようにも。
「どうして、そんなに私に優しくするんですか？　自分を拒絶して、あんな失礼を働いた下級生に、どうして、そんなに――私、わからないんです。瞳子さまが、どうして私なんかを妹にと望むのか」
マリアは今、自分の中にある何かと戦っている。
瞳子には、それが直ぐに分った。
分りたい気持ちと、分りたくない気持ち――委ねたくなる気持ちと、譲れない何かを天秤にかけて、苦しんでいるのだ。
「わからないの？」
瞳子は、静かに尋ねる。
本当に、分らないのかと。
マリアは泣きそうな困った顔のまま、なんと答えればいいの分らないという顔で瞳子を見つめる。
瞳子には、マリアの気持ちが痛いほどわかった。
今のマリアは――かつての瞳子そのものだ。
祐巳さまの姉妹（スール）の申し出を断り、それでも瞳子を気にかける祐巳さまに――「わからないの？」と尋ねられた瞳子と同じ。
瞳子には、祐巳さまの気持ちがわかっていた。
マリアだって、瞳子の気持ちも、瞳子がこの先に用意している言葉だってわかっているはずだ。
それでも、信じられないのだ。
瞳子が差し出した手を取れない、この胸に飛び込んできてくれない、その理由があるのだ。
それを蔑にしてはいけない。
それから目を背けてはいけない。
だから――

43　遠回りとたった二文字の言葉

「わからないわよね？」
　瞳子が、マリアの問いに答える。
　かつての自分の姿をマリアに重ねながら。
「わかっていても、わかりたくない。わかろうとしているのに、最後の部分で信じきれない。私も、以前はそうだったから――あなたの気持ちが痛いほどわかるわ」
「瞳子さまが、私と同じ？」
　マリアは、驚いたように言う。
　信じられないと言うように。
「ええ。私も、お姉さまからの姉妹（スール）の申し出を断ったことがあるから」
「ええっ、祐巳さまからの姉妹（スール）の申し出を断ったんですか？」
　マリアは、やはり信じられないという顔。
　でも瞳子は、そこに少しずつ別の色が加わるのを感じた。
　興味や好奇心とはまた別の、もっと純粋な気持ち。ただそれを知りたいという、そんな感情が見て取れた。
「ええ。それはもう、手ひどく断ったわ。今思い出しただけでも後悔と申し訳なさしか浮かばない。『聖夜の施しならよそでなさってください』って――」
　瞳子は恥ずかしそうに言って、頬を赤らめる。
　マリアは、そのあまりの手ひどさに言葉を失っていた。
「でも、そんな私を、祐巳さまは見捨てずにいてくれた。最後まで向き合い続けてくれた。だから、恥ずかしい過去も今では素敵な思い出。この話をしたのは、マリアがはじめてだけど」
　瞳子は、暗に内緒話だと言って先を続ける。
「祐巳さまが最後まで私を見捨てずにいてくれたから、私は、私がどうしても譲れなかったものを、抱えていたものを、全てさらけ出すことができた」
「瞳子さまが、譲れなかったもの？　抱えていたもの？　それってなんですか？」

マリアが、静かに尋ねる。
瞳子の譲れなかったもの、抱えていたものを心から知りたいと、
瞳子はマリアを真っ直ぐ見つめて、そして微笑みを浮かべながら言う。
自分の胸の扉を開くように。
「私は――松平の家の子ではないの」
「えっ？　そんな――」
マリアの顔色が一瞬にして変わる。
なんてことを聞いてしまったんだと、青ざめた顔になる。口元を手で覆い、後悔で押し潰れてしまいそうに体を大きく震わせる。
「私を産んでくれた父と母は交通事故で亡くなって、赤ん坊だった私一人だけが助かった。私は、母のクラスメイトだった松平の両親に引き取られたの。私は、祐巳さまがそのことを知っていて、その憐みから私を妹にしようと思ったのだと勘違いしてしまった。そのことで祐巳さまに酷いことを言って――強く拒絶してしまった。全て、私の勘違いなのに」
「瞳子さま、ごめんなさい。私、なにも知らずに。そんなつらい過去があったなんて」
マリアは、呆然としたまま言う。
瞳子に向ける顔がないと俯いて涙を流した。
「マリア、こっちを向いて。しっかりと、あなたの顔を見せて」
マリアは、おそるおそる瞳子を見つめる。
頬をつたう涙を瞳子はとても愛おしく思った。
「ねぇ、マリア、どうして謝るの？　私はマリアに、私のことを知ってもらいたくて話をしたのよ。むしろ、聞いてもらえてうれしいわ」
瞳子は、穏やかにそう言う。
瞳子にとって、その過去はもう乗り越えたものだ。
だから、今さら誰かに話したところで胸が痛んだりはしない。
祐巳さまと二人で過去と向き合った時――バレンタインデー企画の賞品で瞳子の祖父の病院にデートに行ったときに、瞳子の過去は全て終わっているのだ。

だからこそ、マリアに知ってもらいたかった。
瞳子の全てを。
「祐巳さまは、純粋に私を妹にとの望んでくれた。何の打算や憐れみもなく、心から姉妹（スール）の申し出をしてくれた。マリア、私も同じよ」
瞳子は、マリアに語りかける。
本当に大事な言葉を。
本当の気持ちを。
「マリア、あなたのことが好きなの。だから、私はあなたを妹にしたいと思ったのよ。マリア像の前で、はじめてあなたを見つけた時から、名前も知らない下級生のタイを直してしまった時から――私は、あなたのことがずっと気になっていたの」
好き。
たった二文字のその言葉を言うためだけに、ずいぶんと遠回りをしてしまった気がする。
だから、瞳子は心からの気持ちを込めてもう一度その言葉を口にした。
「マリアのことが好きだから。だから私は、あなたに姉妹（スール）の申し出をした――これが、私の本当の気持ちよ」

44　赤い糸と虹

「伝えたいことも伝えたから――私はこれで失礼するわね」
瞳子さまは、清々しい顔を浮かべて立ち上がった。
マリアはまさかの告白に頭が真っ白になってしまい、なんと言葉を返せばいいのか分からなかった。
それどころか、まるで言葉の発し方すら忘れてしまったように、声にならない声が喉元で泡のようにはじける。
本物の人魚姫になってしまったように。
「マリア、月曜日はしっかり登校していらっしゃい。あなたの気持ちを無視して姉妹（スール）の申し出をしたり、無理やりロザリオを受け取らせようなんてしないから。それに――三守蘭さんもあなたのことを心配していたわよ」
瞳子さまが部屋を立ち去ろうとする。
マリアは慌てて立ち上がり、せめてお見送りだけでもと思うが、瞳子さまは微笑を浮かべてゆっくりと口を開く。
「そのままでいいわ。色々と混乱させてしまったでしょうし、一度頭を整理しなさい」
そこで瞳子さまは、良いことを思いついたというように表情を明るくする。
「そうだ。百数えてみなさい。きっと心が落ち着くわ」
そう言い残して、瞳子さまは颯爽とマリアの部屋を後にした。
マリアは、それまで瞳子さまがいた空間を――ぼんやりと見つめた。
今までテーブルを挟んだ向かい側に、瞳子さまは確かにいて、自分に声をかけてくださった。
そして、告白をしてくれた。
「マリアのことが好きだから。だから私は、あなたに姉妹（スール）の申し出をした――これが、私の本当の気持ちよ」
それは、まるで夢か幻のようだった。
マリア自身がつくりだした都合の良い夢物語のよう。

でも、これは紛れもなく現実で、瞳子さまは紛れもなくマリアの目の前にいて――そして、マリアのことを「好き」と言ってくれた。
そのたった二文字の言葉を伝えるためだけに、わざわざ会いに来てくださった。
瞳子さまの目を見れば分る。
その言葉に、嘘や偽りがないことが。
あれは、瞳子さまの心からの言葉。
同情や憐れみからでなく、心からマリアを妹に望んでくれた。
そう思うと、弾む気持ちを抑えられない。
溢れ出るものを抑えきれない。
マリアの心が叫びたがっているように、胸の奥が大きく鼓動している。
「いち、に、さん――」
マリアはそんな心を落ち着けようと、瞳子さまに言われた通りに数を数える。
そして、心の中で考えを続ける。
これからのこと。
これまでのこと。
いろいろなこと。
瞳子さまの気持ちに応えたい。
瞳子さまの気持ちに応えるのが怖い。
二人の関係性が変ってしまうのが怖い。
でも、瞳子さまの告白を聞いてしまった後で、このまま何事もなかったように今までの関係を維持するなんてことはできない。
二人は、もう今までの関係ではいられない。
それ以上に、マリア自身が今のままではいけないと強く思っていた。
変わらなくちゃいけないのだと。
「じゅういち、じゅうに」
マリアはゆっくりと立ち上がり、瞳子さまを部屋を招き入れる前に伏せた写真立てを手に取る。いつも花の隣に置いてある大切な人の

写真を。
そして、それを強く抱きしめる。
「さんじゅうはち、三十九」
『ロザリオを渡したところで、血も繋がっていない二人が本当の姉妹になんかなれるわけがない』
以前、マリアはそんなことを思った。
姉妹とは、そんな簡単なものじゃないんだと。
でも、リリアン女学園の姉妹（スール）は全然簡単なものじゃなかった。
「四十五」
マリアは祐巳さまの言葉を思い出す。
『姉妹（スール）って、憧れだけでなれるものじゃないでしょ？』
その通りだった。
マリアが見てきたどの姉妹（スール）にも――姉妹（スール）になるまでの道のりがあり、愛情や信頼があり、そして苦悩があった。
菜々さんと由乃さま。
乃梨子さまと志摩子さま。
瞳子さまと祐巳さま。
そして、蘭さんにだって。
みんな、目に見えないくらいに細い赤い糸を優しく手繰り寄せながら、その糸を大切に繋いでいた。
マリアも、その赤い糸を手繰り寄せたいと心から思った。
自分も、まだ新しい赤い糸を手繰り寄せられるんじゃないかと思った。
最後に残った一本の赤い糸を。
マリアは今日まで、自分と繋がっていた絆を一つずつ――自ら断ち切ってきた。それで構わないと思っていたけれど、あの暖かさを、優しさを――瞳子さまを知ってしまった後では、寂しくてさびしくたまらない。
「五十六」
『そんなことをしていたら、きっといつか本当のひとりぼっちになってしまうわよ』

蘭さんの言葉が、胸の奥で強く響く。
瞳子さまは言っていた。
蘭さんも、マリアのことを心配していたと。
蘭さんは、私を苦しめるために、私に嫌がらせをするために、自分を中庭に呼び出して話をしたんじゃない。蘭さんは私のことを思って、私のはっきりとしない態度にしびれを切らせて――その背中を押すために厳しい言葉をかけてくれたんだ。
ずっとそうしてくれていた。
私のことを嫌いになった後でも、見放さずに気にかけ続けくれたんだ。
それなのに、私はその言葉から逃げてしまった。
あの瞬間、マリアは本当にひとりぼっちになってしまったと思った。
あの中庭で蘭さんに本当のことを話さず、瞳子さまを拒絶した時に――全ての絆を断ち切ってしまったと、そう思った。
でも、瞳子さまはそんな私を追いかけてきてくれた。
あきらめず、見捨てず――会いに来てくれた。
それだけじゃなく、マリアが一番聞きたかった本当の言葉を口にしてくれた。
「六十四」
私は、まだ、ひとりぼっちじゃない。
マリアは、心の中で強く思った。
最後に残った赤いを糸を、自分はまだ手繰り寄せ、絆を繋ぎとめることができるのかもしれない。
それはつまり、マリアが一歩踏み出して――マリア自身が変わるということ。
「七十」
数が大きくなるにつれて、マリアの心は落ち着いてきた。
まるで曇り空が少しずつ晴れていくように。
答えのようなものが見え始めてきた。
勇気のようなものが湧いてくるのを感じた。

自分をさらけ出して、全てを告白するための決意が――

「八十」

『マリア、リリアン女学園に通ってみたら。お姉ちゃん、リリアンに通うのが夢だったの』

そこまで数えた時、マリアは胸の中で強く抱きしめていた写真立てと向き合った。そして、そこに映る最愛の人物と顔を合わせて、自分の顔を良く見せた。

自分をリリアン女学園に導いてくれた大切な人に。

今も忘れられない――

永遠にマリアの胸の中にいる人に。

「お姉ちゃん、私――」

マリアが決意を報告した時、窓ガラスから暖かい日差しが差し込んだ。

いつの間にか雨はやみ、雲は晴れていた。

空は青く凪いでいた。

今は別々の場所にいる、二人の心のように。

☆

バス停にたどり着いた瞳子は、不意に空を見上げた。

雨はいつの間にかやんでいて、雲間から日差しが差し込んでいる。

そして、青い空の向こうには色鮮やかな七色の虹がかかっていた。

まるで、心に橋をかけるような美しい虹。

瞳子は、満ち足りた気持ちでその虹を眺めた。

そして心の中で呟いた――

「マリアも、この虹を見ているといいのだけれど」

45　告白と返事

月曜日。
マリアは、朝早く家を出た。
それは山百合会のお手伝いをしていた時と同じ時間。
今日は一時間も前についてしまわないように、しっかりと時間を確認して、つぼみたちが集まる十五分前に薔薇の館に着くようにした。
マリアは、鏡の前で念入りに自分の姿を確認した。
何度もなんども。
頭の中で、今日言葉にすべき自分の気持ちを何度も繰り返した。
何度もなんども。
そして、生徒手帳に入れた一枚の写真をお守り代わりにして、リリアン女学園に向った。
銀杏並木の先にある二股に別れた道の前、マリア様の前で足を止めて――マリアは両手を合わせる。
そして、長い間お祈りをした後、空を見上げる。
空は晴れ渡っていて、一点の曇りもなかった。
今のマリアの心のように。
もちろん、怖れや不安はある。
受け入れてもらえなかったらという気持ちだってある。
それでも、マリアの心は晴れ渡っていた。
自分のやるべきこと、すべきこと、しなくちゃいけないこと、したいこと――全部が一致した今の気分が、とても清々しかった。
「ここから全てがはじまったんだなあ」
マリアは、このマリア像の前で瞳子さまに呼び止められ、そこでタイを直されたことを思い出した。
それが、全てのはじまりだった。
その時、瞳子さまはマリアの名前も知らなかった。
二人は正真正銘の初対面だったけれど、マリアだけがその人の名前を知っていた。
紅薔薇（ロ・サキネンシスアン・ブウトン）のつぼみ――

松平瞳子さま。
マリアの憧れの人。
あの瞬間から、マリアの日常が変わり始めた。
瞳子さまがマリアを見つけてくれたあの時から。
マリアはあの日のことを懐かしみながら、薔薇の館へと向かった。
二人を出会わせてくれたマリア様にお礼を言って。

☆

瞳子は、いつもよりも早く薔薇の館に来ていた。
なんとなく、マリアが来るような予感がしていたから。
三十分も前に薔薇の館に着いてしまった。
もちろん、誰もいない。
今日の朝、マリアが薔薇の館に来なくても構わない。
どうしてか、瞳子にはそんな心の余裕があった。
「おはようございます」
十五分前になって菜々ちゃんが薔薇の館にやってくると、朝の仕事が全て終わっていることに、菜々ちゃんは目を丸くして驚いた。瞳子は苦笑いを浮かべるしかなく、その意味を察した菜々ちゃんは何も尋ねずに微笑を浮かべた。
「おはよう。ぎりぎりセーフ」
その後に、乃梨子が続いた。
そして、今日に限ってお姉さま方も早く集まり、十分前には全ての薔薇さまとつぼみが集まってしまった。全員が苦笑いを浮かべるだけで、早く集まった理由を口にしようとはしない。
瞳子は一人バツの悪い気分になりながらも、こんな気分も悪くないと思った。
集まった全員がどこかそわそわとして、ふわふわとしている。
ただ一人、瞳子のお姉さまである祐巳さまだけが落ち着き払っていて、とても自然体で瞳子を見つめていた。

「今日はみんな早いわね」
由乃さまが場の空気を変えようと言う。
「お姉さまも、いつもこれくらい早く来て頂けると助かるんですけどね」
菜々ちゃんが直ぐに応じる。
「あんたはまた、お姉さまに向ってそんな口を」
「申し訳ございません。口の悪い妹で」
「むきー、ぜんぜん悪いと思っていないでしょうが」
黄薔薇姉妹が、いつもの姉妹喧嘩を演じてくれる。
「二人とも落ち着いて、せっかく早くに集まったのだから、この時間を有意義に過ごしましょう」
志摩子さまが穏やかな口調でいさめる。
「お姉さま、姉妹喧嘩は犬も食べません。ほおっておきましょう」
乃梨子が志摩子さまをたしなめて、二人は頷き合う。
いつもの白薔薇姉妹の世界だ。
「瞳子、なんだか楽しそうね」
祐巳さまが、瞳子に話しかける。
瞳子は微笑を浮かべてお姉さまを見つめる。
「はい。なんだかとても」
瞳子が言うと、祐巳さまも微笑を浮かべる。
「ほんとだね」
紅薔薇姉妹は、それ以上何も言わなかった。
言葉は、必要ないと言うように。
すると、そんな全てが満ち足りた空間を震わせる足音が聞こえてきた。
急いで階段を上る音。
それは慌てているようにも、怒っているようにも、スキップをしているようにも聞こえた。
瞳子の耳には、どうしてかその足音がとても弾んでいるように聴こえた。
足音の主は、わかかっている。

なんとなくだけれど、わかってしまった。
だから、瞳子はその扉が開くのをじっと待った。
バタン。
ビスケット扉は、階段を上がったのと同じ勢いで荒々しく開かれた。
「瞳子さまっ」
そこに現れたのは、瞳子が思い描いていた通りの人物。
――御園マリア。
瞳子が、妹にと望んだ下級生。
「マリア――」
マリアは、荒々しい息遣いのまま瞳子を見つめる。
そして、その後で部屋全体を見回して、すでに山百合会のメンバー全員が集まっていたことに驚いたように瞳を見開いた。
しかし、マリアは意を決したようにズカズカと足を進める。
そして、瞳子の座っている椅子の前で足を止める。
マリアの瞳には、もう瞳子しか映っていないみたいだった。
「瞳子さま、お話があってきました」
マリアは上ずった大きな声を上げる。
その瞳は不安で揺れていて、その表情は今にも泣きだしそうだった。
瞳子は、そんなマリアが愛おしくて仕方がなかった。
「話っていうのは、なにかしら？」
瞳子は、はやる気持ちを抑えて静かに尋ねる。
他の薔薇さまやつぼみたちが息を飲み、二人に視線を注いで、その成り行きを見守った。
全員が、二人の関係がうまくいきますように願っていた。
「はっ、はい。瞳子さまに姉妹（スール）の申し出をしに来ました。私を――瞳子さまの妹にしてください」
大きく頭を下げるマリアの姿を見て、瞳子は一瞬驚きで頭が真っ白になった。
まさか、いきなり「妹にしてください」と言われるとは思っていな

かったからだ。
まさか、マリアのほうから姉妹（スール）の申し出をしてくれるなんて――
これは、やられた。
こんなに見事に一本を取られてしまっては、瞳子もしっかりと受けて立つしかない。
瞳子は立ち上がり、まだ頭を下げ続けるマリアをしっかりと見つめた。
「マリア、顔を上げてくれる？」
瞳子は言うと、マリアはおそるおそる顔を上げる。その自信の無さそうな表情が、今すぐにでもこの場所から逃げ出したいと雄弁に語っていた。
瞳子は、もう少しこの可愛らしい顔を眺めていたいという誘惑に駆られながらも、返事を口にする。
「もちろんよ。私のほうからも、もう一度マリアに姉妹（スール）の申し出をするわ。マリア、私の妹になってくれる？　このロザリオを――あなたの首にかけてもいいかしら？」
瞳子は、自分の首にかかっているロザリオをちらりと見せて言う。
その言葉を受け取ったマリアは、顔を真っ赤にして満面の微笑を浮かべた。
それは、赤い薔薇が咲き誇ったようなとても素敵な微笑だった。
ようやく咲き誇った二輪の赤い薔薇に、その場にいる全員が瞳を潤ませた。
全員の視線が、マリアに注がれる。
「はい。お受けします」
「ありがとう」
二人は、見つめ合って頷いた。
これで全てが丸く収まる。
最高の形で終わりを迎える。
ようやく、自分とマリアは姉妹（スール）になれた。
瞳子は、そう思った。
しかし――

「あの、瞳子さま、姉妹（スール）の儀式をする前に――瞳子さまに会ってもらいたい人がいるんです。そのうえで、もう一度、瞳子さまからお返事をいただきたいんです」
やれやれ。
そうだ。
自分とマリアの関係が、こんなに簡単に終わるわけがない。
これから、本当のマリアを探しに行かなければならないのだから。
瞳子は、なんだか妙に納得してしまった。
でも、大丈夫。
もう不安はない。
くもりガラスは晴れた。
二人の心は繋がった。
あの虹の架け橋のように。
最後の数珠の弾は、この手のひらの中にある。
瞳子の薔薇の花冠は、もう完成していたのだから。
「ええ。わかったわ」

46　逆指名とまだ

「ふう」

ひとり薔薇の館を出たマリアは、放心した様子で空を見上げる。

今になって足が震えて、そして握りすぎて爪のあとがついてしまった手のひらは汗でぐしょぐしょになっている。心臓は爆発しそうなくらいに大きく鼓動していて――今でも、自分のやったことが信じられなかった。

瞳子さまに、自分から姉妹（スール）の申し出をした。

妹にしてくださいと言ってしまった。

まさか、こんなことを言ってしまうなんて――私は、どうかしていたんじゃないかと、今さらながら思う。

姉妹（スール）の申し出は、全てを話し終えてからしようと思っていた。

自分のことを全て話し終え、さらけ出した後で、その後で改めて姉妹（スール）の申し出をしようと――「妹にしてください」と、言うつもりだった。

全ては、マリア像の前モタモタしていたのがいけなかった。

「薔薇の館に十五分前につくつもりだったのにー」

マリアは教室までの道を辿りながら――今朝、薔薇の館に着くまでの道すがらを思い出して頭を抱えたくなった。

結局、マリアが薔薇の館に顔を出せたのは十分前。

全速力で駆けて、階段をドタドタと駆け上がって、ようやく十分前だった。

そして、何故か今日に限って山百合会のメンバーが全員揃っているというハプニング付き。

ビスケットのような扉を開けて部屋の中を見回した瞬間、一斉にマリアを見つめる瞳の多さに、焦っていたマリアの頭の中は完全に真っ白になった。

だからこそ、一番言うべき言葉と、一番言いたい言葉と、一番言わなくちゃいけない言葉が――

一番最初に出てしまった。

「瞳子さまにお話しがあってきました」の後、続いて出た言葉は――
「はい。瞳子さまに姉妹（スール）の申し出をしに来ました。私を、瞳子さまの妹にしてください」
だった。
マリアはそれを言ってしまった瞬間のことを思い出して、顔を真っ赤にする。
でも、結果としてはそれで良かった。
瞳子さまは、マリアの気持ちをしっかりと受け止めてくれた。
あの瞬間、二人の気持ちはしっかりと繋がった。
マリアは、赤い糸を手繰り寄せることができた。
あとは、マリアが全てを話すだけ。
マリアの全てを知ってもらって、それで瞳子さまの返事を聞くだけ。
でも、もう不安も恐れもなかった。
「それで、マリアの会わせたいっていう人には――いつ会えばいいのかしら？」
「放課後、少しだけお時間を頂ければ」
「それで大丈夫なの？　いえ、いいわ。放課後ね」
瞳子さまは疑問を口にしつつも、今は何も聞かないと頷いてくれた。
「場所は、どこにしましょうか？」
「えっと、それは――」
そこまで頭のまわっていなかったマリアが「どうしよう？」と慌てると――「だったら」と、祐巳さまが提案をしてくれた。
「薔薇の館を使うといいわ」
「でも、お姉さま？」
私用で薔薇の館を使うことに抵抗があるのか、瞳子さまは困った表情を浮かべる。
「ああ、私と菜々は剣道部の集まりがあるから放課後は忙しいのよね」
「そうですね。けっこう長いミーティングあるとか」
と、黄薔薇姉妹。

「ああ、私も今日は忙しかったかも。ねえ、志摩子さん？」
「えっ、ええ？　そうね」
と、白薔薇姉妹。
「私は、今日の放課後は薔薇の館に行かないよ。とっても大切な用事があるから」
と、祐巳さまは正直に言って全員が頷く。
瞳子さまはやれやれと首を横に振って、マリアを見つめる。
「マリア、と言うわけだから薔薇の館でいいかしら？」
「はい。放課後、薔薇の館で」
マリアはそう言いながら山百合会のメンバーに深々と頭を下げた。
気が付くと、マリアは教室にたどり着いていた。
マリアが桃組の教室に入ると、直ぐにざわざわとした空気が教室中に広がる。
しかし、今のマリアはそんな空気が気にならなかった。そんな空気や雑音に耳を傾けている余裕がなかったというのが一番の理由だけれど、それよりも、今一番しなければいけないことに意識を集中させていたから。
まずは、自分の席で荷物を降ろす。
すると、前の席のユリカちゃんが心配そうな顔でマリアを見つめた。
「マリアちゃん良かった。ずっと休んでたから心配で」
「ユリカちゃん、心配かけてごめんね。もう大丈夫だから」
大丈夫と言ったマリアの表情を見て、ユリカちゃんは何かを感じ取ったように安堵の溜息をつく。
教室のざわめきは次第に大きくなり、噂話の内容がマリアの耳に届くほどになった。
マリアはそれも気にすることなく、自分を真っ直ぐに見つめる一人の生徒のもとに足を運んだ。教室に入ってからずっと、マリアを強い眼差しで見つめる蘭さんのところに。
「蘭さん、ごきげんよう」
席に座る蘭さんの前に立ったマリアは、蘭さんを見つめて朝の挨拶

をする。
蘭さんは、何も言わずにマリアを見つめたままで、無駄な会話ならしないというスタンスを崩したりはしなかった。
マリアは意を決して口を開く。
「これまでごめんなさい」の意味を込めて、今一番言わなければいけない本当のことを言葉にする。
「私、瞳子さまに姉妹（スール）の申し出をしたよ。妹にしてくださって、言ったから」
マリアがそれを口にした瞬間、蘭さんの表情が変わる。
まるで宣戦布告を受けたように。
二人はお互い強い眼差しで見つめ合って、それ以上は何も言わなかった。
そして、教室中のざわめきが最高潮に達する。
それが、今日一日リリアン女学園でもちきりなる――
『紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみ逆指名事件』の幕開けだった。

☆

「ふう」
マリアが去って行った扉を見つめたままの瞳子は、まずは大きな息を一つ吐いた。そして振り返り、今にも瞳子のところに駆け出してきそうな一同を見回して言う。
「まだ、おめでとうは結構です」
澄まして言ってはみたものの、瞳子自身はやる気持ちを抑えられない。溢れ出る気持ちを、この喜びや嬉しさを隠しきれそうもなかった。
「うん。そうだね。まだだよね」
乃梨子が、小さな涙を拭いながら言う。
瞳子は、できることなら乃梨子と一緒に涙を流したいと思った。
「はい。まだですね」

菜々ちゃんはすでに泣いていて、今にも叫びたそうな顔で強く拳を握りしめている。
瞳子は、菜々ちゃんの存在の大きさを改めて強く感じた。
由乃さま、志摩子さま、そしてお姉さまの祐巳さまは、落ち着いてはいるものの、三人で視線を合わせて喜びを分かち合っていた。
「今まで、数々のご心配をおかけして申し訳ありませんでした。まだ私たち二人がどうなるかは分りませんが、それでも、お互いの気持ちは確かめられたと思います」
瞳子は、深々と頭を下げてお礼を言った。
みんながいなければ、ここまでたどり着けなかった。
瞳子一人では、この絆を繋ぎとめることはできなかった。
瞳子のロザリオは完成しなかった。
だから、瞳子はこれまでの出会いに、そして今日まで自分と繋がっていてくれた絆に心から感謝した。
もちろん、まだマリアとの関係がどうなるかは分らない。
マリアがいったい何を話すのか、自分に会わせたい人が誰なのかも、まだまだ分からない。
もしかしたら、二人は姉妹（スール）にはならないかもしれない。
それでも、構わないような気がした。
だって、瞳子が今口にした通り、二人の気持ちは確かめられた。
瞳子とマリアの気持ちは繋がっている。
それこそが一番大切なことで、それ以外のことが些細なことなのだから。
だからもう、後はどうなろうと構わないのだ。

47　お昼休みと告白前小景

昼休み。
瞳子は祐巳さまと一緒に昼食を食べていた。
薔薇の館で二人きり。
他には誰もない。
そして二人とも、今日の昼休みは誰も薔薇の館を尋ねてこないと知っている。
姉妹水入らず。
マリアが瞳子に姉妹（スール）の申し出をしたことは、すでに全校生徒に知れ渡っている。
瞳子も、それを目撃した薔薇の館のメンバーも誰も口にしていない。ということは、マリア自身が話したのだろう。
だったら、なにも心配することはない。
問題もない。
瞳子はそう納得して、これまでノーコメントを貫き続けた。
「それでね、祥子さまと柏木さん、また喧嘩をしたんだって。あの二人って本当に仲が良いよね。そうだ。梅雨が明けたらまた遊園地に行こうって話になっているらしいんだけど、瞳子もどう？」
祐巳さまは、お昼ご飯を食べながら楽しそうに話を続ける。
ここ最近、なかなか二人きりでお昼を食べる時間がつくれなかったから、祥子さまや優お兄さまの近況なんかを詳しく話してくれた。
どうして、そんなに自然体でいられるんだろう？
瞳子は、祐巳さまを見て不思議に思った。
「ん、どうかした？」
隣に座る祐巳さまが、瞳子を見て首を傾げる。
たったそれだけのことなのに、どうしたわけか涙が出そうになった。
「いえ、なにも」
瞳子は、小さく呟いて俯く。
いろいろな思いや、いろいろな感情や、いろいろな思い出が溢れ出

して――瞳子はそのいろいろなものにのみ込まれそうになっていた。この薔薇の館で過ごした祐巳さまとの時間があまりにも大き過ぎて、そして眩しすぎて、瞳子はまるで自分がどこにいるのか分からなくなりそうだった。

「瞳子、どうしてつらそうな顔をするの？」

俯いていた顔を上げると、祐巳さまは穏やかな微笑を浮かべている。

まるで全てを知っているかのような、そして、たとえ何も知らなかったとしても全てを受け入れてしまうようなな、そんな穏やかな微笑を。

どうして、そんな微笑を浮かべられるのだろう？

瞳子はそう尋ねたかった。

「瞳子、私なら大丈夫だよ」

祐巳さまが瞳子の手を握る。

優しく。

だけど、とても強く。

「瞳子も、大丈夫。私たちは、こうしてずっと手を握り続けていく。私の反対の手は、祥子さまとつながってる。瞳子の反対の手は、誰とつなぐの？」

瞳子は、祐巳さまが握った手とは反対の手を見つめた。

まだ空いている寂しそうな手を。

わかっている。

マリアと姉妹（スール）になったとしても、祐巳さまとの関係は何も変わらない。瞳子が祐巳さまの妹になった後も、祥子さまとの関係が変わらなかったみたいに。

そうして、リリアン女学園の高等部では、姉妹（スール）制度という伝統を受け継いできたのだ。妹になり、姉になった以上、この寂しさは受け入れなければいけないものなのだ。

「私はここにいるよ。あなたも、ここにいる」

瞳子は祐巳さまの優しい言葉に誘われるように、その肩に顔を預けた。

それが、瞳子のせいいっぱいの甘えだった。
たぶんこの寂しさは、不安からくる迷いのようなものだ。
自分が、祐巳さまのような姉になれるのだろうかという不安。
マリアに相応しい姉になれるのだろうかという恐れ。
祐巳さまがあまりにも眩しすぎるから、暖かすぎるから、どうしてもそんなことを思ってしまう。
「瞳子は、きっと素敵なお姉さまになるよ。瞳子のお姉さまの私が言うんだから、間違いない。だから――自信を持って」
「お姉さま？」
その言葉は、今の瞳子にとって一番必要な言葉だった。
瞳子が、一番聞きたかった言葉。
言って欲しかった言葉。
祐巳さまはそんな言葉をいつだって口にしてくれる。
顔を上げた瞳子は、泣きそうになりながら祐巳さまをじろりと見る。
「お姉さまって、本当にズルいです」
「ええっ、ごめん」

☆

「菜々さん、心配かけてごめんね」
昼休み。
講堂の裏手でお昼ご飯を食べる前に、マリアは菜々さんに謝罪した。
二人はすでに腰を下ろしていて、菜々さんは銀杏の中に一本だけ生えた桜を徐に眺めていた。久しぶりに会った菜々さんはどこか口数が少なく、いつものような凛とした明るさがない。
そんな菜々さんが、マリアを見て優しく微笑む。
「私ね、すごくほっとしてるんだ」
「ほっとしてる？」
「うん。マリアさんと瞳子さまが、しっかりとお互いの気持ちを確か

められて、それで、すごく安心した。なんだか――感動しちゃった」
そう言った菜々さんの瞳は少しだけ滲んでいて、マリアもつられて涙を流しそうになった。
「菜々さん。ありがとう」
だけどマリアは――今は泣いちゃダメだと自分に言い聞かせた。
今は、まだ涙を流すときじゃない。
それは、全てが終わった後で流すべきもの。
「ああ、でも、私はマリアさんが瞳子さまと姉妹（スール）になってもならなくても、ずっと友達でいるつもりだから。瞳子さまとは姉妹（スール）になってほしいけど――それとこれとは、別の話。だから、今度なにかあったら相談してね？　私は絶対にマリアさんの味方になるから」
菜々さんは気恥ずかしそうに言って頬をかく。
「うん。ありがとう。私も菜々さんのこと、大切な友達だって思ってる。今度は、ちゃんと相談するね」
二人はお互いの友情を確かめ合って微笑み合い、そしてお昼ご飯を食べ始めた。
「私ね、少しマリアさんがうらやましいんだ」
おにぎりを一口頬張りながら、菜々さんが言う。
「うらやましい？」
「うん。私とお姉さまが姉妹（スール）になった時は、マリアさんと瞳子さまみたいな感じじゃなかったから」
「菜々さんが由乃さまと姉妹（スール）になった時は、どんな感じだったの？」
マリアが尋ねると、菜々さんは難しそうな顔をして「うーん」と呻り声を上げる。
「なんかドタバタしてた」
「ドタバタ？」
「たくさんの人たちの前で、ロザリオを受け取る受け取らないですったもんだがあって、最終的には祐巳さまと由乃さまのお姉さまに、無理やりロザリオをかけられた。由乃さまがこちょこちょをされて」
「ええっ？」
マリアは、驚きのあまり声を上げる。

そんなロザリオを渡し方があるのかと。
やはり、それぞれの姉妹（スール）にはそれぞれのドラマや苦悩があるのだと思い知らされた。
「私とお姉さまって、なんか他の姉妹（スール）と違って姉妹っぽい話があまりないんだ。だから、マリアさんたちが少しうらやましい。二人のこれまでを見てたら、うらやましいなんて気軽に言っていいことじゃないと思うけど。ごめんね」
「ううん」
マリアは首を横に振って続ける。
「私は、菜々さんと由乃さまの関係、とても素敵だと思うなあ。私のほうこそうらやましいよ」
「そうかなあ？」
菜々さんは眉間にしわを寄せて首を傾げる。
「だって、菜々さんと由乃さま以上に対等な姉妹関係ってないと思う。それって、多分お互いのことを一番信頼し合っているからだと思うんだ。何でも言い合えるのって、本当にすごいことだよ」
「うーん、お互い気遣いやデリカシーが足りないだけなような気が？」
「私なんか、瞳子さまに自分の気持ち一つ話すのもいっぱいいっぱいで、そのせいで、こんなにご迷惑をかけて——菜々さんみたいになれたらなって思う」
「ありがとう」
菜々さんは少しだけ頬を赤らめて続ける。
「でも、瞳子さまに逆指名で姉妹（スール）を申し込めるマリアさんも、相当すごいと思う。私なら、自分から妹にしてくださいなんて言えない気がする」
「その話はやめてよー。あれは頭が真っ白になっちゃって、それで一番言わなくちゃいけないことが真っ先に出ちゃっただけで——あー、思い出しただけで心臓が口から飛びでそうだよ」
マリアが顔を真っ赤にして言うと、菜々さんがころころと笑う。
それにつられてマリアもころころと笑った。
「私、マリアさんと瞳子さまがうまくいくって信じてる」

菜々さんが、マリアを真っ直ぐに見つめて言う。
マリアも、真っ直ぐに親友を見つめて言った。

「うん。ありがとう」

48　お姉ちゃんとお姉さま

放課後。
瞳子は、薔薇の館でマリアが来るのを待っていた。
落ち着かないけれど落ち着いている。
不安だけれど安心している。
そんな、不思議な気分だった。
すると、静かにビスケット扉が開く。
ようやく叩き続けて扉が開くように――瞳子はその扉の向こうから現れる生徒を穏やかに見つめた。
待ちわび、待ち焦がれた相手が、そこには立っていて――瞳子と同じように、穏やかな表情で瞳子を見て微笑んだ。
そして、深々と頭を下げる。
青みがかった綺麗な黒髪。
病的なまでに白い肌。
どこか憂いをおびた儚げな表情。
はじめて出会った朝に、どうしてかほうっておけないと思った生徒が――今、瞳子の目の前にいる。
あの時は、まだ名前も知らなかった生徒が。
長い時間をかけて、二人はここまでやってきた。
そして今、お互いに最後の一歩を踏み出そうとしている。
「マリア、ごきげんよう」
「瞳子さま、ごきげんよう」
二人は「ごきげんよう」と互いに挨拶をした後、少しだけ頬を赤らめた。
どことなく気恥ずかしい。
瞳子は気持ちを落ち着けながら、口を開く。
「さぁ、座って。今紅茶を入れるわ」
「それなら、私が入れます」
「マリアは、お客様なんだから――」
瞳子はそう言った後、違うと首を横に振る。

「もう、お客様ではないわね。それなら、一緒に入れましょう」
「はいっ」
マリアは、満面の笑みを浮かべて頷いた。
二人での共同作業が終わると、テーブルにはローズヒップティーとビスケットが置かれ、そして二人は向かい合って座った。
二人の間には不思議な空気が流れている。
ふわふわしているのにどこか張りつめていて、緊張しているのになぜか落ち着いた、そんな不思議な雰囲気。
それは、とても心地の良い雰囲気だった。
紅茶に口をつけた瞳子は、マリアに尋ねる。
「それで、私に会わせたいという人は――どこにいるのかしら？」
瞳子は、マリアがこの薔薇の館に誰か別の生徒を連れてくるものだと思っていた。
ロザリオの授与を見届ける相手か、蘭さんか、マリアが姉妹（スール）の申し出を断ってしまった上級生か――そう言った生徒を連れてくるものだと思っていた。
しかし、ここには誰もない。
マリアが誰かを呼ぶ気配もない。
「はい」
瞳子に尋ねられたマリアは、制服のポケットから生徒手帳を取りだし、その中から一枚の写真を抜きだす。
「瞳子さまに会ってもらいたい相手は――この写真の中に」
マリアは一枚の写真をとても大切そうに手に取り、それを瞳子に渡した。
「写真？」
瞳子はマリアから写真を受け取り、その写真の中の女性に視線を向けた。
そこには、マリアとよく似た女の子が映っていた。
マリアの昔の写真と言われても納得してしまいそうだったけれど、それがマリアではないことは考えるまでもなく分った。
肩先までのボブカット。

芯の強そうな快活な表情。
でも、どことなく憂いおびた儚げな雰囲気が――マリアによく似ていた。
瞳子はふと、マリアの部屋で見た写真立てを思い出した。
百合の花の飾られた花瓶の隣に、伏せられて置かれた写真立てを。
「私の姉です」
「マリアの、お姉さま？」
「はい。私の大好きなお姉ちゃんです」
マリアが、にっこりと笑って言う。
『お姉ちゃん』という言葉を発した時のマリアの表情は、とても誇らしげだった。
「マリア、お姉さまがいたのね。とても良く似ているわ」
「ありがとうございます。私、幼いころから姉に似ていると言われるのがすごく嬉しかったんです。小さい頃からお姉ちゃんっ子で、いつだって姉の背中を追っていました。姉のようになりたいと思っていたんです」
「そう、それは素敵なお姉さまね」
瞳子は、マリアの姉の写真を見つめる。
実の姉がいるから、マリアは姉妹の申し出を受けずにきたのだろうか？
瞳子はそんなことを思いながら、写真から顔をあげてマリアを見つめ直した。
そして、直ぐに表情を変えた。
マリアがとてもつらそうな顔を、今にも泣きそうな顔をしているからだ。
そこで瞳子は、自分は大きな思い違いをしたことに気がついた。
「マリア、もしかして？」
瞳子は、おそるおそる尋ねる。
「はい。瞳子さまの思っている通りです。姉は、もういないんです。一年前に――亡くなりました」
涙を溜めて、それでも必死に泣かないようにと声を震わせるマリア

を見て、瞳子は心の中で――
「ああ」と呟いた。
マリアにとって、姉妹（スール）の申し出がどれほどつらいことだったか――姉をもつということが、誰かの妹になるということが、どれほどの意味をもつのか、瞳子はそこで思い知らされた。
そして、ようやくマリアの本当のことを知ることができた。
全てをさらけ出してくれたマリアを見つめて、瞳子はどうしようもなく彼女を抱きしめたくなった。強く、そして二度と離さないという思いを込めて。
でも、マリアの言葉は続く。
「姉は昔から身体が弱かったので、覚悟はできていたんです。だから、今でも姉の死を引きずっているとかではないんです。もちろん、姉が亡くなってからしばらくは毎日泣いてました。でも、受験やリリアンでの新生活の忙しさもあって、ゆっくりとですが、それを受け入れていけました」
マリアは、小さな声でゆっくりと話を進める。
瞳子は胸が張り裂けそうな気持ちで、その言葉に耳を傾け続ける。
マリアは、瞳子に全てを委ねて自分をさらけ出している。
ぜんぶをさらけ出した上で、瞳子に受け止めてほしいと願っている。
ならば、瞳子はその全てを受け止めるだけ。
その決心は、とっくの昔についていた。
そんなことは、もう何の問題にもならない。
だけど、なんて重たいのだろう。
そして、それを聞いてしまえば、マリアのこれまでの行動や態度の全てが腑に落ちた。
頑なに姉妹（スール）の申し出を断り続けたことも、それでも誰かとの繋がりを求めてしまうことも。
全てが、はっきりと理解できた。
曇り空が晴れ渡ったみたいに。
「リリアン女学園に通いなさいって言ったのは、姉なんです。姉はリ

リアン女学園に通いたかったらしくて、それでパンフレットを見せてくれて、姉が望むならと、私は志望校を変えてリリアンに入学しました。でも、私、知らなかったんです。リリアンに姉妹（スール）という制度があるなんて。その制度をはじめて聞いた時、私はそれをうらやましいと思いながら――ロザリオを渡したところで、血も繋がっていない二人が本当の姉妹になんかなれるわけがない、そんなひどく失礼なことを思ってしまったんです。その時、私は誰かの妹になる資格はない――そう思ったんです」

瞳子は、マリアとの中庭でのやり取りを思い出した。

あの時、マリアは叫ぶように言った。

「どうして、姉妹（スール）になろうなんて――妹になりなさいなんて言うんですか？　私は、誰とも姉妹（スール）にはなれないんです。どうして、みんな分かってくれないんですか？　ロザリオを渡したって、本当の姉妹になんてなれないんです。それなのに、それなのに――」

あれは、マリアの心からの叫びだったのだろう。

本心であり――そして本心ではない言葉。

「でも、そんな私に姉妹（スール）の申し出をして下さる上級生の方が現れて、私は、ただ戸惑って逃げてしまいました」

「蘭さんのお姉さまね？」

「はい」

マリアは頷く。

「私なんかが誰かの妹になるなんて、それはいけないことだってずっと思っていました。だから、それからも姉妹（スール）の申し出を断り続けました。そのうち変な噂が立つようになってしまって、それで蘭さんとも疎遠になって」

マリアは決して蘭さんを責めるようなことは言わず、それどころか蘭さんに申し訳ないという表情を浮かべた。

「それで瞳子さまや菜々さん、山百合会の方々にご心配をかけてしまうことに」

その言葉を聞いた瞳子は、「そんなことはない」と首を横に振る。
「瞳子さま、はじめて瞳子さまとお会いした朝のことを覚えていますか？」
「ええ。もちろんよ」
忘れるわけがない。
かたときだって。
あの瞬間から、二人の全てがはじまった。
「あの朝、瞳子さまに『お姉さまがいるのか』と尋ねられた時――私、どうしても姉がいないとは言えなかったんです。結果として嘘をつくような形になってしまっても、姉がいないなんて言えませんでした」
「そんなこと、気にすることじゃないわ」
「いえ、私が本当のことを言わないから、たくさんの人に迷惑をかけて、たくさんの人を傷つけて、そのたびに私は逃げ出して――でも、どうしても本当のことは言えませんでした。なんて言葉にしたらいいのか、わからなかったんです」
マリアは苦悩を告白する。
「お姉ちゃんは、いなくなってしまう自分の代わりを探すようにって、新しい姉を見つけるようにって、私にリリアンに通うように言ったのかなって――そう思ったら、そんなことは絶対にしたくないって。誰かを姉のかわりにするなんて、そんなことは、絶対にしてはいけないことだって」
そこまで言うと、マリアはたまらずに涙をこぼしてしまった。
これまで一人で抱えていたことを、胸の内に秘めていたことを、一つずつ言葉にしながら、大粒の涙をこぼしていく。
「マリア、つらいならもう――」
「いいえ。最後まで聞いてください。聞いて欲しいんです」
マリアは、瞳子の言葉を遮って続ける。
「私は、誰かを自分の姉のかわりになんてしたくない。でも、瞳子さまが好きなんです。瞳子さまと一緒にいたい。でも、私は瞳子さまを自分の姉に重ねているだけなのかもしれない。そう思ったら、どうした

らいいのかわからなくなって――それで、また逃げ出してしまったんです」
マリアは、はっきりと瞳子を「好き」だと言った。
瞳子に、自分の気持ちをはっきりと告げた。
それを聞いてしまったら、瞳子はもう我慢ができなくなって立ち上がり、マリアのもとに駆け出した。
マリアも立ち上がって、駆け寄る瞳子に身を委ねようとする。
瞳子はマリアをぎゅっと抱きしめて、自分の胸に迎え入れた。
「マリア、あなたがつらいなら、私たちは無理に姉妹（スール）になる必要はないのよ？　姉妹（スール）にならなくても、私たちの関係は変わらない」
瞳子も頬を濡らしながら言う。
「いいえ。私、瞳子さまと姉妹（スール）になりたいんです。お姉さまと呼びたいんです。でも、私は瞳子さまに自分の姉を重ねてしまうかもしれない。姉の面影を探してしまうかもしれない。お姉ちゃんのことを、忘れるなんてできない。それでも、いいですか？　こんな身勝手な私を――受け入れてくれますか？」
「あたりまえよ」
瞳子は優しくマリアの髪の毛を撫でながら続ける。
「どんなマリアでも、私は受け入れるわ。もう、その覚悟はできている。だって、私はあなたのことが大好きなんだから」
「私も、瞳子さまが大好きです」
マリアは瞳子をぎゅっと抱きしめて、その胸の中で小さく泣いた。
まるで、赤ちゃんのように。
今ようやく、この世界に生まれたみたいに。
そう、マリアは今ようやく産声を上げたのだ。
本当の自分をさらけ出すことで。
瞳子は、そんなマリアが愛おしくて仕方がなかった。
そして今、自分の胸の中にある確かな重さを強く感じた。
それはとても暖かく、とても柔らかい。
これが、瞳子が受け止めた妹の重さ。
これから先、ずっと受け止め続けるマリアの重さ。

でもその重さを、瞳子は重たいとは全く思わなかった。
だけど、軽くもない。
だって、それはもう瞳子の身体の一部なのだから。
そして、心のいちぶ。

おぎゃー。

そんな産声が、聞こえたような気がした。

49　ふふふとふふふ

お互いの気持ちを確かめ合い、理解し合い、そして一仕切の涙を流し終えた後――二人は心を穏やかにして、互いを見つめ合った。
マリアはゆっくりと窓際まで歩いて行き、そして晴れ渡る空を眺める。
その表情は、遠くの空に虹を見つけたように晴れ晴れとしていた。そして、視線を下のほうに移して――足元に素敵な花を見つけたように微笑む。
色とりどりの薔薇の花を。
瞳子は、首から下げたロザリオがカチャリと鳴る音を聴いた。
あと二人に残されたのは、ロザリオの授与だけ。
瞳子は、今がその時かと思ってマリアに一歩近づいた。
すると、マリアが振り返って言う。
「瞳子さま、一つ提案あるんですけど――」
その提案は、瞳子にとってとても納得できるものだった。
それ以上に、とても嬉しいものだった。
薔薇の館を二人で手を繋いで出ると、そこには小さな人だかり。
瞳子は、心の中で――「ああ」と呟く。
私たちは、こんなにもたくさんの人たちに見守られてここまで来たのだなあと、瞳子はしみじみと思った。
マリアもそう思ったのか、瞳子を握る手がいっそう強くなる。
手を繋いだ二人が薔薇の館から出てくるのを見た人だかりは、小さな歓声をあげる。
そして、息を飲んで二人を見つめる。
菜々ちゃんはもう泣いていた。
乃梨子も目に涙を溜めている。
由乃さまと志摩子さまは、そんな妹たちの後ろで微笑んでいる。
祐巳さまは、瞳子とマリアを見て力強く頷く。
祐巳さまの隣には可南子さんが立っていて、可南子さんもその瞳に涙を溜めていた。

少し離れたところには、新聞部の真美さまと日出美さん、そしてもう一人、見覚えのない生徒が一人。おそらく、日出美さんの妹だろう。さらには写真部の蔦子さまと、笙子さんまで。二人は早速カメラを向けている。

スクープとスクープ写真は逃さないという完璧な布陣だった。

そして、さらに少し離れたところには、蘭さんが立っていた。

蘭さんの後ろには、おそらく彼女のお姉さまだろう。蘭さんを支えるように立っていて、瞳子と目が合うと優しく微笑んでくれた。

今この場所には、今日まで瞳子とマリアを支えてくれた、そして見守ってくれた人たちが一堂に会して――二人の言葉を待っている。

「マリア、いいわね？」

「はい」

二人は一歩踏み出して集まって人たちに向き合った。

「私とマリアは、これから晴れて姉妹（スール）になります。でも、まだロザリオの授与は行っていません。皆様の前で姉妹（スール）の儀式を行いたいというのが、私たちの希望です。よろしかったら、マリア像の前までご一緒していただけるでしょうか？」

瞳子とマリアが頭を下げると、「もちろん」という声が聞こえ、小さな拍手などが続いた。

「瞳子さま、マリアさん、まだおめでとうございますじゃないけど――おめでとうございます」

菜々ちゃんがそっと駆け寄ってきて、マリアの手を取る。

「瞳子、やったね」

乃梨子が、泣き虫神さまのドロップをボロボロ、ボロボロこぼしている。

祐巳さま、由乃さま、志摩子さまの三薔薇さまは、手を取り合っているはしゃいでる。

可南子さんが顔を背けて泣き顔を瞳子に見せないようにすると、直ぐに祐巳さまが駆け寄ってその手を取った。

なんて素敵な光景だろう。

瞳子の目がこみ上げるもの滲んだけれど、もう涙は流さない。

マリアも同じように涙をこらえながら、大切な友人を真っ直ぐに見つめていた。
「マリア、あなたにはまだやることがあるでしょう？　行ってらっしゃい」
「はい」
瞳子はマリアの背中を押して、マリアを送り出した。
向こうのお姉さまも、蘭さんの背中を押して送り出す。
二人は互いに歩み寄って、そして会話をはじめた。
二人は直ぐに手を取り合って、そして涙を流し合った。「ごめんね」という言葉が何度もなんども二人の間を行き来して、これまでのわだかまりや、これまでの不和を、ゆっくりと取り除いていって。
ふたたび絆を繋ぎ直すように。
蘭さんのお姉さまが瞳子に小さく頭を下げて、瞳子も頭を下げる。彼女とは、これから先も長い付き合いになりそうだと――瞳子は暖かいもので満たされた心の中でそう思った。
「それじゃあ、みなさんそろそろ場所を移しませんか？　ここから先は――写真部と新聞部が主導させていただきます」
シャッターチャンスは逃さないと、静かに写真を取りづける蔦子さまに変って、笙子さんがそんな提案をする。
きっと、蔦子さんの代わりを演じているのだろう。
そんな似合わないことをする笙子さんの言葉を聞いた一同はドっと笑い、ぞろぞろとマリア像へと向かって足を進める。
『紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみの妹は、御園マリアさんに決定』ってリリアンかわらばんの号外を出す予定だから、これからインタビューとか写真とかよろしく頼むわね」
マリア像までの道すがら、真美さまが瞳子に鼻息を荒くして言う。
隣で日出美さんがやれやれと首を横に振り、瞳子に「ごめんさないね」と謝罪する。
こんな光景がひどく嬉しい。
「ええ、素晴らしい記事をお願いします。私も、号外が出るのを楽しみにしています」

瞳子が受けて立つという返すと、真美さまは拍子抜けした顔を浮かべた。
「笙子さんも、素敵な写真をよろしくね」
続いて、瞳子は笙子さんに声をかけた。
「もちろんよ」
笙子さんは、首から下げたカメラを掲げて頷く。
瞳子は笙子さんに近づき、こっそりと耳打ちをした。
「一つ聞きたいことがあるんだけれど」
「なあに」
「いつかの朝、笙子さんが撮ってくれたマリアのタイを直した写真って、まだ残っていたりするかしら？」
「ふふふ。ええ、実はデータは残してあるの」
瞳子は表情を明るくする。
「よかったら、一枚現像していただけないかしら？」
「もちろんかまわないわ。ただし、条件があります」
「条件？」
「ええ。学園祭の写真部展示コーナーにパネルで飾らせること」
それを聞いて、瞳子は「はぁ」と小さな溜息をついた。
こんなところまで蔦子さまに似てきて。
しかし、瞳子は背に腹は代えられないと頷く。
「のったわ」
「ありがとう」
まぁ、それも悪くないだろう。
一同が図書館のわき道を歩いて別れ道の手前まで来たとき――瞳子はふと、後ろを振り返った。
マリア、菜々ちゃん、蘭さん、そしてもう一人、日出美さんの妹のユリカさんが、四人並んでついて来ている。四人はとても楽しそうに会話をしていて、それが嬉しかった。
しかし、どこを見回してもお姉さまの祐巳さまがいらっしゃらなかった。
お姉さまは、どこに？

瞳子が考えると、隣から声が聞こえた。
「祐巳さまなら、どうしても連れてきたい人がいるって走って行ったわよ」
可南子さんが澄ました顔で言った。
「連れてきたい人？」
瞳子は誰だろうと首を傾げようとしたけれど、今は置いておくことにした。
「可南子さん、わざわざ来てくれてありがとう」
瞳子は、素直にお礼を言った。
こんな日があったっていい。
だって、それは瞳子の心から言葉なのだから。
「あたりまえよ、そんなこと。あたりまえ」
可南子さんも、素直にそう言ってくれる。
その目は赤く腫れていて、先程から全く瞳子と目を合わせないようにしている理由が、ありありと見て取れた。
「なんだか私たち気持ちが悪いわね」
「そうね、私たちらしくないわね」
「ふふふ」
「ふふふ」

５０　マリア様のお庭と薔薇の花かんむり

マリア様のお庭には、深い色の制服を着た生徒たちで溢れていた。どの生徒も天使のように無垢な笑顔を浮かべていて、とても楽しそうに会話をしている。

そんな光景を見たマリアは、とても幸せな気分でこれまで歩んできた道を見た。

ぜんぶ、この場所からはじまった道。

そして、これからもこの場所から続いていく道。

瞳子さまが繋いでくれた道。

赤い糸。

絆。

そして、大切な姉が示してくれた道。

導いてくれた世界。

今なら、姉がリリアン女学園に通いなさいと言った意味が、少しだけ分かるような気がした。

大切な仲間と、大切な絆が、この場所でならたくさん得られると、そう思ってマリアを送り出してくれたのだろう。

マリアは、それらを大切にしていこうと心から誓った。

これから先も、たぶん私はたくさんの失敗をして、たくさんの迷惑をかけて、たくさんの涙を流すと思う。

それでも、今日繋がった大切な絆だけは絶対に断ち切ることなく――しっかりと繋いでいこうと決意した。

「さぁ、マリアさん」

「マリアちゃん」

「マリアさん、瞳子さまが待ってるわよ」

菜々さん、ユリカちゃん、蘭さんがマリアを送り出す。

その先のマリア像の前には瞳子さまが待っていて、マリアを真っ直ぐに見つめている。

マリアは絆と仲間たちに背中を押されて、一歩前に踏み出した。

未来に続く一歩を。

「うん。いってきます」
お姉ちゃん、見ていてね。
☆
「マリア」
「瞳子さま」
自分の目の前にやってきたマリアを見つめた瞳子は、心の準備は良いかと視線で尋ねる。
すると、マリアは何も言わずに「はい」と頷く。
瞳子は一つだけ気がかりだったことを確かめるように、マリア様のお庭に集まって人々を見つめる。
お姉さまは？
すると、こちらに向ってくる二つの影。
祐巳さまが手を引いているのは、部長の典さまだった。
やれやれ。お姉さまったら、本当に妹バカなんだから。
瞳子は心の中でそう呟きながら、祐巳さまに心からの感謝をした。
そして、この場所に来てくれた部長にも心からの感謝を。
「ごめん。私たち待ちだった？」
マリア像の前にたどり着いた祐巳さまが、息を切らせて言う。部長はさすがのもので、息一つ切らさずに瞳子を見つめて小さく頷く。
「いえ、ちょうどです。お姉さま、ありがとうございます」
「うん」
瞳子の言葉を聞いた祐巳さまは、満面の笑みで言う。
それだけで、瞳子の胸に赤い薔薇の花が咲いた。
瞳子は全ての準備は整ったと、もう一度マリアに向き直る。
マリアはすでに準備はいいと、とても落ち着いていた。
今この瞬間、お互いの鼓動が聞こえてきそうなほどに――二人の世界は静かだった。

まるで、二人しかいないみたいに。
それなのに、瞳子はたくさんの絆を感じていた。
とても力強く、暖かい絆を。
「それじゃあ」
「はい」
長かった。
いろいろあった。
たくさんの困難や問題を乗り越えて、瞳子とマリアは姉妹（スール）という関係を手に入れようとしている。
二人がこの場所ではじめて顔を合わせて時から、二人のことを見てきたマリア様は、さぞかし気を揉んだことだろう。
今年のバレンタイデーの後、瞳子と祐巳さまはこの場所で姉妹（スール）の儀式を行った。
卒業式の日には、この場所で由乃さまと菜々ちゃんが姉妹（スール）の儀式を行った。
それ以前も、そしてこれから先も、このマリア様の前でたくさんの姉妹（スール）が生まれ、また生まれていくだろう。
自分たちも、そんな繋がって行く数珠の弾の一つに――マリア様に捧げるお祈りのための石の一つになれたことを嬉しく思う。
瞳子は、輪にして広げたロザリオを手に、マリアへと歩み寄る。
マリアは目を瞑り、少し膝を曲げて小さくなる。うつむき、髪の分け目を瞳子に向ける。
マリアの「どうぞ、お願いします」という声が聞こえたような気がした。
瞳子は何の迷いもためらいもなく、マリアの首にロザリオをかけた。マリアの長い黒髪を伝って、祐巳さまから頂いた大切なロザリオは、マリアの首元に吸い込まれるように落ちて行った。
瞳子がロザリオを手から離すと、かちゃり、と――綺麗な音がマリアの胸の上で鳴る。
その瞬間、二人は晴れて姉妹になった。
そして、瞳子の薔薇の花かんむりは完成した。

瞳子は最後に咲いた一輪の赤い薔薇を見つめて、マリア様に尋ねた。
「マリア様。私の絆でできた薔薇の花かんむりを、喜んでもらえますか」
「おめでとう」
「おめでとう」
「おめでとうございます」
大きな拍手とともに、おめでとうの言葉が咲き誇る。それはまるで美しいお花畑のように、瞳子とマリアを包み込んで祝福した。
マリアの手を取った瞳子は、大切な仲間たちに向き合う。
「私こと松平瞳子と隣にいる御園マリアは、ただいまのロザリオの授与を行い、正式な姉妹(スール)となりました。新米姉妹ですので慣れないことも多いと思いますが、暖かく見守ってください。よろしくお願いします」
瞳子が深々と頭を下げると、マリアも「よろしくお願いします」と続いて頭を下げた。
頭を上げると、直ぐに祐巳さまが駆け寄ってきて二人の手をとる。ぎゅっと強く握って、新しくできた絆の温もり感じようとする。
「瞳子、マリアちゃん、本当におめでとう」
「お姉さま、ありがとうございます」
「祐巳さま、ありがとうございます」
二人がお礼を言うと、祐巳さまは少しだけ瞳を滲ませて「これで私もおばあちゃまかあ」と感慨深げに言った。
「瞳子ちゃん、おめでとう。あなたなら、無事にお姉さまになれるって信じていたわ」
続いて、部長が瞳子を祝福してくれた。
「ありがとうございます。部長から頂いた御言葉のおかげです」
瞳子がにっこりと笑って言う。
「おめでとう」
「おめでとう」
「おめでとう」

菜々ちゃんと、蘭さん、ユリカさんがマリアに駆け寄り、精一杯のおめでとうの気持ちを伝えている。
「めでたしめでたしね。さて、これであとは乃梨子ちゃんが妹をつくってくれれば――薔薇の館は安泰ね」
由乃さまが腕を組んでしみじみと言う。
「今は、私の妹問題は関係ないと思いますが」
乃梨子が聞き捨てならないと抗議の声を上げる。
「そうかしら、お姉さまである志摩子さんも、乃梨子ちゃんの妹問題は気になるところよね？」
「そうねえ。私もおばあちゃまになってみたい気持ちはあるわね」
「志摩子さーん」
由乃さまの言葉に乗った志摩子さまを見て、乃梨子は悲鳴のような声を上げる。
「瞳子さん、本当におめでとう」
そんな一同を楽しげに眺めていた瞳子の隣に、可南子さんが立って言う。
「ええ、ありがとう。マリア、彼女が細川可南子さん。私の親友よ」
瞳子の紹介を聞いた可南子さんは、一瞬驚いたような表情を浮かべた後――とても嬉しそうに頬を赤らめた。
「はじめまして、御園マリアです。よろしくお願いします」
「はじめまして。細川可南子です。よろしくね」
二人は自己紹介をして会話をはじめた。
こんなふうに人と人は繋がって行くのだと瞳子は思った。
ロザリオの数珠のように。
お姉さまが、瞳子を見た。
瞳子も、お姉さまを見た。
何も言わないでいい。
大丈夫、二人は繋がっている。
「そうだっ、この後、薔薇の館で簡単なお茶会を開かいない？」
お姉さまは、不意にそんな提案をする。集まった人たちから「賛成」の声が上がり、それは賛成多数で可決された。

薔薇の館を開かれたものにする。
それはお姉さまが受け継いできた思いの一つだった。そしてこれからは、瞳子とマリアが受け継いでいく思いの一つ。
素敵なお茶会になる。
瞳子は、そんなことを思った。

――ほーほけきょ。

どこかでウグイスの声が聞こえた。
瞳子とマリアは、同時に空を見上げた。
そこには、マリア様の心のような広い青空が広がっていた。
「お茶会も良いですけど、その前に写真を撮りませんか？」
笙子さんの声が響いた、
「はいはい、みんな並んで」
続いて、蔦子さまの声。
「その後は新聞部のインタビューが待ってるんだからね」
「もう、お姉さまったら」
真美さまと日出美さんの声も続く。
「はーい、写真撮りまーす」
マリア様のお庭に集った乙女たちの天使のように無垢な笑顔が、いっせいに咲き誇る。
赤、白、黄色。
色とりどりの薔薇の花のように。

エピローグ　ごきげんようとごきげんよう

「マリア」
『『紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）のつぼみ逆指名事件』がひと段落して、一週間後の月曜日。
瞳子は、マリア像の手前で立ち止まっている妹を見つけて声をかけた。
「瞳子さま、ごきげんよう」
「ごきげんよう。何を立ち止まっているの？」
瞳子が尋ねると、マリアはちらとマリア像の先を見つめる。
マリア様のお庭では、今日もロザリオの授与を行っている一組の生徒。

「邪魔をしては悪いかなと思いまして」
「そうね。大切な瞬間だものね」
瞳子はなるほどと頷きながら、妹の胸元に手を伸ばす。そこにはほとんど乱れていないタイがあって、瞳子はそのタイを優しく撫でて直した。
「瞳子さま、ありがとうございます」
二人は、にっこりと笑って頷き合った。
「さぁ、行きましょう」
ロザリオの授与が終わるの見届けた瞳子とマリアは、薔薇の館に向おうとした。
「あ、祐巳さま」
すると、マリアが歩いてきた並木道を見て呟いた。
「お姉さま？」
瞳子も視線を向けると、確かにお姉さまの姿が。
そして、その隣にはもう一人別の女性。
「でも、隣にいらっしゃるのは誰でしょう？　私服ということはリリアン女子大？」
白のブラウスにジーンズ姿のラフな格好をしているのは、瞳子も良く知る大切な人だった。

「小笠原祥子さま。お姉さまのお姉さまよ」
「祐巳さまのお姉さまですか？」
マリアが、急に緊張したように姿勢を正す。
瞳子は、これはいい機会だと少しだけ意地の悪い笑みを浮かべる。
「マリア、せっかくだから祥子さまに挨拶に行きましょう」
「ええっ、心の準備が」
「なにを言っているの？　先代の紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまなんだから、『紅薔薇のつぼみ（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）』の妹であるあなたが挨拶をするのは当然でしょう？」
「そうですけれど」
「それにマリア、いずれ、あなたが紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまになるかもしれないのよ」
瞳子は、そう言ってマリアを真っ直ぐに見つめた。
「もちろん、私は次期紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまになるわよ。そうなれば、次はあなたの番かもしれない」
無理強いをするつもりはない。
紅薔薇（ロサ・キネンシス）さまになりなさいと言う気もない。
それでも、私たちはそうやって絆と伝統を繋いできた。
これまでも。
そして、これからも。
マリアは、瞳子の思いを受け取ったように――
「はい」と小さく頷いた。
二人はゆっくりと歩きだす。
「ごきげんよう」
「ごきげんよう。『紅薔薇のつぼみ（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン）』」
たくさんの生徒たちが、瞳子とマリアに「ごきげんよう」と声をかける。
絆を繋いでいくように。
隣には、大切な妹がいる。
目の前には、お姉さまと祥子さま。
薔薇の館には大切な仲間たち。教室にはたくさんの学友。
そして――

遠くの方でも「ごきげんよう」が聞こえてくる。
瞳子は、マリア様のお庭に咲き誇る「ごきげんよう」の挨拶に背筋を伸ばした。スカートのプリーツは乱さないように、白のセーラーカラーは翻らせないように、ゆっくりと歩くのがここでのたしなみ。
「瞳子さま、今日も素敵な朝ですね」
瞳子の気持ちを感じ取ったようなマリアがそう言って微笑む。
瞳子は「やれやれ」と首を横に振って、これまで引っかかっていたことを口にしておくことにした。
なんと言っても、これから祥子さまの前に立つのだから。
「マリア、今後、私は『瞳子さま』って呼ばれても返事しないわよ。いい加減――お姉さまと呼びなさい」
「えっ」
瞳子は、そのままツンと澄まして歩きだす。
「――えさま」
「聞こえなーい」
「お姉さまっ」
そう呼ばれて、瞳子は満面の笑みを浮かべて振り返った。
「よろしい」
「あっ、瞳子。それにマリアちゃん」
そんな姉妹水入らずのやり取りをしていると、祐巳さまが瞳子を見つけて声をかける。
「お姉さま、ごきげんよう」
「ごきげんよう」
また、「ごきげんよう」が咲き誇る。
マリア様の心のように澄んだ青空の下で。
そんな何気ない子羊たちの日常を、マリア様が微笑んで見守っている。マリア様の胸の中には、きっとサファイアのように美しい赤い薔薇の花かんむり。
それは、大きな大きな輪を描く素敵なロザリオ。
これからも続いていく絆の道。

「ごきげんよう」
「ごきげんよう」

了